

秘

全「ソ」聯邦共産党史（上卷）

外務省調査部

A56
R5
23



和
十
三
年
四
月
二
三
號



0006777001

0006777-001

A56-R5-23

全「ソ」聯邦共産党史

エメリヤン・ヤロスラフスキー・〔著〕

外務省調査部

上、下巻

1938. 4~5

ABF

全「ソ」聯邦共產黨史 上卷

贈
寄
野
新
毅

A56
R5
23



83W02852 3/5.38

凡 例

一、本書はエメリヤン・ヤロスラフスキーの著書 *История ВКП(б), 2-е изд., 1934.* の翻譯である。都合のため上下二巻となした。

これまでソ聯邦にはジノヴィエフ、ネフスキー、ポポフ、ブゾノフ等々の多数の黨史が發表されてゐるが、その中で本書が最も權威のあるものなることは等しく識者の認めるところである。

一、ソ聯邦の研究は共產黨史の研究を度外視しては不可能である。共產黨は現在ソ聯邦の一切の機關を動かしてゐるだけでなく、ソ聯邦史の原動力であると言ふも過言ではない。この意味で、ソ聯邦の根本的理解を求むる者は共產黨史に通曉してゐなくてはならない。本書はかゝる要求を充す上に尠からざる寄與を齎らすであらう。

一、著者ヤロスラフスキーは去る二月十七日六十回誕生日を迎へた老ポリシエヴィクで現在共產黨中央委員會附屬黨統制委員會の一員であり、同時に反宗教運動の闘士で戦闘的無神論者同盟の指導者である。現在黨内の有力な理論家で黨史の研究においてはその長い革命運

動經歷によつて、他の追隨を許さない。

一、本書上巻は一九一七年二月革命に至るまでのボリシェヴィキ黨の活動を取扱つたもので、如何にそれが小さな反革命的サークルからツァーリズムを打倒するほどの有力な黨に成長したか、如何にボリシェヴィキ黨がその發展過程において反對派と戦つたかを詳説してゐる。又新經濟政策時代及び五ヶ年計畫時代におけるトロツキー派、ブハーリン派の行動の萌芽は既に本書において充分に暗示されて居り、更に共產黨が情勢の變化に應じて戰術を如何に機敏に轉換するかも明瞭に畫かれてゐる。

一、人名索引は原著を少しく補追し上下巻纏めて作成の上、下巻の最後に附することにした。

昭和十三年四月

外務省調査部第三課

著者より

ソヴィエト聯邦におけるボリシェヴィキ黨および共產青年同盟は一九三三年の初め八百萬人以上の黨員を持つてゐる。だがそれらの周圍には、形式的には非黨員であるが、緊密に黨と結合された、労働者および農民の數千萬の活動分子がある。マルクスレーニン主義的啓蒙への憧憬は巨大に増大した。未だ嘗てなかつたやうに、マルクスレーニン主義の革命的理論は、數十年間にわたるボリシェヴィキの根強い活動によつて軟かにされた、豊饒な土地を見出してゐる。黨はプロレタリア革命とソヴィエト全國の社會主義的再組織によつて目覺めさせられた數百萬の新人を教育しつゝある。かゝる諸條件の下において、排他的に革命的内容に富む我黨の歴史は、大衆のボリシェヴィキ的教育の道具として特に重要な意義を帯びるのである。

全ソ聯邦共產黨史のこの意義は決してソヴィエト聯邦の境界内に局限されるものではない。全ロシア革命とその前衛部隊——全ソ聯邦共產黨との巨大な國際的意義は今や何人もこれを争ふことができない。全ソ聯邦共產黨は世界プロレタリア革命の突撃隊となつた。そしてその歴史は、全世界の労働者階級にとつて、勤勞者にとつて導きの糸である。

この課題から見て巨大な意義を持つてゐたものは、雑誌『プロレタリア革命』編輯部宛の同志スターリンの手紙『ボルシェヴィズムの歴史の若干の問題について』であつて、その中で同志スターリンは、黨史に關する私の諸著作もまた原則的および歴史的性質を有する多くの誤謬を含んでゐることを指摘した。これらの誤謬は我々の黨の批判によつて具體的に指摘された。

本教本は、基本的な點において、私の諸著作に對する同志スターリンの手紙の指摘および黨の批判に基いて注意深く書き直されたところの、私のこの前の全ソ聯邦共産黨史教本の資料および本文を基礎にして構成されたものである。これがために資料が著しく擴大され、そして國際的舞臺におけるボルシェヴィズムの役割、國際的日和見主義や中央主義に對するボルシェヴィズムの闘争、ブルジョア民主主義革命の社會主義革命への轉生の問題を解明する新しい頁が挿入された。

著者は本『全ソ聯邦共産黨史』の教師および讀者に向つて、再版に際してそれを考慮することができるやうに、自己の意見をお知らせ下さらんことを願ふものである。

目次

著者より……………一—

第一章 ボルシェヴィズムの歴史的準備……………一—

全ソ聯邦共産黨の役割と意義……………一。レーニン主義とは何ぞや……………六。何故ロシアはボルシェヴィズムの祖國であつたか……………一四。一八六一年の改革以前の革命運動。農民『解放』……………三三。ナロードニキの組織『土地と自由』……………三三。『人民の意思』黨と『土地改革』黨……………四一。労働者運動の第一歩……………四六。『南露労働者同盟』……………四七。『ロシア労働者北部同盟』……………四九。最初の労働者サークルと最初の労働者同盟の意義……………五〇。土地改革派……………五三。革命的ナロードニキの誤謬……………五五。革命的ナロードニキの功績……………五七。自由主義的ナロードニキ主義……………五八。第一章参考文献……………六四。

第二章 ロシアにおけるプロレタリアートの政治的へゲモニーのための闘争(『労働解放』團からロシア社會民主

労働者黨第一回大會まで)……………六五—一〇〇

『労働解放』團……………六五。マルクス主義の普及。最初の社會民主主義者サークル……………七三。合法的マルクス主義——『ブルジョア文獻におけるマルクス主義の反映』……………七七。『「人民の友」とは何ぞや、そして如何に彼等は社會民主主義者に對して闘争するか』……………八〇。『労働者階級解放闘争同盟』……………八四。第一回黨大會。第一回大會宣言……………九五。第二章參考文獻……………一〇〇。

第三章 黨のための闘争(崩壊、離散、動搖の時期。『イスクラ』

の闘争)……………一〇一—一三六

經濟主義者——ロシア社會民主労働者黨における日和見主義的流派……………一〇二。ズバトフ主義……………一二三。マハイスキー主義……………一二六。プロレタリア黨のための闘争における『イスクラ』……………一二八。レーニンの著書『何を爲すべきか?』の意義……………一三五。職業的革命家とは何ぞや……………一二九。第一革命の前夜國際的舞臺における日和見主義に對するレーニンの闘争……………一三三。ロシア社會民主労働者黨第二回大會に至るまでの黨史の三つの

時期……………一三六。第三章參考文獻……………一三六。

第四章 第二回黨大會と分裂時代……………一三九—一八〇

第二回黨大會の構成と意義……………一三九。『イスクラ』編輯部内における綱領問題に關する意見の相違……………一四〇。第二回大會におけるロシア社會民主労働者黨綱領の採用……………一四四。黨規約。黨員資格問題に關する意見の相違……………一四九。戰術問題。第二回大會と自由主義者に對する態度……………一五五。第二回大會と社會革命黨員(エス・エル)……………一五九。中央機關の選舉。組織的分裂……………一六一。——第二回大會の總結果……………一六四。第二回大會から一九〇五年の革命の初めまでの時代における黨内生活の概観……………一七〇。トロツキー主義の端初。第二回大會およびその後におけるトロツキー主義……………一七六。第四章參考文獻……………一七九。

第五章 一九〇五—一九〇七年の革命の性質および推

進力に對するボルシェヴィキの評価(メンシエヴィキ

およびトロツキー派に對する闘争)……………一八一—二五六

第一革命の前夜における情勢。大衆的革命運動……二八二。一九〇五年の革命の前夜における農民運動……二八四。日露戦争とボルシェヴィキの戦術……二九二。メンシェヴィキのゼムストヴォ運動計畫とボルシェヴィキによるその批判……二九四。一九〇五年一月九日『血の日曜日』……二九七。ロシア社会民主労働者黨第三回大會の召集。多数派委員會局……三〇三。『民主主義革命における社会民主黨の二つの戦術』……三〇七。ブルジョア民主主義革命の社会主義革命への轉生に關するレーニンの學說……三二四。トロツキの『永久革命論』……三三五。臨時革命政府への参加……三三三。武装暴動と總同盟罷業について……三三六。農民運動に對する態度……三三二。他の黨に對する態度……三三三。第三回黨大會における組織問題……三四五。メンシェヴィキ會議とその日和見主義的決議……三四九。第五章參考文献……三五五。

第六章 一九〇五—一九〇七年の革命の進行中における

ボルシェヴィキ黨の戦術の點檢……三五七—三九六
 武装暴動への途上……三五七。一九〇五年十月の總同盟罷業……三六三。一九〇五—一九〇

七年の農民運動……三六五。革命に對する自由主義者の態度と彼等に對する我々の態度……三六九。一九〇五年の革命におけるソヴェトの意義……三七〇。一九〇五年十二月武装暴動……三七六。國會に對する黨の戦術。國會のボイコット。ボイコットの破棄……三八四。第六章參考文献……三九五。

第七章 十二月暴動と反動時代との間……三九七—三四〇

一九〇五年十二月のタンメルフォルス會議。統一戦線の戦術……三九七。第四回ストックホルム統一大會とその決議……三九五。ストックホルム大會の戦術的決議……三二一。第四回大會と第五回大會との間における黨の闘争……三三三。ロシア社会民主労働者黨第五回ロンドン大會。その構成……三三九。ロンドン大會における民族的社會民主主義組織。中央主義との闘争……三三〇。ロンドン大會における戦術問題……三三四。『労働者大會』および『廣汎な労働者黨』に關するメンシェヴィキ的觀念の暴露……三三七。労働組合とそれに對するボルシェヴィキの態度……三三三。一九〇五—一九〇七年の革命の敗北の原因。ボルシェヴィキの評価……三三五。第七章參考文献……三三九。

第八章 第一革命時代の大量闘争の指導における党 ……三六一—三六九

ロシアにおける労働者階級の組織の特殊条件……三六一。組織は如何に建設されたか……三六二。第一革命時代における我党の数的および社会的構成……三六六。組織における選挙主義……三六七。労働者出版物は如何に組織されたか……三五〇。農民層および学生の中における党の活動は如何に組織されたか……三五三。陸海軍におけるボルシェヴィキの革命的活動……三五八。ボルシェヴィキの戦闘的行動……三六三。党とバルチザン闘争および收奪……三六六。失業者會議……三七二。党の活動資金は何處から得られたか……三七三。第一革命時代における第二インターナショナルの日和見主義に對するボルシェヴィズムの闘争……三七四。第一革命の總結果……三六二。第八章参考文献……三八八。

第九章 反動時代と革命の退却（一九〇七—一九一〇年）……三九一—四三六

六月三日制度の経済的および社会的本質……三九一。政府の反革命と社会的反動……三九七。メンシェヴィキ清算派と彼等に對するボルシェヴィキの闘争……四〇三。召還派と最後通牒派——「裏返しにした清算派」としての……四〇五。建神主義および搜神主義に對する党の闘争……四〇九。「左翼清算派」の『フペリョード』グループへの統一……四二〇。ボルシェヴィキの戦術的および組織的方針。この時期における党中央部の會議……四二四。一九〇八年の全露黨會議……四二八。一九〇九年六月の『プロレタリア』編輯部擴大協議會……四三二。トロツキーの中央派的立場とボルシェヴィキの中における和解主義に對する闘争……四三三。一九一〇年中央委員會一月總會……四三六。ボルシェヴィキと黨員メンシェヴィキとのブロツク……四三三。第九章参考文献……四三五。

第十章 新しき昂揚期における党（一九二一—一九二四年）……四三七—五〇〇

新しき革命的昂揚の開始……四三七。一九二二年四月四（十七）日のレナの銃殺……四三九。大衆的労働者組織のための闘争……四四二。党の新聞『ズヴェズダー』の意義……四四四。雑誌『ムィスリ』と『プロスヴェシチニエ』……四四七。ボルシェヴィキ新聞『ブラウダ』と『ナーシュ・プリーティ』……四四九。一九二二年のブラーグ會議と黨史におけるその意義……四五三。一九一三年の黨協議會（クラコフおよびポローニン協議會）……四六〇。反ボルシェヴィキ

的『八月プロック』……四六七。ウィーン『ブラウダ』と雑誌『ポリバー』およびそれらに對するボルシェヴィキの闘争……四七〇。デューマ・フラクションの分裂……四七七。保險運動……四八一。昂揚時代における黨の成長……四八三。二つの革命の中間期の國際的舞臺におけるボルシェヴィズム……四八六。第十章参考文献……四九九。

第十一章 帝國主義戦争(戦争の評價とボルシェヴィキの戦術)……五〇一—五三三

帝國主義と世界戦争の原因……五〇一。第二インターナショナルの崩壊……五〇六。防衛的主戦論者と社會排外主義者……五三三。中央派——隱蔽された社會排外主義者……五二五。戦争に對するボルシェヴィキの態度……五二九。民族自決のスローガンとローザルクセンブルグその他の立場について……五三四。ボルシェヴィキと『軍備撤廢』のスローガン……五三〇。第十一章参考文献……五三三。

第十二章 帝國主義戦争時代における黨の活動 ……五三三—五六三

ボルシェヴィキ・デューマ・フラクションに對する裁判……五三三。一九一五年のボルシェヴィ

キのベルン會議。チンメルワルドおよびキーンタールにおける會議……五三七。戦時におけるロシアの黨組織および黨活動の状態……五五〇。戦争時代におけるロシアの勞働者運動……五五九。二月革命……五五六。第十二章参考文献……五六三。

人名索引 ……五六五

第一章　ボルシェヴィズムの歴史的準備

全ソ聯邦共産黨の役割と意義

世界における最初の社會主義プロレタリア革命は一九一七年十月ロシアにおいて勝利した。一九〇三年に組織的な政治的流派として発生したボルシェヴィキ黨は、この革命まで十五年間、マルクス・エンゲルスの科學的社會主義の堅固な基礎の上に、レーニンの天才的な指導の下に、勞働者階級の闘争のすべての形態、すべての現はれを指導した。ロシアのプロレタリアートは、自己の力に應じて直ちに社會主義革命に移行するといふ條件で、ブルジョア民主主義革命を最後まで推し進めるために、都市および農村の數百萬の勤勞者大衆の首領、指導者として進出した。最初の社會主義プロレタリア革命の巨大な國際的意義と新しい型の國家——ソ、ヴ、イ、エ、ト國家の建設、無階級的社會主義社會の建設のための凱旋的闘争は、今や我々の敵によつてさへ認められてゐる。

この闘争の歴史の研究、レーニンの黨の歴史の研究は、だから、我國の勞働者階級および勤勞者大衆にとつても、また、或る者は自己の『一九〇五年』を、他の者は自己の『一九一七年』、自

己の『十月』を経験すべきまだ独自の情勢に當面してゐるところの、すべての他の國の労働者階級にとつても、極めて重要な意義を持つてゐる。

革命的事件の豊富なことにおいて驚くべきこの歴史、労働者階級によつて指導される大衆の排他的なヘロイズム、革命運動の種々雑多の形態を理解するには、我々は先づ第一にボルシェヴィズムの道程、その水源、國際的闘争舞臺およびロシアにおけるその根源を研究しなければならぬ。何故正にロシアにおいてボルシェヴィズム學説が発生し且つ發展したか、何故他の國々よりも早く正にロシアにおいてプロレタリア革命が勝利したかを指示しなければならぬ。

ロシアにおける労働者運動は、ヨーロッパの多くの資本主義國におけるよりも遙かに晩く、組織的な運動として發生した。だがボルシェヴィズムは先づ第一に、最も徹底的な、最も革命的な社會主義的科學理論と大衆的組織的労働者運動との結合である。ロシアにおいて労働者階級が革命の決定的指導的な推進力として進出した時、この國家の經濟的および政治的制度的中には、ただ數百萬の労働者のみならず、數千萬の農民や廣汎な都市貧民層もまた、地主的警察的國家に對して激烈な階級的憎惡を懷いたやうな、農奴制の殘存物が残つてゐた。かくして労働者階級は自己の組織的闘争の最初から數百萬の農民層およびツァーリズムによつて抑壓された諸民族の共鳴

の上に立つて行動し、そしてすべての民主主義的要素の先頭に立つことができたのである。

ロシアのブルジョアジーは革命的ブルジョアジーではなかつた。一七八九年のフランス大革命や、ブルジョア歴史家が『狂氣の年』と呼んだ一八四八年のブルジョア革命の實例、そして特に一八七一年のバリ・コンミュニンの實例は、ロシアのブルジョアジーをして君主制、ツァーリズムとの協調を求め、大衆の無權利の最も忌むべき現はれと和解し、『異民族』と認められた數十民族の民族的抑壓に協力することを餘儀なくさせた。自由主義的ブルジョアジーをも含めて、ロシアのブルジョアジーは、資本主義の新しい發展段階においては——帝國主義時代においては——プロレタリアートがその先頭に立つロシアにおける革命が、ブルジョア民主主義革命に止まることのできないこと、それが不可避的に社會主義に向つて歩を進めざるをえないであらうといふことを明確に意識してゐたのである。

經濟的に多くの根によつて地主經濟と結合され、多くの國家の注文を受けたロシアのブルジョアジーは、ただ人民大衆の革命を、——ブルジョアジーに向けられざるをえなかつた革命を避けることができれば、地主と協調する準備があつた。また眼中に置かなければならぬことは、ロシアにおける資本主義が西ヨーロッパにおけるよりも著しく晩く、『太陽の下における餘地』がす

でに大體において分割された時に發展したことである。ツァーリズムにおいて、ロシアのブルジョアジーのかなりの部分は、新市場の征服および奪取におけるこのロシアのブルジョアジーの利益を擁護しうる力を見た。ロシアにおいては労働者階級は獨立の政治的勢力として成長した。だからロシアのブルジョアジーは革命的ブルジョアジーではなかつたのである。

かくして歴史はロシアの労働者階級をブルジョア民主主義革命の指導者、首領の役割に推し進めた。歴史はロシアのブルジョア民主主義革命が社會主義革命の序曲となり、それが直ちに社會主義革命に轉生するやうに、ブルジョア民主主義革命を完成すべき任務を課した。一九一七年の革命の経験は、その内容において社會主義的なプロレタリア革命が、通りすがらブルジョア民主主義革命の任務を完成したことを示した。

かくして我國の労働者階級はボルシェヴィキ黨の指導の下に極めて偉大な歴史的任務を遂行した。彼等は、科學的社會主義の創始者によつて、——マルクスおよびエンゲルスによつて、——その力と歴史的豫見とにおいて驚くべき『共產黨宣言』に記された綱領を、他の國々の労働者階級よりも早く實現した。一八四八年マルクスおよびエンゲルスは次のことを豫見した、『労働者革命における第一歩は、プロレタリアートを支配階級へ高めること、民主主義を戦ひ取ることで

ある。

『プロレタリアートは自己の政治的支配をば、ブルジョアジーからすべての資本を一步步引離すこと、すべての生産要具を國家、即ち支配者階級として組織されたプロレタリアートの掌中に集中すること、そして生産力の總體をできる限り速かに増大することのために利用する*』と。

* マルクスおよびエンゲルス、共產黨宣言、三五頁、黨出版所、一九三二年刊。

『共產黨宣言』が先進資本主義諸國において實施すべく豫定してゐた具體的諸方策は、その大部分において我國で共產黨の指導の下に久しい以前から實施されてゐる。

ロシアの共產主義者——ボルシェヴィキがかかる偉大な任務を遂行しえたのは、彼等がレーニンの指導の下にプロレタリア革命家の諸特徴を自己のうちに最も完全に體化してゐたからである。即ち彼等は、『共產黨宣言』の言葉で表現すれば、『一方では、種々の民族のプロレタリアの闘争において、彼等が民族の如何に拘らず全プロレタリアートの一般的利益を力説し且つ主張することによつて、他方では、プロレタリアートとブルジョアジーとの闘争が通過する種々の發展段階において被等が常に全運動の利益を代表することによつてのみ、爾餘のプロレタリア黨と區別される。

『従つて共產主義者は萬國の労働者黨の最も決定的な、常に運動を前進せしめる部分である。彼

等は理論的にはプロレタリアートの爾餘の大衆よりも優れて、プロレタリア運動の諸條件、進行および一般的諸結果に對する洞察を持つてゐる*。レーニンは『共産黨宣言』のこれらの要求を『この先進的階級（即ちプロレタリアート——著者）の最も意識的、精力的、革命的な部分、眞の前衛』といふ言葉を以て表現した。

* 同上、二九頁。

我國のプロレタリアートによる革命の任務の正しい、ボルシェヴィキ的、レーニンの理解は、我黨の長期にわたる組織的および煽動的宣傳的活動の結果であり、數十年間における複雑な階級闘争の結果であつた。

レーニン主義とは何ぞや

ロシアはマルクスレーニン主義の理論を、レーニンの言葉でいへば、文字通りに苦しんで得たのである。『唯一つの正しい革命的理論としてのマルクス主義を、ロシアは未聞の苦痛と犠牲、未曾有の革命的ヘロイズム、信じ難いエネルギーと探求の熱烈、訓練、實際の試験、失望、吟味、ヨーロッパの經驗の對照の半世紀の歴史によつて苦しんで得たのである*。』レーニンはこの唯一

の正しい理論を新しい、より高い段階に引き上げ、この理論を新しい經驗に基いて階級闘争の新しい諸條件の下に獨立的に發展させた。

* レーニン、第二十五卷、一七五頁。本書においては今後また全集第三版によつて引用することにする。

同志スターリンはレーニン主義の正しい定義を與へてゐる、『レーニン主義は帝國主義とプロレタリア革命との時代のマルクス主義である。一層正確にいへば、レーニン主義はプロレタリア革命一般の理論および戰術であり、特にプロレタリアートの獨裁の理論および戰術である*』と。

* スターリン、レーニン主義の諸問題、六頁。カ點は筆者のもの——ヤロスラフスキー。

これは資本主義がその最高の段階——帝國主義にまだ移行しなかつた時代に、マルクスおよびエンゲルスによつて作り上げられたその科學的社會主義を、レーニンが『……發展せる帝國主義の時代に、プロレタリア革命がすでに一國において勝利し、ブルジョア民主主義を打破して、プロレタリア民主主義の時代、ソヴェエトの時代を開いたところの展開されたプロレタリア革命の時代に*、新しい經驗に基いて、プロレタリアートの闘争に基いて、發展させ且つ補充したことを意味する。

* スターリン、レーニン主義の諸問題、六頁。

レーニンと彼の支持者（一九〇三年以來——ボルシェヴィキ）は労働者階級の中におけるその革命的活動をまだロシアにおける大衆的労働者運動が漸く生れたばかりの時に開始した。西ヨーロッパにおいてはそこで形成された第二インターナショナルの社会民主黨が議會主義による誘惑の時代を経験した。これらの黨においては、全世界において労働者階級に對するブルジョア的および小ブルジョア的影響の案内者であつた日和見主義者が支配した。

だから第二インターナショナルの日和見主義との闘争はプロレタリア革命の成功の前提條件であつた。レーニン主義はただロシアにおけるナロードニキ主義、經濟主義、メンシェヴィズム、清算主義、無政府主義の如き種々の日和見的ブルジョアの流派とのみの闘争のうちに成長し且つ強化したのではない、——日和見主義との闘争は最初から國際的意義を持ち、ただロシアの舞臺においてのみならず、國際舞臺においても戦はれたのである。レーニン主義は徹底的にプロレタリア革命の觀念に浸されてゐる、『……それは第二インターナショナルの日和見主義との格闘のうちに成長し且つ強化した、これとの闘争は資本主義との成功的な闘争の必要な前提條件であつた。』^{*}

* スターリン、レーニン主義の諸問題、六頁。本書においては今後もまた第九版、黨出版所、一九三二年刊によつて

引用することにする。

レーニンの學說の最も重要な部分を成すものは、プロレタリアートの獨裁や、それを目差す闘争の方法や、その實現の諸形態や、その諸任務に關する學說である。マルクスがプロレタリアートの獨裁の問題を彼の最も初期の諸著作において、『共産黨宣言』や、『哲學の貧困』において提起したと同様に、レーニンもまた彼の最も初期の諸著作において、——一八九四年の『人民の友』とは何ぞや、そして如何に彼等は社會民主主義者に對して闘争するか』や、『ロシア社會民主主義者の任務』において、この問題を極めて明瞭に提起した。ボルシェヴィズムの功績は、レーニンが彼の活動の最初から、正にこの問題においてマルクス主義をブルジョアジーのために賈造した人々に對して進出したことにある。第二インターナショナルの日和見主義者は、マルクスがプロレタリアートの獨裁を決して眞面目に提起したことはない、といふことを證明しようとする努力をした。マルクスは單に偶然青年時代にプロレタリアートの獨裁といふ『一言』を口滑らしたにすぎない、とさへカウツキーは斷言した。第二インターナショナルの日和見主義者——社會ファシスト——は、近代ブルジョア民主主義はプロレタリアートの獨裁と權力のための革命的闘争方法とを不用ならしめてゐる、と斷言した。また斷言してゐる。

然るにマルクスは、プロレタリアートの獨裁に關する學說こそ正に彼が階級闘争に關する學說において與へた新たなものであることを、一再ならず主張した。一八五二年三月五日附ワイデマイヤール宛の手紙において、マルクスは、階級闘争並びに近代社會の諸階級への分裂そのものは、すでに彼以前にブルジョア歴史家によつて記述されてゐることを説明してゐる。『私が新たになしたことは、——とマルクスは書いた、——次のことを證明したことにある、即ち(一)諸階級の存在は生産の發展に固有な一定の歴史的闘争とのみ結びついてゐること、(二)階級闘争は必然的にプロレタリアートの獨裁に導くこと、(三)この獨裁はただ一切の階級の廢絶と無階級社會への過渡を成すにすぎないこと、これである*』と。

* カール・マルクス五十年忌に關するマルクス・エンゲルス・レーニン研究所のテーゼ、黨出版所、一九三三年刊、六頁より引用す。

マルクスはこの理論を、一八七五年のドイツ社會民主黨の『ゴータ綱領批判』をも含めて、その多くの著作において發展させてゐる。レーニンはこの思想をマルクス主義のすべての偽造者に對して擁護しなければならなかつた。黨の綱領が作成された『イスクラ』編輯部においてもまた、レーニンはブレハーノフの黨綱領草案に對して極めて本質的な修正を提出した。レーニンはプロ

レタリアートの獨裁に關する點を綱領に含ませることを提起した。そしてボルシエヴィキ黨のため
の闘争においては、革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーの問題が最も重要な地位を占め
たが、それといふのも正に革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーこそはプロレタリアート
による權力の奪取——プロレタリア獨裁の必要條件であつたからである。だからレーニンは、階
級闘争を『承認』しながら、プロレタリアートの獨裁を否認した背教者カウツキーに答へて、か
う書いたのである——

『マルクスの學說における主要なものは階級闘争である。人々は極めて屢々かく語り且つ書く。
しかしこれは正確でない。そしてこの不正確からマルクス主義の日和見主義的歪曲、ブルジョア
ジーにとつて認容されうる精神でのその細工が全面的に生ずる。何故なら階級闘争説はマルクス
によつてではなくて、ブルジョアジーによつてマルクス以前に作り出されたものであり、そして
ブルジョアジーにとつて、一般的にいへば、認容されうるものだから。ただ階級闘争のみを承認す
る者は、またマルクス主義者ではない。……マルクス主義を階級闘争説に局限することは、マ
ルクス主義を切り縮めること、それを歪曲すること、それをブルジョアジーにとつて認容されう
るものに還元することを意味する。ただ階級闘争の承認をプロレタリアートの獨裁の承認にまで

擴張する者のみが、マルクス主義者である*。』

* レーニン、第二十一卷、三九二頁。

プロレタリアートの獨裁に關するマルクスの學説はボルシェヴィキの指導の下に十月革命の生活のうちには體化されたのみではない。それは資本主義の最後の段階の時代——帝國主義時代における社會主義の勝利のための闘争の特殊な諸條件の下において、レーニンによつて獨立的に發展させられた。それはコミンテルンの綱領の最も重要な部分となつた。新しい型の國家——プロレタリア的ソヴェト國家としてのプロレタリアートの獨裁の實現は、我黨の最も偉大な功績である。プロレタリア革命とブルジョアジーの抑壓との最も重要且つ最も強力な道具であるプロレタリア獨裁は、『勤勞者の前衛たるプロレタリアートと多數の非プロレタリア的勤勞者層（小ブルジョアジー、小經營者、農民層、インテリゲンチヤ等々）またはそれらの大多數との間の階級的同盟、資本に對する同盟、資本の完全な廢棄、ブルジョアジーの抵抗およびブルジョアジーの側からの復古の企圖の完全な抑壓を目的とする同盟、社會主義の決定的創造と鞏固化とを目的とする同盟の特殊な形態』*として實現されたのである。

* レーニン、第二十四卷、三一頁。カ點は筆者のもの——ヤロスラフスキー。

だから革命におけるプロレタリアートの同盟者の問題は巨大な意義を持つてゐる。

『それは當然でもある、即ち權力に向つて進み且つ準備してゐる者は、自己の眞實の同盟者の問題に關心を持たざるをえないのである。』

『この意味において農民問題はプロレタリアートの獨裁の問題の一部分であり、そしてかかるものとして、レーニン主義の最も興味ある問題の一つである*。』プロレタリア革命期においては同盟者としての農民層の問題は、『その存在の或る條件の故に、農民層の胎内に融けこんである革命的可能性が、すでに汲み盡されてゐるかどうか、そしてもし汲み盡されてゐないとするれば、この可能性をプロレタリア革命のために利用し、農民層を、その搾取されてゐる大多數を、それが西歐のブルジョア革命の時代においてさうであつたし今日もまたさうであるところのブルジョアジーの豫備軍からプロレタリアートの豫備軍に、その同盟者に、轉化する望み、基礎があるか?』**』といふ問題である。レーニン主義は、資本主義に對する勞働者階級の闘争を地主に對する農民層の闘争と結びつけることが如何に必要であるかを教へる。レーニン主義は常に勤勞農民大衆を權力のための闘争におけるプロレタリアートの豫備軍と見た。被抑壓民族の解放運動もまたプロレタリア革命の同じやうな豫備軍であつた。

* スターリン、レーニン主義の諸問題、三七頁。

** 同上。

プロレタリアートの獨裁に關するレーニンのこの學説は、レーニンの死後同志スターリンによつて、全面的な社會主義的再組織、國の工業化および全農業の共營化が進行しつつある國民經濟の改造期に、資本主義的要素の遺物に對する廣汎な社會主義的攻撃の時期に、發展された。階級としてクラーク層の清算と無階級社會の創造のための道の清掃とは、プロレタリアートの獨裁と結びついた多くの問題の理論的および實踐的な仕上げを要求した。これらの問題の仕上げはこの時期の最大の任務の實現とは、同志スターリンの指導の下に労働者階級とその黨によつて遂行されたのである。

何故ロシアはボルシェヴィズムの祖國であつたか

帝國主義は資本主義社會の一切の矛盾を極端に尖鋭化した。マルクスとエンゲルスが一八四八年に『妖怪がヨーロッパを徘徊する——共產主義の妖怪が』と書いた共產主義は、妖怪ではなくなつた、それは巨大な革命的勢力となり、大衆を獲得し、彼等の意識に入り、彼等の政治的綱領となつた。帝國主義は『死滅しつつある資本主義』である(レーニン)。それは労働と資本との間の矛

盾を極端な尖鋭化に導き、帝國主義はプロレタリアートをプロレタリア革命の不可避性に當面させる。帝國主義は種々の資本主義グループおよび國家の間の關係を尖鋭化し、益々新しい、益々法外な軍備と、その一切の犠牲が労働者と勤勞農民大衆との双肩に課せられる帝國主義戦争との不可避性を喚び起す。プロレタリア革命の外には、この益々尖鋭化する矛盾からの出口はない。最後に『……帝國主義は極めて廣大な植民地および隸屬諸國の數億の人口の最も厚顔な搾取と最も非人間的な抑壓である。超過利潤の絞取——これがこの搾取とこの抑壓との目的である*』。

* スターリン、レーニン主義の諸問題、七頁。

しかしそれと同時にそれらの植民地的および半植民地的な國においては、大衆の民族のおよび階級的自覺が成長し、これと共に、帝國主義のうちに自己の死刑執行人を見るところのこれらの大衆の革命運動が成長する。帝國主義のこれらの矛盾は、大なり小なりの力を以て、すべての帝國主義國において作用してゐる。それはレーニン主義がその中で發生し、發展し且つ強まつた國際的情勢を成してゐる。

舊ツァール・ロシアにおいてはすべてのこれらの矛盾が特に強く現はれた。労働と資本との間、農民と地主との間の闘争、獨立的存在を求める數十民族の闘争は、ツァール專制政治の官僚的、警

察的および軍事的機構の一切の力によつて最大の残酷さを以て抑壓された。ツァール・ロシアは一聯の國々——トルコ、ペルシャ、支那にとつての獨立的存在の永久的脅威であり、そしてツァール・ロシアはこれらの國の割當において他國の帝國主義者を助けたのである。掠奪的な經濟と西歐の先進資本主義諸國に比較しての經濟的立後れとのために、ツァール・ロシアは外國資本による大衆の搾取が華かに榮へた國であつた。『ツァーリズムはただヨーロッパの東部における帝國主義の番犬であつたのみならず、更にバリヤやロンドン、ベルリンやブリュッセルにおいて募集された外債の何億といふ利子を住民から絞り出すための西歐帝國主義の代理人であつた*』。

* スターリン、レーニン主義の諸問題、九頁。

帝國主義戰爭の時代には、すでに十九世紀末および二十世紀の初めに存在したロシア帝國主義の軍事的、封建的性質が特に強く現はれた。『ロシアにおいては、——とレーニンは一九一五年に書いた、——最新型の資本主義的帝國主義が、ペルシャ、滿洲、蒙古に對するツァーリズムの政策において完全に自らを示したが、一般にロシアにおいては軍事的および封建的帝國主義が支配してゐる*』と。帝國主義戰爭においてツァーリズムはただ新しい領土の占領、新しい民族の抑壓の手段を見たのみならず、又『注意を國內における不滿の増大から外らし且つ成長する革命運動

を壓迫する手段』をも見た。『……異民族を抑壓し且つ掠奪する可能性は經濟的停滯を強化する、何故なら生産力の發展の代りに往々「異民族」の半封建的搾取が収入源泉であるからである。かくしてロシアの側から戰爭は二重の反動性と反自由的性質とによつて特徴づけられる**』。レーニンはロシア帝國主義の特殊性の一つをかう特徴づけた。

* レーニン、第十八卷、一九八頁。

** 同上、一九八一—一九九頁。

ロシア帝國主義のこの特殊性は、ロシアにおける人民革命が艱難のうちに鍛練されたところの労働者階級を、革命の根本問題の一つ——農業問題を農民流に解決しようとする志してゐた數千萬の農民層との同盟のうちに、ツァーリズムに對して、地主的土地所有に對して、反革命的ブルジョアジエに對して起ち上らせたことによつて、一層大なる意義を持つてゐた。かかる情勢のうちにレーニンの黨は最大の革命の先頭に立つたが、この革命は最初のプロレタリア革命に轉化し、國際社會主義革命の端緒となつた。一八四八年に革命運動の中心がドイツへ移動したとすれば、十九世紀末—二十世紀初頭にはこの中心は益々ロシアへ移動した。一九〇二年レーニンは小冊子『何を爲すべきか?』の中にかう書いた。『歴史は今や我々の前に、他のいづれの國のプロレタリアー

トのすべての緊急任務のうちで最も革命的なものであるところの緊急任務を提起した。この任務の實現、ただヨーロッパ的なのみならず、また（今や我々はいふことができるが）アジア的反動の最も強力な防壁の破壊は、ロシアのプロレタリアートを國際的革命的プロレタリアートの前衛たらしめるであらう。そして我々は、もし我々が千倍も廣汎且つ深刻な運動において同じやうな熱烈な決斷とエネルギーによつて我々を鼓舞することができらば、すでに我々の先輩、七〇年代の革命家によつて獲得されたこの名譽の使命を達成するであらう、と考へてよい*』と。

* レーニン、第四卷、三八二頁。

されば、革命運動の中心がロシアへ移動した時、ロシアに革命的プロレタリアートの黨が発生した時、それは、レーニンの指導の下に、新しい型の黨となつた。即ちそれは最初から第二インターナショナルの胎内におけるあらゆる種類の日和見主義に對して非妥協的な戰を宣言した。それは新しい、第三共産インターナショナルの基礎を据ゑた黨となつた。ロシアはレーニン主義——帝國主義とプロレタリア革命との時代の革命的學說の祖國、發生地となつた。

ロシアにおける革命のこの國際的意義を、カール・カウツキーの如き人々でさへ嘗て認めたのである。即ち『……カウツキーがまだマルクス主義者であつて、背教者でなかつたずつと

以前のことに、彼は、歴史家としてこの問題を取扱ひ、ロシアのプロレタリアートの革命性が西ヨーロッパにとつて模範となるやうな情勢の到來が可能なることを豫見した。これは、カウツキーが革命的「イスクラ」に「スラヴ人と革命」といふ論文を書いた一九〇二年のことであつた*。この論文においてカウツキーは革命的中心のロシアへの移動について書いた。彼はかう聲明した、『ロシアはずつと以前からすでに西ヨーロッパにとつて反動と絶對主義との單なる防壁ではなくなつた。事態は今や、恐らく正に正反對である。西ヨーロッパはロシアにおける反動と絶對主義との防壁となりつつある』と。ロシアの軍隊がヨーロッパにおける革命を抑壓した一八四八年におけるロシアの反動的役割と比較しつつ、カウツキーはかう書いた、『一八四八年にはスラヴ人は國民の春の花を害した嚴寒であつた。今や恐らく、スラヴ人は、反動の堅氷を粉碎して、新しい、喜ばしい春を諸國民のために確實に齎すところの嵐となるべく運命づけられてゐる**』と。

* レーニン、第二十五卷、一七二頁。

** カウツキー。レーニン、第二十五卷、一七二—一七三頁によつて引用す。

マルクスおよびエンゲルスの學說が資本主義時代、その『繁榮』の時代における萬國の革命的闘争の經驗を一般化したものであると同様に、レーニン主義は新しい時代、帝國主義とプロレタ

リア革命との時代における萬國の革命的闘争の経験を一般化したものである。一九一八年十一月七日マルクスおよびエンゲルスの記念碑の定礎式に際して、レーニンは革命の発展にとつてのマルクスおよびエンゲルスの意義を次の言葉によつて評價してゐる——

『マルクスおよびエンゲルスの偉大な世界史的功績は、彼等が資本主義の崩壊および人による人の搾取のものはや存在しない共産主義への資本主義の移行の不可避性を科學的分析によつて證明した點にある。』

『マルクスおよびエンゲルスの偉大な世界史的功績は、彼等が萬國のプロレタリアに彼等の役割、彼等の任務、彼等の使命を、即ち資本に對する革命的闘争の先頭に立つこと、この闘争において自己の周圍に一切の勤勞者および被搾取者を結合することを指示した點にある*』と。

* レーニン、第二十三卷、二七六頁。

マルクスおよびエンゲルスは最初の『共産主義者同盟』および第一インターナショナルの組織者であつた。彼等は第二インターナショナルの組織に際してもまたあらゆる形の日和見主義に對して終生非妥協的な闘争を行つた。レーニンと彼によつて作られたボルシエヴィキ黨とは彼等の闘争を繼續した。

レーニンは世界共産黨——第三共産インターナショナルの組織者となつた。レーニンと彼によつて作られたボルシエヴィキ黨との偉大な世界史的功績は、それらが全國際プロレタリアートにプロレタリア革命の正しい革命的理論と戰術、プロレタリアートの獨裁の理論と戰術との模範を與へた點にある。

そしてかかる正しい理論なくしてはプロレタリア革命の勝利、ソヴェト聯邦における社會主義の勝利は考へられなかつたであらう。レーニンは闘争の成功にとつての革命的理論の意義を一再ならず力説した。理論を蔑視する者、マルクスレーニン主義の理論を研究することを欲しない者は、共産主義者ではない。正しい革命的理論は、それが大衆を掴む時には、極めて大なる力となる。『革命的理論なくして革命運動はありえない』——とレーニンは述べた*。『先進的闘士の役割は、ただ先進的理論によつて指導される黨のみがこれを遂行することができる*』。レーニン主義の理論のヨリ以上の仕上げのために極めて多くことをなした同志スターリンは、また全力をこめて次のことを力説した、『……もし理論が革命的實踐と不可分の聯關に置かれるならば、それは勞働者運動の最も大きな力となることができる。何故ならそれは、そしてただそれのみが、運動に確信、方向測定力およびそれを取り巻く諸事件の內的聯關の理解を與へることができるか

ら、何故ならそれは、そしてただそれのみが、ただ諸階級は現在如何にまた何處へ進むべきかといふことのみではなくて、それらは近い將來において如何にまた何處へ進まなければならぬかを實際に理解することを助けることができるからである***』と。

* レーニン、第四卷、三八〇頁。

** 同上。

*** スターリン、レーニン主義の諸問題、一七頁。

理論の蔑視は往々日和見主義的誤謬と偏向との源泉である。だからすべての共産主義者はマルクスレーニン主義の理論を研究する餘暇と餘力を見出さなければならぬ。全ソ聯邦共産黨史の研究はこの理論的學習の一部分である。一九三一年『プロレタリア革命』編輯部宛の同志スターリンの手紙は、歴史の多くの基本問題を提起し、若干の歴史的著作において行はれた原則的および歴史的誤謬を批判し、それによつて黨史の研究を大なる原則的高所に置いたのである。

一八六一年の改革以前の革命運動。農民「解放」

我々がその同時代人および参加者である共産主義運動は、労働者階級の運動として、プロレタリア運動として發生し且つ發展した。

しかし我黨が作られるより以前、ロシアにおける最初の革命的マルクス主義者がその注意を革命の主要な推進力としての労働者階級に向けるより以前、数十年間、革命家達は、正しい理論を求めて、ロシアにおいて革命を行ひうる勢力を求めて、ツァールの専制政治、農奴制度および農奴制の遺物に對して闘争した。レーニンはマルクス主義の革命的理論の正しさの證明をただ十九世紀全體の世界的經驗のうちのみ見てゐるのではない。彼は次のことを力説した、『この——そしてただこの——革命的理論の正しさは、……特にロシアにおける革命的理論の動搖と徘徊、誤謬と失望との經驗が證明した。約半世紀の間、大略前世紀の四〇年代から九十年代に至るまで、ロシアにおける進歩的思想は、未曾有の野蠻且つ反動的なツァーリズムの抑壓の下に、正しい革命的理論を貪るが如く求め、驚くべき熱心さと周到さを以てありとあらゆるものを——この領域におけるヨーロッパおよびアメリカの「最新の原理」を追求した*』と。

* レーニン、第二十五卷、一七五頁。

ここから、黨史の研究に際してその前史に、我がボルシエヴィキ黨の成立に先立つた革命運動に立ち停まる必要が生ずる。正にボルシエヴィズムの出現の最初からそれはただマルクス主義者の間における日和見主義的傾向に對してのみならず、またナロードニキの反マルクス主義的理論に對

しても闘争を行はなければならなかつたのである。

『最近四半世紀におけるロシアの革命的思想の全史は小ブルジヤ的ナロードニキの社會主義に對するマルクス主義の闘争の歴史である*』——とレーニンは一九〇五年に書いた。

*レーニン、第八卷、三六〇頁。

我々はここでステンカ・ラージン、エメリヤン・ブガチョフ、ポロトニコフその他の指導の下における十七世紀および十八世紀の大衆的農民運動を詳説しない。これらの暴動の血腥い抑壓にも拘らず、農民の状態は全く耐へられなかつたが故に、暴動は新たに爆發した。農奴制的隷屬からの農民の解放の前夜には農民叛亂の數は一年百七十に達した。政府の資料によれば、一八三五年から一八六五年までに百四十四人の地主が殺され、その外に不成功に終つた企圖は二十一であつた。一八三五年から一八四三年までの九年間に地主を殺害したかごで農奴的農民出身の二百九十八人の男子と百十八人の女子とが流刑に處せられた。

一八二六年から一八五四年までに五百以上の『一揆』があつた。一八四二年には十四縣において一揆が起り、一八四三年には四十萬人の農民がオレンブルグ縣において一揆を起し、一八四四年には十九縣において、一八四五年には十五縣において、一八四六年には十六縣において一揆が

起り、一八四八年には四十五の地主の邸宅が破壊された。

しかしこれからの叛亂のただの一つも農奴制の瓦解を促進しはしなかつた。

商業資本の發展と共にロシアには工場が出現した。一七六二年ロシアにおける工場は九百八十四、一七九六年にはそれはすでに三千六百一十であつたが、一八二五年、即ちデカブリスト暴動*の時には、ロシアにおける工場はすでに五千二百六十一、その労働者數二十一萬五千五百六十八人であつた。しかし彼等のうちただ十一萬四千五百十五人だけが自由賃銀労働者で、残りは農奴的または半農奴的労働者であつた。その外に地主および商人は自由農民を工場に編入する権利を獲得した。これらの『編入された』農民もまた農奴的労働者となつた。工場主は、地主が自己の農奴のために支拂つたと同様に、これらの労働者のために國家に租税を支拂つた。編入された工場農民は、農奴が強制労働によつて働いたと同様に、若干日工場において賦役に服さなければならなかつたが、この場合賃銀は彼等の手に渡されないので、直接租税として計算された。かくして農民は工場において一年約百二十日、またはそれ以上働かなければならなかつた。これはあらゆる賦役よりも更に狡猾なものであつたが、農民はごうすることもできなかつた。工場における生産が擴張されるやうになつた時、工場主は、農民に自己の農民經營に従事する可能性を與へないで、

彼等を徹底的に工場に縛りつける法律を獲得し始めた。紙上ではこの編入された農民は自由農民と看做されたが、実際には彼等は同じ農奴的農民であつた。彼等は工場の人事課へ無益にも嘆願書を差出した。そこでは彼等から巨大な賄賂が取られたが、彼等は侮辱され、そして彼等の先達者は投獄され、鎖に繋がれ、頸枷を嵌められ、懲役において朽ち果て、笞や棒で打たれた。

* デカアリスト暴動については後に記されてゐる。

だから農民および工場労働者の間における革命運動の最初の萌芽はまだ農奴制の時代に發展し、そして主として無法な、奴隸的な、耐へられない状態に對して向けられてゐる。これは政府によつて殘酷に鎮壓された『一揆』であつて、参加者は死刑に處せられ、笞打たれ、懲役や流刑に處せられたが、その際暴動の指導者が往々自らツァールたることを宣言し、ツァール権力の名によつて行動したことを指摘しなければならぬ(例へば、エメリヤン・ブガチョフ)。

しかしたゞ農民のみが、ただロシアに生れたプロレタリアートのみが、この制度に不満だつたのではない。農奴制度はすでに前世紀の初めに國の經濟の生産力の發展を拘束し始めた。農奴制的強制労働は市場を計算に入れる經濟にとつて餘りに不生産的であつて、地主中の最も開化せる人々さへも、國家組織における若干の變化の必要を意識し始めた。この時代より少し前、十八世

紀末に、フランスではフランス大革命が行はれた。ここでは商工業ブルジョアが、都市および農村の小ブルジョアジの革命的大衆に立脚して、革命的小ブルジョア黨ジャコピン黨の首領の指導の下に、權力を奪取し、舊い貴族的封建的階級を顛覆し、フランス王ルイ十六世を公然と廣場で斬首した。新しいフランス共和國は周圍の農奴制諸國家に對して防衛し、それらに對して多くの戰爭に耐へなければならなかつた。フランスの軍隊は、王を顛覆しつゝ、全ヨーロッパを凱旋行進し、周知の如く、モスクワさへも占領した。けれどもヨーロッパにおける反動的諸階級は、農奴制擁護者、地主、貴族に立脚したツァール專制政治と同盟して、フランスの軍隊に對する闘争のために力を集結し、それを追ひ拂ひ且つパリまで進撃した。多くのロシアの士官や兵士が、フランスに滞在した後、專制政治や農奴制に對する自己の以前の見解に大いに動搖を受けてそこから歸國したのは、正にこの時のことである。

一部分はこのフランス遠征と一般にフランス革命の影響の下に、だが主として地主制度がすでに當時ロシアの生産力の發展を拘束するやうになつたから、前世紀の初め以來ロシアには、國家制度の改變をその任務とする一つの秘密結社が成立した。この秘密結社の先頭には貴族——殆ど専ら士官の貴族が立つてゐた。一八二五年十二月十四日ペテルブルグのセナトスカヤ廣場におい

て、秘密結社の近衛士官の指揮下にあつた近衛聯隊——ブレオブラジエンスキー、セメノフスキー——その他の聯隊の進出が行はれた。それらの軍隊および士官は皇帝ニコライ一世に忠誠を誓ふことを拒否した。叛亂者を説得しに行つた軍司令官ミロラドヴィチ伯は、廣場で殺された。しかし政府はこの進出を鎮めるに足るだけの力を持つてゐた。秘密結社員は牢獄や要塞に監禁された。主なる指導者は死刑に處せられ、數十人の参加者は懲役に處せられた。この運動は歴史上デカブリスト暴動として知られてゐる。これは農奴制のために最も多く苦しんだ人々の支持なしに、農民層の支持なしに、軍事的變革を行はうとする企圖であつた。けれどもこれはそれにも拘らず、レーニンが高く評價した、革命的な企圖であつた。

レーニンの論文『ヘルツェンの記念』において我々はデカブリストについて次のことを讀む、『貴族はピロノフ家やアラクチェフ家(その残酷さと反動性によつて知られた地主——ヤロスラフスキー)のロシアに無数の「飲んだくれの士官、暴れ者、カルタ遊び人、市場の英雄、獵犬係、龍騎兵、決闘介添人……」を與へた。そして彼等の間から——とヘルツェンは書いた——二月十四日の人々、英雄の方陣が發展した』と。同じ論文の末尾において、レーニンは、ツァーリズムに對する鬭争において活動した數世代を指摘しつゝ、かう書いた——

『ヘルツェンを祝賀しつゝ、我々はロシア革命において活動した三つの世代、三つの階級を見る。先づ貴族と地主、デカブリストとヘルツェン。これらの革命家の仲間は狭い。彼等は人民から恐しく遠い。しかし彼等の事業は無益には終らなかつた。デカブリストはヘルツェンを目覺めさせた。ヘルツェンは革命的煽動を展開した。

『チエルヌイシエフスキーから始まつて「人民の意思」派に終る平民革命家がそれを取上げ、擴張し、強化し、鍛鍊した。鬭士の仲間は一層廣くなり、彼等の人民との聯關は一層密接になつた。「來るべき嵐の若き舵手」とヘルツェルは彼等と呼んだ。しかしこれはまだ嵐そのものではなかつた。

『嵐とは大衆自身の運動のことだ。唯一の最後まで革命的な階級たるプロレタリアートが、嵐の先頭に立ち上り、そして數百萬の農民を初めて公然の革命的鬭争に高めた』と。

* レーニン、第十五卷、四六八—四六九頁。

ツァール政府はクリミア戦争における敗北の後『農民解放』に進むことを餘儀なくされた。この場合政府は、上から農民を解放する方がよいこと、さうでないとな彼等自身が眞に『下から』自己を解放することを認めたのである。

レーニンは一九〇一年論文『労働者黨と農民層』においてこの『農民解放』を次の如く記述してゐる――

『賦役から「解放された」農民は、「自發的に」賦役に行く外はなかつたほど取り上げられ、捲き上げられ、引き下げられ、自己の分割地に縛りつけられて、改革者の手から出て來た。そして農民は自己の以前の旦那の大地を耕作し始めた、彼から同じ自己の分割地を「賃借」し、夏の労働を――飢ゑてゐる家族への穀物の貸付に對して――冬契約しつゝ。雇役とカパーラー――これが實際において、ジェスイット僧によつて作成された宣言がそれに基づいて「神の祝福」を呼びかける農民を招待したところの、「自由労働」であつた。

『だが改革を創造し且つ實現した官吏の寛大のお蔭で保存されたこの地主的抑壓の上に、更に資本の抑壓が加はつた。……貨幣權力はたゞ農民層を締めつけたのみならず、また分裂させた。即ち巨大な大衆は全く零落し且つプロレタリアに轉化し、少數者が、農民經營と農民の土地とを横領し、生れつゝある農業ブルジョアジーを成すところの、一塊の少數の、だが頑強なクラークや經營農民を輩出した。改革後の全四十年間はこの農民脱化の一つの全面的な過程、惱しい徐々の死滅の過程であつた。農民は乞食の生活水準まで引下げられた。即ち彼は家畜と一緒に起臥し、

襤褸を纏ひ、草根木皮を食つた。たゞそこから逃亡することができさへすれば、農民は自己の分割地から逃亡した。そしてその支拂がその収入を超過した分割地を引受けることに同意した者に貨幣を支拂つて、農民は分割地から身請けさへした。農民は周期的に飢ゑた、そして益々頻繁にやつて來た凶作の時には飢餓と疫病とのために數萬人も死んだ*』と。

* レーニン、第四卷、一〇二―一〇二頁。

ナロードニキの組織「土地と自由」黨

農奴制からの『解放』に關する一八六一年二月十九日のツァールの宣言は、農民の中に大なる不満を喚び起した。そしてツァール自身もまた農民がこの宣言に對して一揆を以て答へるだらうと信じてゐた。宣言の發表の日には戒嚴状態を準備すべきことが軍隊に命令された。農民に對して如何に行動すべきか、といふ指令が到るところへ與へられた。農民のすべての暴動は血腥い鎮壓を以て終つた。農民アントン・ペトロフの指導の下におけるカザン縣ベズドゥノ村の農民の進出は特に血腥いものであつた。

多くの農民は、地主が彼等を欺いて、眞實のツァールの宣言、『ツァールの黄金文書』を農民に匿

し、そして偽の宣言を發表したのだ、と信じてゐた。勿論さうではなかつた。農民には偽の宣言ではなくて、眞實の宣言が發表されたのであつて、それは全貴族階級、特に、皇室ロマノフ家もそれに屬してゐた大地主の利益のために、地主と貴族によつて作成されたのである。

當時ロシアには平民、即ち零落した貴族、官吏の子弟、僧侶、商人の大なる層が成立したが、彼等は、農奴制がロシアの生産力の發展を阻止し且つ當時他の國において獲得されたブルジョア民主主義的『自由』さへもの移植を妨害してゐることを忍ぶことができなかった。だから平民はあらゆる自由思想やまたあらゆる自由な言葉に對してツァール政府が殘酷に復仇したこともまた和解することができなかった。これには他の非ロシア民族、『異民族』に對する耐へ難い抑壓が加はつた、——この抑壓はツァール・ロシアをば他の諸民族を鎮定した*世界の憲兵たらしめたのみならず、ロシアを『諸民族の牢獄』たらしめた。六〇年代の初めにおけるポーランドの暴動は無慈悲な殘酷さによつて鎮壓され、ポーランドの叛亂者は數千人も處刑され且つシベリヤへ追放された。ロシアにおける農民に對してツァール政府は常に地主と握手してゐた。すべてこれらのことが一緒になつて種々の社會層のうちに、特に謂ゆる平民的インテリゲンチヤの中に、主として學生、生徒の中に、多くの不滿を集積した。だから最初の革命的サークルおよび結社は生徒の中

から、青年學生の中から徵募されたのである。部分的にはこの平民的インテリゲンチヤは農民層と結びついてをり、そして後者の不滿が前者によつて傳へられた。部分的にはそれは生れつつある小中ブルジョアや、そしてまた都市の大ブルジョアとも結びついてゐた。それと同時にこの平民的インテリゲンチヤは大部分は我國の農民層をよく知らず、また國家制度を如何にして改變しうるかをよく理解してゐなかつた。しかし農民層は人民の基本的大衆を形成してをり、そして當時の革命的インテリゲンチヤは農民層の外に何等の他の革命的勢力を見なかつた。ロシアの共同體は社會主義的コンミュニンの萌芽であり、そして我國の農民は一人残らず生れながらの社會主義者であり、生れながらの共產主義者である、と彼等には考へられた。ナロードニキ的革命家はロシアの共同體をコンミュニンの基礎、社會主義社會の基礎と見た。ナロードニキ的インテリゲンチヤは、社會主義について、フランス、ドイツその他の社會主義者の諸著作によつて知り、學んでゐた。また平民的インテリゲンチヤの革命運動がわが國では西ヨーロッパにおける多くの政治革命の後に、始まつてゐることも忘れてはならぬ。これらの政治革命は、社會主義への傾向を表はし且つ當時すでに獨立的役割のうちに進出したところの、プロレタリアートに解放を與へなかつた。されば西歐における革命およびこの革命に基いて生れた社會主義學說の影響を受けて、

我國でもまた平民的インテリゲンチヤが社會主義について語り始めた。たゞロシアのインテリゲンチヤは、我國ではまだ弱かつたプロレタリアートを社會主義の理念の擔ひ手と考へないで、農民をさう考へた。蓋しロシアの經濟は主に農民經濟であつたからである。だが農民は小有産者であつたから、ナロードニキの『社會主義』もまた小有産者的、『農民的』社會主義であり、レーニンが屢々呼んだやうに、『俗流』社會主義であつた。この社會主義はマルクス・エンゲルスの科學的社會主義と何等の共通點をも持たなかつた。

* 例へば、ツァール・ニコライ一世の軍隊によるホーストロ・ハンガリーにおける暴動の鎮壓。

論文『ナロードニキのエヌ・カー・ミハイロフスキー論』において、レーニンは一九一四年この平民的インテリゲンチヤの運動をかやうに評價した、『ロシアにおいてブルジョア民主主義的觀念の唯一の眞面目な且つ大衆的な擔ひ手(都市の小ブルジョア階級を考慮しないならば)たる農民大衆は、當時まだ深い眠を眠つてゐた。彼等の中の最良の人々および彼等の困難な地位に對して同情に満たされた人々、謂ゆる平民——主として青年學生、教師その他のインテリゲンチヤの代表者——は、眠れる農民大衆を啓蒙し且つ覺醒せしめようと努力した*』と。

* レーニン、第十七卷、二二三頁。

レーニンはナロードニキ主義の創始者としてのヘルツェンのことを大なる尊敬を以て語つた。しかしそれと共にレーニンはヘルツェンのナロードニキ的『社會主義』を鋭く批判した。『一八四八年の全運動およびマルクス以前の社會主義の全形態のブルジョア民主主義の本質を理解しなかつたヘルツェンは、況してロシア革命のブルジョアの性質を理解しえなかつた。ヘルツェンは「ロシア的」社會主義、「ナロードニキ主義」の創始者だ。ヘルツェンは「社會主義」を農民の土地からの解放や、共同體的土地所有や、農民的な「土地に對する權利」のうちに見た……

『……實際ヘルツェンのこの學說の中には、すべてのロシアのナロードニキ主義——今日の「社會革命黨」の色褪せたナロードニキ主義に至るまでの——における同様に、社會主義の「グロブ」も存在しない*』。

* レーニン、第十五卷、四六六頁。

しかしナロードニキの空想的、小ブルジョアの、農民的社會主義が社會革命に導きえなかつたとしても、革命的ナロードニキ主義の戰鬥的民主主義はロシアの革命的世代の政治意識の發展にとつて巨大な積極的意義を持つてゐた。レーニンはナロードニキ主義に關する彼の諸著作においてこのことを一再ならず力説してゐる。

ロシアにおけるナロードニキ思想の普及は何によつて説明されるか？ 何よりも先づ當時のロシアの後進性によつて。『ロシアの後進性は種々の後進的な社會主義學說の我國內における大なる鞏固さを自ら説明する*』。論文『小ブルジョア社會主義とプロレタリア社會主義』においてレーニンは、ヨーロッパにおいてもまた『……マルクス主義學說の上に置かれたプロレタリア社會主義の完全な支配は、一舉に確立されないので、たゞあらゆる後進的な學說や、小ブルジョアの社會主義や、無政府主義その他に對する長い闘争の後においてのみ確立された**』と述べてゐる。ロシアにおけるナロードニキ思想の成功と普及の第二の原因（同じくまたロシアの後進性と結びついたところの）は、組織的大衆的労働者運動が、ロシアにおいては、その時代によつて、他の資本主義諸國におけるよりも著しく遅く始まつたことにあつた。『ナロードニキ主義は、——とレーニンは述べてゐる、——或る程度まで完全且つ徹底的な學說であつた。ロシアにおける資本主義の支配は否認された。全プロレタリアートの前衛闘士としての工場労働者の役割は否認された。政治革命とブルジョア的政治的自由の意義は否認された。農民共同體およびその小農業から出發しつゝ、社會主義革命が一舉に説教された***』と。

* レーニン、第八卷、三六〇頁。

** 同上、三六〇頁。

*** 同上、三六一頁。

ナロードニキ文献を読む場合には、ナロードニキが『労働者社會主義』といふが如き表現を時時使用さへしながら（例へばベー・エル・ラヴロフにおいて）、この名稱によつてマルクス主義者とは全く別のものを理解してゐたことを眼中に置かなければならぬ。ナロードニクのラヴロフは零落しつゝ、ある農民をもまた労働者と考へた。『小市民的社會主義は（農民的社會主義と同様に——ヤロスラフスキー）、富者と貧者との間の差異を廢絶しうるかの如くいふ小經營主の夢だ。小市民的社會主義は、すべての人を貧しくもなく、富裕でもない「平等的」經營主となしうると想像してゐる*』。

* レーニン、第九卷、二七〇頁。

革命的ナロードニキの誤謬が如何に深刻であつたとしても、彼等の多くは自ら社會主義者と考へ、そして實際にはたゞ資本主義的發展によつての道の清掃に導いたにすぎないところの自己の『社會主義』を實現しようとする熱望に貫かれてゐた。ナロードニキは農奴制的土地利用の廢絶のための農民層の闘争を反映した。レーニンは七〇年代のこの最初の革命的ナロードニキ並びに

九〇年代におけるその後の自由主義的後継者の不合理な理論を鋭く批判した。しかし彼は兩者を鋭く區別した。

『特殊な制度、ロシア生活の共同體的組織の信仰。こゝから農民的社會主義革命の信仰が生ずる——これが彼等を鼓舞し、數千の人々を政府に對する英雄的な闘争に高めたのである*』。實際にはこの農民的社會主義の中に社會主義の一グレーンも存在しないことは、我々のすでに見たところである。しかし實際このことはやつと著しく後に、漸く労働者運動の發展やロシアにおけるマルクス主義の普及と共にナロードニキ主義の理論が最も殘酷な全面的批判に附せられた時に、明かになつた。マルクス主義者の力はこの批判のうちに鍛鍊された。

* レーニン、第一卷、一六八頁。

農民解放の少し前ロシアのインテリゲンチヤは二人の偉大な活動家——アレクサンドル・イヴァノヴィチ・ヘルツェンとニコライ・ガヴリオヴィチ・チェルヌシエフスキーとを輩出した。彼等兩人は、實際、別々の仕方——ヘルツェンは一層貴族風に、チェルヌシエフスキーは一層粗野に、一層民主主義的に——ツァールの秩序と農民解放に關する法律を批判した。ヘルツェンは、外國において自由な言葉の最初の雑誌——『コロコル』を創刊して、革命運動に貴重な功績をなした。然

るにチェルヌシエフスキーは、ロシアに留まつて、『人民のため』の闘争の精神を抱いた革命的平民的インテリゲンチヤの全世代を教育した。彼は正當にも革命的ナロードニキ主義の父と考へられてゐる。

彼は實に革命の全世代の『思想の支配者』であつた。平民的革命的インテリゲンチヤ大衆は彼の聲に傾聽した。彼の徹底的な民主主義をレーニンは一再ならず自己の諸論文において指摘し、また彼の唯物論的な哲學的見解をも指摘してゐる。

しかし如何に闘争すべきか？ 何に立脚すべきか？ この問題に對して當時の革命家「ナロードニキは色々答へた。彼等がなほ『ナロードニキ』（人民主義者）と考へられたのは、彼等があれやこれやの革命的階級ではなくて、階級の差別なしに人民を革命の推進力と考へたからである。或る者（ペー・ラヴロフの追隨者——『ラヴロフ派』）は、人民、即ち農民を教育し、最良の社會組織は社會主義組織、社會主義であることを彼等に説教しなければならない、と考へた。然るに他の者（無政府主義者ミハイル・バクーニンの支持者——『ブンタール』）は、人民には何も教へなくてもよい、たゞ彼等には叛亂を起させなければならない、と考へた。けれども前世紀の七〇年代に成立した秘密結社『土地と自由』黨にはあれもこれも、即ち叛亂者も宣傳者も加入

した。『人民の中へ』といふ叫びに對して數百人のこれらのナロードニキが反響し且つ農村へ赴いた——或ひは大工、指物師として、或ひは薬局生として、或ひは教師として。彼等は『狡猾なからくり』、『賢婦ナウモヅナ』の如き小冊子にこの他の禁止された本を携帯した。政府もまたボンヤリしてゐなかつた。彼等のうちの數百人が逮捕され且つ投獄され、そしてやがて公判が開かれて、謂ゆる五十一人事件や百九十三人事件*によつて多くの人々が懲役に赴かしめられた。ツァール政府は『人民の中へ』のあらゆる企圖に對して殘酷に復仇した。若干の人は死刑にさへ處せられた。これは革命家を非常に痛憤させ、そして彼等の一部は、ツァール政府に對しては、テロル、即ちツァールの官吏およびツァール自身さへもの暗殺を以てするツァール政府の威嚇によつて闘争しなければならぬ、と考へ始めた。最初テロルは自衛手段と考へられたが、やがて迫害や處刑に對する復讐行爲、そして最後には殆ど政治的自由のための闘争の唯一の手段に轉化した。

* 『土地と自由』黨の成員、土地と自由派の二つの裁判事件が、事件關係者の數によつてさう呼ばれた。

長い間多くのナロードニキ土地と自由派は、政治闘争や、國家權力のあれやこれやの政治的改造のための闘争に力を費消することは意味がない、と考へてゐた。國家的秩序の點において彼等の多くは無政府主義者（ミハイル・バクーニンその他）の見解や概念を抱いてゐた。農民大

衆の一揆と暴動とに立脚しつゝ、當時の農民的ロシアにおいて完全な社會主義的改造に移行すること、およびあらゆる國家權力を廢絶することは、極めて容易だ、と彼等には考へられた。しかし闘争は彼等に、第一には、農民大衆が社會主義または共產主義に移行することに全く準備されてゐないこと、第二には、平民ナロードニキと農民大衆との觀念の間に巨大な溝渠が存在すること、第三には、ツァール政府が社會主義の平和的宣傳（説教）をさへ許さないことを示した。

『人民の意思』黨と『土地改革』黨

一八七九年『土地と自由』黨はその大會において二つのナロードニキ組織——『人民の意思』黨と『土地改革』黨とに分裂した。この二つの組織の間の差異は、『人民の意思』黨がテロル——政治闘争の任務を第一に提唱したことであつた。『土地改革』黨の組織がさう呼ばれたのは、その成員が農民の間における土地の一般的再分割（地主の土地その他の分配をも含めて）を説教したからである。この場合『土地改革』黨は、力を政治闘争に割き且つ農村における活動から離れることは人民の目的を裏切ることを意味する、と考へた。

『人民の意思』黨とツァール政府との闘争は不平等な闘争であつた。こゝには自己の生命を人民

のために献げようと準備した小さな一團の献身的な人々があり、そこには數萬の官吏、警察、憲兵、保安課を有する有力な國家機構があつた。この不平等の戦において『人民の意思』黨の多くの成員は極めて輝かしい革命家たり組織者たることを示した。例へばステバン・ハルツリンはその一人であつて、彼は冬宮における指物師で、ツァールの宮殿の保安課の信用を得てゐたが、祕密にダイナマイトを自己の小房へ運び、それを多量に蓄積した。そして或る時、ツァールが招待された公爵、伯爵、男爵達と酒宴を催さなければならなかつた時、食堂が爆發した。しかし爆發は宴會出席者がまだそこへ入らないうちに起つた。かゝる革命家は、鬭争方法において彼等と一致しない人々においてさへ尊敬を喚び起した。かくてレーニンは、あらゆる革命家が自己の黨への献身の模範と見るべき人として、ステバン・ハルツリンを一再ならず指示した。

『人民の意思』黨の鬭争は、一八八一年三月一日グリネヴィツキーによつて投せられた爆彈によるツァール・アレクサンドル二世の暗殺を以て終つた。この鬭争は『人民の意思』黨の力を消耗した。黨は粉碎された。その執行委員會委員は處刑され、自由に生き残つた人々はアレクサンドル三世政府の迫害に脅かされた社會において支持されなかつた。『人民の意思』黨の執行委員會、一層正しくいへば——その残存者は、アレクサンドル三世に手紙を送り、その中において、もしツァー

ルが出版の自由を許し、地方議會を召集し、革命的ナロードニキの首領——ニコライ・ガヴリオヴィチ・チエルヌイシエフスキーを流刑地から返すならば、テロルを中止しようとする約束した*。

* チエルヌイシエフスキーは人民解放の事業に献身した革命家の一人であつた。彼は農民への檄文を起草したかごによつて死刑を宣告され、懲役に代へられた。チエルヌイシエフスキー『事件』は虚偽の、警視廳によつて作られた文書の上に構築されたものであつた。彼は多年ペトロパヴロフスク要塞において、次いでネルチンスク監獄において呻吟し、その後ヴィリニエスクへ追放された。革命家達は彼を非常に尊敬した。有名な革命家ナロードニキのイッポリト・ムイシユキンは、憲兵に變装して、彼を解放しようさへ試みた。人民の意思派はチエルヌイシエフスキーの流刑地からの歸還を特に重要な事業と看做した。

人民の意思派のこの後の聲明にはすでに何等の革命的なものも残つてゐなかつた。けれどもその後生き残つた人民の意思派の中には再びテロルの計畫が発生した。かくてその先頭にレーニンの兄アレクサンドル・ウリヤノフを有する『人民の意思』黨員のグループは、アレクサンドル三世を暗殺しようと企てたが、それは成功せず、そして彼等は逮捕され且つ處刑された。

人民の意思派の主要な弱點は、彼等が正しい革命的理論を持たなかつたこと、そしてまた革命の主要な推進力が實際に何處にあるかを見なかつたことであつた。彼等はそれに立脚すべき大衆的組織を持たなかつた。しかしかゝる組織を作り出さうとする試みは、土地と自由派が勞働者の

中で大なる宣傳的活動をなし且つ最初の労働者グループを作り出した時代にすでになされた、といふことを指摘しなければならぬ。人民の意思派は『人民の意思』黨の特殊な『行動綱領』をさへ作成した。勿論、この綱領は、革命的ナロードニキ主義のすべての學説と同様に、プロレタリア的社會主義からはかけ離れてゐた。

『人民の意思』黨については『人民の意思』黨五十周年に關する全ソ聯邦共產黨中央委員會文化宣傳部のテーゼ』に詳しく述べられてゐる*。このテーゼの中にはナロードニキ主義一般、特に『人民の意思』黨のイデオロギイと戰術との詳しいレーニンの特徴づけが與へられてゐる。テーゼにおいては、『革命的ナロードニキ主義の農民の社會主義は、全ナロードニキ主義の社會主義的觀念と同様に、空想的でもあり、反動的でもある』ことが力説されてゐる。マルクス主義は最初から小ブルジョアの社會主義と鬭争するのである。しかし『これらの理論の社會主義的性質を如何に否定しようとも、それらの反動的形態に對して鬭争しながらも、それらの民主主義的部分を忘れてはならぬ**』。それと共にテーゼは、支那における革命についてレーニンによつて發展せしめられたエンゲルス思想を引用してゐる、『形式的經濟的意味では虚偽の、ナロードニキ的民主主義は、雇傭の意味では眞理である。社會主義的ユートピヤとして虚偽であるこの民主主義は、ブ

ルジョアの改革の不可分の要素およびその完全な勝利の條件を成すところの、農民大衆の独自の歴史的條件な民主主義的鬭争の眞理である***』。

* また参照『人民の意思』黨に關する討論、コムアカデミー版、モスクワ一九三一年刊。

** レーニン、第一卷、一八四頁。

*** レーニン、第十六卷、一六五頁。

多くの他の著作においてレーニンは同じ思想を根強く發展させた、『……マルクス主義者は、——と彼は一九一二年十月に書いた、——ナロードニキ的ユートピヤの殻の中から農民大衆の純朴な、決定的に鬭争的な民主主義の健全にして價値ある核心を注意深く區別しなければならぬ。

『前世紀の八〇年代の古いマルクス主義文献においてはこの貴重な民主主義的核心を區別しようとする系統的行はれた努力を見出すことができる。いつか歴史家達はこの努力を系統的に研究し、そして二十世紀の最初の十年間に「ボルシヴィズム」といふ名稱を得たところのものそのその聯關を追跡するであらう*』。

* レーニン、第十六卷、一六六頁。

労働者運動の第一歩

農奴制の廢止の後ロシアは急速に資本主義的發展の道に進んだ。約二十五年間——一八六五年から一八九〇年まで——に、棉花を加工した我々の工場は生産を五倍に増加し、石炭の採掘高は十倍に、鉄鐵の精鍊高は三倍に増加した。これに照應して工場労働者もまたこの二十五年間に増加した——六十萬七千人から百三萬二千人、即ち一倍半以上増加した。すべての國における資本主義的蓄積の歴史は、資本主義の下においては大資本が中小資本を打殺すことを示してゐる。謂ゆる資本の集中、即ちその掌中に小工場、小企業を持ち去るところの少數の資本家の掌中への資本の集積が行はれる。一八六六年には各百人以上の労働者を有する工場は六百十一であつたが、一八九〇年にはかゝる工場はすでに九百五十一であつた。即ちかゝる工場の數は一倍半増加し、そしてそれらにおける労働者數は二倍に高められた（二十三萬一千人が四十六萬四千人になつた）。

労働者の集積は大工場において行はれた。一八六六年に各一千人以上の労働者を有する工場に總労働者數の二七%が雇はれてゐたが、一八九〇年にはそれらはすでに四六%雇はれてゐた、即

ちこの期間に大工場に二十五年前におけるよりも二倍多くの労働者が集積されたのである。農村は貧窮であり、農民經濟は極めて徐々に發展し、そして謂ゆる失業状態にあつたので、農村は多數の失業者を都市へ送つた。これらの大衆は徐々に都市や工場附近に定住し、工場における安い労働力の不斷の豫備軍を形成し、資本家工場主に無慈悲に労働者大衆を搾取し、賃銀を引下げ、労働日を延長し、力不相應な罰金を以て労働者を掠奪することを得させた。

労働者は最初は無器用に、バラバラに、非組織的にこの搾取に抵抗し始めるが、徐々に組織的な同盟罷業闘争に對しても訓練される。最初同盟罷業は、労働者が工場や事務所を破壊し、往々工場に放火し、機械を打ち壊すといふやうな仕方で行はれた。しかし他の國々における労働者運動史を知つてゐる者は、労働者階級が殆ど何處でもこの誤謬を通過したことを知つてゐる。

ドイツも、フランスも、イギリスも、かゝる労働者罷業や一揆を知つてゐるのである。

『南露労働者同盟』

一八七五年オデッサにおいてナロードニク・ザスラフスキーによつて労働者組織——『南露労働者同盟』が設立された。

ザストラフスキーは天才的な組織者であり宣傳者であつた。オデッサの最も重要な諸企業と結びついた多数の労働者が短期間にそれに加入した、といふやうに彼は組織を設立することに成功した。共済基金と文庫とが作られた。専ら労働者が同盟員であつた。北方の同志宛の手紙において『南露労働者同盟』は自己の當面の任務を政治的自由の獲得として規定してゐる。『しかしながら、——どこには述べられてゐる——我々が一切の社會制度を改造する偉大な最後の目的や労働要具を勤勞者の掌中に移すことを拒絶してゐる、と考へてはいけない。我々はただ、これらの目的が政治的自由の獲得によつて最も容易に達成される、と考へるだけである』と。同盟は海員を通じて第一インターナショナルの活動家と聯絡を持つてゐた。同盟の規約を第一インターナショナルの規約と比較すると、大なる類似が目につく。ザストラフスキーはまた外國航路の火夫を通じて非合法文獻を取得することに成功した。同盟は短期間存在しただけであつた。一八七五年同盟の殆どすべての積極的な活動分子の大檢舉が行はれ、彼等は裁判に附せられた。これは労働者組織に對する最初の裁判であつた。政府は、裁判に附せられた者がザストラフスキーを除くの外すべて労働者であることに非常に驚愕し、この裁判に關する報道を印刷させなかつたほどであつた。この裁判における宣告は非常に残酷であつた。けれども労働者の中における革命的活動は『南露労働者同盟』の粉碎によつて止まなかつた。『南露労働者同盟』はその後發生した労働者サークルに對して疑ひもなく影響を及ぼした。

『ロシア労働者北部同盟』

『ロシア労働者北部同盟』は、『土地と自由』協會員によつて作られた個々の労働者サークルによつて、一八七九年ペテルブルグにおいて形成された。規約によればただ労働者のみがこの同盟の會員となることができた。その設立後間もなくそれはすでに會員二百人以上に達した。同盟の先頭には中央サークルが立ち、それは中央基金および中央文庫を支配した。地區別に個々の委員會や小委員會が作られ、中央サークルがそれを指導した。『ロシア労働者北部同盟』の首腦は、ヴァトカ縣の農民から出た指師物ステパン・ハルツリンで、彼は労働者革命運動の最初の指導者の一人であつた。この同盟の他の顯著な組織者は、ヴィクトル・オブノルスキーで、彼は西歐の運動によく通じた、嘗てロンドン、ベルリン、パリに滞在した労働者であつた。だから『ロシア労働者北部同盟』の綱領および規約においてもまた第一インターナショナルの影響を追跡することができ、ナロードニキのインテリゲンチヤの参加なしに、労働者自身が同盟の綱領を起草したこと

は、特に注意に値する。この綱領においては農民共同体および國家の役割に對する誤つたナロードニキの見解と並んで、労働者は全く、決定的に社會主義のための闘争と政治的自由のための闘争とを結びつけてゐる。これらの最初の労働者同盟が如何に弱かつたとしても、それらはすでに、ブレハーノフがこれを指摘した時、ナロードニキの運動を頭の高さだけ乗り越えてゐた。

ステバン・ハルツリンは、多くの他の同盟員と同様に、『平和的な』宣傳活動に賛成であり、組織を強化し、ただベテルブルグにおいてのみならず、地方においてもまた力を蓄積しようとして欲した。けれども『人民の意思』黨が成立した時、政府の迫害はそれに残酷に押し加つた。ステバン・ハルツリンの如き先進的労働者は、テロリスト闘争に引き入れられた。

『ロシア労働者北部同盟』は一八八一年以後すべてのナロードニキ組織と共に著しく粉碎された。

最初の労働者サークルと最初の労働者同盟の意義

労働者運動の黎明においては、多くの労働者サークルの中でナロードニキによつてなされた活動は、無駄には終らなかつた。それは労働者大衆の中で何處かで労働者運動の眞實の達識者、即

ち労働者の問題が共同の力によつて擁護しなければならぬこと、および種々の工場の労働者が共同の利益を有することを理解した指導者を養成した。織物工ビョートル・アレクセエフ、指物師ステバン・ハルツリン、錠前師ヴィクトル・オブノルスキー、モイセエンコその他の如き労働者が、最初の労働者罷業の指導者として目立つてゐる。七〇年代末（一八七八—一八七九年）にベテルブルグの紡績工場その他の工場において多くの同盟罷業が行はれたが、これらの同盟罷業において諸工場の労働者は互ひに支持し、相互扶助の金錢を集めなごした。一八八五—一八八六年には再び多くの同盟罷業が起つたが、その中で特にウラヂミール縣ニコリスコエ村のモロゾフ工場における同盟罷業が目立つてゐる。この當時非常に急速に成長した工場工業は、最初の重大な恐慌、最初の故障を経験した。諸商品の賣行は諸工場が生産したよりも少かつた。一方では、労働者の縮小が始まり、他方では賃銀の引下げ、労働日の延長および罰金の強化が始まつた。これは同盟罷業運動を喚び起した。政府は勿論資本家側に立ち、同盟罷業を兵力を以て抑壓し、罷業労働者を裁判に附し、彼等を大衆的追放に處した。

當時ロシアのすべての進歩的な結社は政府のテロルによつて脅かされたことを想起しなければならぬ。『人民の意思』黨はツァーリズムとの不平等な闘争において打首にされ、破壊された。村

長、巡査、看視兵に抑へつけられ、僧侶に嘯された、バラバラの、無組織の農民層は、靜かにその背中を曲げてゐた。革命的インテリゲンチヤは幻滅を感じて、農民層を闘争に起ち上らせる可能性を信じなかつた。労働者階級の革命的意義を理解しないで、彼等は革命運動から著しく遠ざかつた。そしてただ労働者階級のみがこの時代にその頭を擡げ、闘争の旗を掲げた。最も敏感な、革命に最も獻身的なこの時代の社會主義者は、自己の注意を労働者運動に向け、そして正に革命を勝利に導きうる階級を正當に労働者階級において見た。だからマルクス主義者となつたブレハーノフ、この時代の著名な社會主義者の一人は、かう聲明した。曰く『政治的自由は労働者階級によつて獲得されるであらう、さうでなかつたらそれは全く存在しないであらう』と。また曰く、『ロシアにおける革命運動はただ労働者の革命運動としてのみ勝利するであらう、それ以外の出口はわが國にはないしまたありえない』と。

けれども、我々が後章において追跡するやうに、ただプロレタリアートのみが革命を最後まで導きうるし、またただプロレタリアートのみが政治的自由を獲得することができる、といふ思想は、ブレハーノフによつて決して徹底的に導かれなかつた。反對に、彼はその後他のメンシエヴィキと共に、ブルジョア民主主義革命におけるブルジョアジーのヘゲモニーの思想を固執した。ただボルシエヴィキ黨の首領レーニンのみが、革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーの學説を獨立的に仕上げ、プロレタリアートがロシア革命の指導者であり且つ主要な推進力であることを指示した。

ブレハーノフにおいてはこの場合、またボルシエヴィキの學説の本質的部分を成すところの他の一つの眞理、即ち革命的農民がこの革命におけるプロレタリアートの最も親しい同盟者である、といふことが、抹殺された。

土地改革派

『人民の意思』黨が多くの偉大なテロリスト行爲を組織したところの革命家の強力な組織を作り出し、軍事的組織を作り出し、労働者の中に宣傳を行つたとすれば、土地改革派は、その後ナロードニキ主義からマルクスの革命的學説に移り且つ最初のマルクス主義者の組織——『労働解放』團を設立したところの、著名な著作家の一團を輩出した。『土地改革』黨の特に有名な活動家はブレハーノフ、ペー・アクセリロッド、オー・アブテクマン、エル・ステファノヴィチおよびエル・デイチであつた。初めの二人は著作家および政治家、後にはメンシエヴィキの首領として有名であり、

後の人々は組織者として有名である*。

* アクセリロッド、ブレハーノフおよびディチは最後までメンシエヴィキであつた。

土地改革派の功績は、非常に不徹底であり且つナロードニキの誤謬から解放されてゐなかつたけれども、農民層および農民共同体に對するナロードニキの見解を彼等が批判したことである。雑誌『^{ナホルスイ、ベレデル}土地改革』における一聯の論文において、彼等は、共同体が資本主義の影響を受けて破壊されつゝあることを證明した。實際、土地改革派はマルクス主義者でなく、ナロードニキの誤つた見解から完全には分離しなかつたが、マルクス主義者への最初の、小さな歩みをなした。彼等は例へば、『資本主義は社會主義への地盤を準備し且つその必要な前行者である』こと、『經濟問題の重心は産業的中心の方向へ移動する』ことを認めた。このことから土地改革派は、革命運動における労働者の役割はナロードニキが考へてよりも遙かに大でなければならぬ、といふ結論をなした。土地改革派は、『闘争的黨の組織に着手する』ことを勸告した。土地改革派が政治闘争に反對であつたと考へることは誤つてゐるであらう。否、彼等は全くテロルに反對でさへもなかつた。けれども土地改革派はまだ政治闘争の任務と社會主義とを然るべく結びつけることができなかった。土地改革派はまた、『政治革命は何處でも、未だ嘗て人民に、經濟的、および政治的自由を

確保することができなかつた』ことを證明した。すべてのナロードニキと同様に、土地改革派は誤つて農民層を社會主義の主要勢力と看做した。

ブレハーノフは『土地改革』黨において特に大なる役割を演じたが、彼はその後社會民主黨の創立者の一人となると同時に、メンシエヴィズムの父となる運命を持つてゐた。ブレハーノフはただ極めて若くしてナロードニキ運動に参加した。彼はナロードニキ仲間における労働者と知り且つ談話を交へた。『土地改革』印刷所の瓦解の後における政府の迫害を免れるために、ブレハーノフは國外へ逃れ、そこにおいてマルクスの學說や、社會民主主義運動を親しく知り、ヴェ・ザスリッチ、ペー・アクセリロッド、ヴェ・イグナトフおよびエル・ディチと共に、最初の社會民主主義グループ——『労働解放』團を設立した。

革命的ナロードニキの誤謬

革命的ナロードニキの主要な誤謬はどの點にあつたか？

一、自らを社會主義者と考へながら、彼等は、プロレタリア的科學的社會主義と何等の共通點をも有しない『農民的社會主義』を説教した。

二、社會の發展行程の無理解。ロシアは共同體的土地所有の存在の故に資本主義の行程を免るることができる、と彼等は考へたが、しかし彼等はこの任務の實現を社會主義的プロレタリア革命と——社會主義への過渡としてのプロレタリアートの獨裁と結びつけなかつた。反對に、彼等は、ロシアは『プロレタリアート主義の疫病』を避けることができると考へた。

マルクスやエンゲルスとの文通においてナロードニキは非資本主義的發展行程の可能性の問題を彼等の前に提起した。マルクスやエンゲルスは、もし資本主義がまだ共同體を完全に崩壊させてゐなかつたら、またただ一つの條件の下において、即ちもし何れかの國において、ロシア革命を援助しうる社會主義革命が勝利するならば、かかる非資本主義的發展行程が可能である、と考へた。だから、ロシアにおいて社會主義革命が勝利した時、共產インターナショナルは、勝利せる社會主義の國が國家的援助を示しうるところの一聯の國にとつて非資本主義的發展行程が可能である、と考へたのである。

三、資本主義の意義と役割との無理解。彼等は資本主義のうちにただ害悪のみを見て、資本主義が革命的階級——プロレタリアートを生んだし且つ彼等を闘争に鍛へることを見なかつた。

四、國家の役割の無理解。この問題においてナロードニキは無政府主義者の見地に立つて、

すべての國家を害悪と考へ、そして自己の解放のために闘争する労働者と農民とが、彼等の利益を主張するところの、自己の、勞農國家を作り出しうることを理解しなかつた。

五、労働者階級の役割の無理解と過小評價。主要革命的勢力として農民層を引き出すこと、何故なら多くのナロードニキは階級としてのプロレタリアートの存在自體のうちに、『社會の疫病』、または彼等が表現した如く、『プロレタリアート主義の疫病』以外の何物をも見なかつたからである。

これがナロードニキの主要な誤謬であつた。

革命的ナロードニキの功績

マルクス主義者は革命的ナロードニキから何を學んだか？ ナロードニキに功績があつたであらうか？

一、ナロードニキは、一つを中心から支配され、強力な黨的規律を有する黨の組織、その中に職業的革命家が、即ちその全力を革命運動に献げ、それを研究し、活動のすべての方面を包括する革命黨の敵との闘争方法を作成するところの黨の組織が、如何に巨大な意義を有するかを示し

た。

二、彼等は平民の顯著な力を革命的闘争のために目覺まし、彼等は自由のための政治闘争の觀念を廣汎に普及させた。

三、彼等は眞實の革命家の高貴な模範を與へた、レーニンはキバリチツチ、ジェリャポフ、ムイシユキン、ハルツリンの如き模範を一再ならず指摘した。

四、我々は革命的ナロードニキから革命的闘争の豊富な技術、警察や政府と闘争する熟練を繼承した。

五、ナロードニキは軍隊における革命的闘争の基礎を据ゑた。

六、革命的ナロードニキは最初の労働者組織——南露労働者同盟および北露労働者同盟の基礎を据ゑた。

七、革命的ナロードニキ主義の最も重要な功績は、深刻なブルジョア民主主義革命のための彼等の闘争である。

自由主義的ナロードニキ主義

革命的ナロードニキ主義と異つて、『人民の意思』黨の粉碎の後に登場したナロードニキは、歴史上自由主義的ナロードニキまたは『ナロードニキ主義の亞流』と呼ばれてゐる。彼等は革命的な道を否認して、ツァール政府との和解、協定、それとの協力の道に立つた。この自由主義的ナロードニキ主義の指導者は、雑誌『ルッスコエ・ボガーツトヴォ』その他の雑誌にナロードニキ主義の精神で論文を書いたエヌ・カー・ミハイロフスキー、作家ユーリヤコフ、クリヴェンコ等々であつた。政府はマルクス主義者の革命的學說に對する彼等の攻撃を非常に喜んで許した。これらの自由主義的ナロードニキは一切の革命性を喪失し、闘争の改良主義的方法を説教したが、その代りにロシアの農民共同體に關するすべての偏見を保持し、資本主義の進歩的意義の無理解を保持し、プロレタリアートこそその革命運動との發展を恐れた。自由主義的ナロードニキは資本主義の下におけるアルテリの有益な役割その他を説教した。プロレタリア運動は彼等を脅かした。

九〇年代における自由主義的ナロードニキ主義の出現は一聯の原因によつて説明される。革命的ナロードニキの組織——人民の意思派は粉碎されてゐた。政府のテロルは、より『平和的な』道を求めようとしてゐたナロードニキの一部に疑ひもなくその影響を及ぼした。自由主義的ナロードニキの側からの『些事』の説教は、革命的な道の期待の破綻の直接の結果であつた。ツァ

ール政府が『人民の意思』黨の組織を粉碎した時、農民層は靜肅であつた。ナロードニキは労働者階級のうちにただ僅かな連絡を持つてゐたのみであつて、目覺めつつある大衆運動に働きかけることができなかった。農村自體においては深刻な社會的變化が進行した。

これらの『人民の友』に對して鬭争しつつ、レーニンは自由主義的ナロードニキ主義と革命的ナロードニキ主義との區別を指摘した。『……農村は、——と彼は一八九四年に書いた、——分裂して、一方では、プロレタリアートの大衆を、他方では、爾餘の人口を壓迫してゐる一塊の「クラーク」を分出しつつある……そのみならず、農村はすでに久しい以前から全く分裂してゐる。それと共に古いロシアの農民社會主義もまた分裂して、一方では、労働者の社會主義に場所を譲り、他方では、俗惡な小市民的急進主義に退化した……農民層を現代社會の基礎に反對して社會主義革命に引き上げることを所期した政治綱領から（レーニンはここに次の註を加へてゐる、
「すべてのわが舊い革命的綱領——バクーニン主義者や叛亂者から始まつて、ナロードニキを経て人民の意思派に至るまでの——は、本質においてこれに歸着するものであつた」と……）——現代社會の基礎を保存したまま農民の状態を補綴し、「改善する」ことを所期した綱領が発生した』と。レーニンは、革命的ナロードニキ主義の基礎には、『農民經濟の特殊な（共同體的な）

制度に關する』誤つてゐるが、獨特の整然たる觀念が横はつてゐたこと、即ち『現實との接觸から神話が消散して、農民的社會主義から小ブルジョアの農民層の急進民主主義的代表制が生れた』ことを明かにした^{**}。他の個所においてレーニンは革命的ナロードニキ主義の自由主義的ナロードニキ主義への墮落の更に一層展開された繪畫を與へてゐる、『ロシアのマルクス主義者は、前世紀の八〇年代から絶えず行はれてゐるところの舊いロシアの、古典的、革命的ナロードニキ主義の墮落を指摘してゐる。農民經濟の特殊制度や、社會主義の萌芽および土臺としての共同體や、すでに人民がそれに對して準備してゐる即時の社會革命によつて資本主義の行程を免れる可能性の信仰は、朦朧となつた。農民經濟および「小國民生産」一般の強化に關するあらゆる方策の要素のみが、政治的意義を保存した。これはすでに、その根本において、ブルジョアの改良主義以上のものではなかつた。ナロードニキ主義は自由主義に散り去つた。計畫される諸方策（すべてこれらの信用、協同組合、改良、土地所有の擴張）が、現存ブルジョア社會の埒を出るものではないことを見ることを欲せずまたは見ることでできなかつたところの、自由主義的ナロードニキ的方向が作り出された^{***}』。

* レーニン、人民の友とは何ぞや、全集、第一卷、一六九頁。

* * 同上、一八〇頁。

* * * レーニン、第六卷、一一三頁。力默は筆者のもの——ヤロスラフスキー。

この時代にナロードニキ主義が著しく影を薄めたにも拘らず、革命的青年の一部は依然として老ナロードニキの跡を追はうとした。ナロードニキ主義は労働者階級を独立的闘争に鍛へるのを妨げた。

だからマルクス主義への道は當時ナロードニキ主義との闘争を通じて、ナロードニキ主義の克服を通じて横はつてゐた。さればこそマルクス主義者はナロードニキ主義と無慈悲の闘争を行つたのである。『この世紀の最後の二十五年間のロシア革命思想の全史は小ブルジョアのナロードニキ的社會主義に對するマルクス主義の闘争の歴史である*』とレーニンは書いた。

* レーニン、第八卷、三六〇頁。

ナロードニキ主義に對するこの闘争においてはブレハーフが疑ひなき功績を持つてゐる。彼の著書『我々の意見の相違』と『史的一元論の問題によせて』は、道の選擇や、ナロードニキ主義の克服において、多くの人を助けた。これらの著書によつてブレハーフは自己のナロードニキ的過去と分離したのである。しかしブレハーフは彼がそのナロードニキ主義に熱中した時代に吸収したすべてを自己の意識から除去することができなかつた。

ナロードニキ主義に對する闘争の實例において、ナロードニキ主義に對する關係の問題におけるレーニンとブレハーフとの見解の差異を見ることが出来る。ナロードニキとの主要な論争は、周知の如く、農民に對する關係の問題に行はれた。そしてそこに、この問題に關するブレハーフとレーニンとの異つた態度が極めて明瞭に現はれてゐる。ブレハーフは一般にすべての農民層を反動的と考へ、そしてナロードニキ主義の理論、イデオロギイおよび實踐のその批判において、如何にしてプロレタリアートが農民層を味方に引き入れうるか、といふことに關して何等の言及をもしないといふ論争の方向に傾いた。だがこれは實にロシア革命の主要ではないが、最も本質的な問題であつた。後に我々は、プロレタリアートの獨裁や、プロレタリアートのヘゲモニーの問題の如きロシア革命の最も重要な問題について、レーニンとブレハーフとが非常に遠くかけ離れたことを見よう。

然るにレーニンは異つた仕方ではナロードニキ主義の評價を取扱つた。彼はナロードニキ主義の二つの方面、即ち革命のおよび自由主義的ナロードニキ主義の空想的な農民のおよび小市民的社會主義の反動的理論と農奴制のすべての殘存物の廢絶に關する農民層の革命的要求に歸着したところの一般民主主義的闘争とを嚴密に區別した。だが農民層の二重的性質の表現者たるナロード

ニキ主義のかゝ區別のみが、革命のこの二つの推進力——プロレタリアートと農民層との間の同盟を樹立する可能性を與へたのである。

さればこそナロードニキ主義の評価におけるこの差異は重大な原則的および實踐的意義を持つてゐるのである。

第一章 参考文献

- レーニン、カール・マルクス、全集、第十八卷、一四三頁。フリードリヒ・エンゲルス、全集、第一卷、四三一—四四〇頁。マルクス主義の三つの源泉と三つの構成分、全集、第十六卷、三四九—三五三頁。
 マルクスおよびエンゲルス、共産黨宣言、黨出版所、一九三二年刊。
 マルクス、ゴータ綱領批判、黨出版所、一九三二年刊。
 スターリン、レーニン主義の基礎について、『レーニン主義の諸問題』、五一—七五頁、黨出版所、一九三二年刊。
 スターリン、レーニン主義の問題によつて、『レーニン主義の諸問題』、一九一—二二七頁。
 スターリン、ボルシェヴィズムの歴史の若干の問題について、『レーニン主義の諸問題』、六〇四—六一四頁。

第二章 ロシアにおけるプロレタリアートの

政治的ヘゲモニーのための闘争

〔『労働解放』團からロシア社会民主労働者黨第一回大會まで〕

『労働解放』團

外國に到着した後、ゲー・ヴェ・ブレハーン、ヴェ・イー・ザスリッチ、ペー・ペー・アクセリロッドは、すでに我々が述べたやうに、カール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスとの學說、即ち科學的社會主義を親しく知つた。彼等は西ヨーロッパにおける労働者階級の組織的闘争の經驗を研究することに自發的に且つ眞剣に着手し、それと共に以前の革命的活動の自分自身の經驗の批判にもまた着手した。農民層に働きかけようとしたナロードニキの試みの不成功、労働者の中における活動の最初の成功的な試みは、ブレハーンと彼の同志達をマルクス主義の研究に向ふべく鼓舞したのである。

けれどもこの場合重要な意義を有したことは、成長した労働者階級がロシアにおいて同盟罷業によつて自己を知らしめ、益々組織的且つ革命的に進出したことである。

ナロードニキの學說の眞剣な批判が始まつた。そして勿論ブレハーフと彼の他の同志達は、科學的社會主義の見地から自身の見解を批判し、その正しさを吟味しなければならなかつた。間もなく彼等は、特殊な社會民主主義者グループを組織することが必要だ、といふ結論に到達し、そして一八八三年（即ちカール・マルクスが死んだと同じ年）に、最初の社會民主主義者グループを形成し、それを『労働解放』團と名づけた。一八八四年彼等は『労働解放』團の最初の綱領を發表した。

ブレハーフはその最初のマルクス主義的著作『社會主義と政治闘争』を出版した。新しい社會民主主義運動の基礎には、西ヨーロッパの社會民主主義者の學說と實踐およびまた若いロシアの労働者運動の經驗が置かれてゐた。

當時のロシアの革命家の大多数は、ナロードニキであつたから、ブレハーフと彼によつて作られたグループの新見解に對して敵對的態度を取り、彼等を嘲笑的に『労働解放者』と呼んだ。やがてブレハーフは一層基本的な著作——『我々の意見の相違』を以て進出した。この著書においてブレハーフは、社會民主主義者とナロードニキの間には次の如き意見の相違が存在することを確認してゐる——

- 一、プロレタリア革命は殆どすべてのナロードニキが説教したやうな小市民的、農民的社會主義から發生しない。
 - 二、農村共同體は決して社會生活および經濟の共產主義的形態に向ふ傾向を有するものではなくて、ブルジョアの形態に向ふ傾向を有するものである。何故ならそれは小農民經濟による生産手段および生産要具の私有や、私有財産權を基礎にしてゐるからである。
 - 三、共產主義への移行は農民共同體を通じて行はれるものではない、とブレハーフは正しく證明した。いづれにもせよ、農民共同體はこの問題において端緒とはならない。
 - 四、共產主義運動の端緒はたゞ労働者階級のみが自ら引き受ける。
 - 五、『労働者階級の解放は労働者階級自身の事業でなければならぬ』。
- 當時ブレハーフのこの見解はナロードニキの側から嵐の如き抵抗を受けた。
- けれどもブレハーフの著作において、特に一八八四年の『労働解放』團の最初の綱領において、我々は多くの極めて重大な缺陷をもまた指摘しなければならぬ。このグループは社會主義的インテリゲンチヤに法外に巨大な意義を割當て、またテロルを政治闘争の手段と認めた。
- その外に『労働解放』團は直接的、人民立法に關する誤つた命題、即ち人民は自己の代表者を如

何なる會議、議會等々にも選出する必要がないとか、全人民は自ら直接自己のために法律を作る、といふ見解を支持した。この誤つた見解のうちには、少しばかりナロードニキ主義の再發と、その思想がまだ當時大なる影響を持つてゐた人民の意思派に對する意識的な讓歩さへもあつた。『労働解放』團の綱領の中には、『生産組合への國家補助』といふ誤つた要求が掲げられてゐた。この要求は、マルクス主義的理論および戦術と闘争を行つた、ドイツの社會主義者ラッサールから取られたものである*。然るに農民層の評價においては、我々がすでに指摘した如く、ブレハーノフの見解は、ブルジョア民主主義革命における推進力としての農民層の役割を否定したメンシエヴィキの見解のその後の發展にとつての基礎となつた。

* フェルディナンド・ラッサール、ドイツの社會主義者、有名な著作家にして演説家、カール・マルクスの同時代人(マルクスよりも早く死んだ)。彼は誤つた『貨銀鐵則』から出發して、労働者の經濟闘争および労働組合組織に意義を附與せず、生産組合の發展においてブルジョア國家の援助を期待し、ブルジョア國家は労働者がかゝる生産組合を通じて生産を組織することを援助しうる、と考へた。他方では、ラッサールはブルジョア國家における普通選舉權に大なる意義を附與し、そして有名な反動主義者ビスマルクと協定を結んだ。マルクスおよびエンゲルスはラッサールの日和見主義的理論および戦術に對して闘争を行つた。

一八八七年『労働解放』團は、すでに著しく修正された、そして社會民主黨の綱領にすつと近

い第二の綱領草案を發表したが、この綱領もまた誤つた命題から解放されてはゐなかつた。

一九〇〇年レーニンはこの綱領草案についてかう書いた、『それは十五年前に發表されたにも拘らず、我々の意見によれば、大體において全く満足的であり、自己の任務を解決し且つ全く近代社會民主主義理論の水準に立つてゐる*』と。

* レーニン、第二卷、五一―頁。

一體如何なる方面からレーニンは『労働解放』團の綱領を満足的と考へたか？ 綱領の中には社會主義のために徹底的に、最後まで闘争する階級——プロレタリアート、この階級が提起する目的——共產主義革命、前提條件——プロレタリアートによる政治的權力の奪取、プロレタリアートの國際的連帶性、ロシアにおける社會關係の特殊性——資本主義と地主經濟との二重的抑壓が正確に指示され、當面の任務と闘争手段とが指示されてゐる。けれどもレーニンはこの綱領を眞剣に批判してゐる、特に革命における農民層の役割の問題において。

グループの第二の綱領草案にはかう述べられてゐる、『絶對主義の最も重要な支柱は正に農民層の政治的無關心と精神的立後れとにある』と。

一八九〇年ブレハーノフはかう書いた、『ブルジョアジーとプロレタリアート以外に我々は、我

國において反對派的または革命的結合が立脚しうる他の社會的勢力を見ない*』と。プロレタリアートによる農民闘争の指導を否定しつつ、ブレハーフは一八九一年にかう書いた、『プロレタリアートと「百姓」』とは直實の政治的對照物である。プロレタリアートの歴史的役割は、「百姓」の保守的役割と同じやうに、革命的である**』と。すでに一八九五年に、一方ではレーニンと、他方ではブレハーフおよびアクセリロッドとの間には、後にボルシェヴィキとメンシェヴィキとの間の深刻な意見の相違となつたところの、重大な意見の相違が認められた。かくてアクセリロッドは當時談話中にレーニンに、彼は自由主義者に對するレーニンの態度に一致しない、と述べた。『貴君は、——とアクセリロッドはいつた、——自由主義者に背を向けるが、私は顔を向ける』と。

* ブレハーフ、第三卷、一一九頁。

** 同上、三八二—三八三頁。

しかしプロレタリアートの獨裁とプロレタリアートのヘゲモニーの問題に關するブレハーフと『労働解放』團との見解は、特に誤つてゐた。『社會民主主義者は、——と我々はブレハーフにおいて讀む、——社會革命がたゞプロレタリアートの力によつてのみ行はれうる、と述べた』

と。この見地は全くレーニンの見解に對立してゐる。『貧農とプロレタリアートとの自由な同盟なくしては民主主義は鞏固でなく、社會主義的變革は不可能である』。同志スターリンは、プロレタリアートの同盟者に對する第二インターナショナルの黨とその指導者とのこの態度に次の説明を與へてゐる、『それは何よりも先づ、これらの黨がプロレタリア獨裁を信せず、革命を恐れ且つプロレタリアートを権力に導かうと考へてゐないことによつて説明される。だが革命を恐れる者、プロレタリアートを権力に導くことを欲しない者は、革命におけるプロレタリアートの同盟者の問題に興味を持ちえない、——彼にとつて同盟者の問題は、無關心的な、非現實的な問題だ*』。

* スターリン、レーニン主義の諸問題、三七頁。

この點において非難は、第二インターナショナルの戰術をロシア革命の諸條件に移し且つ適用しようとした『労働解放』團にも移すことができる。

『労働解放』團の綱領を批判しつつ、レーニンは、ボルシェヴィキ的問題提起の基礎を含むところの自分自身の綱領を提出した。

レーニンがその革命的闘争の最初から『労働解放』團のメンシェヴィキ的傾向および見解に對し

て闘争したことを忘れてはならぬ。そして同志スターリンは全ソ聯邦共産黨第十五回大會の結語において正しくも次のことを指摘した、『五人（『労働解放』團の指導者——ヤロスラフスキー）に對するレーニンの決定的闘争なくしては、五人の驅逐なくしては、我黨はボルシエヴィキ黨として鍛へられえなかつたであらう*』と。

* スターリン、第十五回大會における結語、速記報告、三七九頁。

『労働解放』團はそのすべての誤謬にも拘らず最初の社會民主主義者の教育において巨大な意義を持つてゐたことを指摘しなければならぬ。グループは、例へば『共産黨宣言』——階級闘争としての社會の史的発展とプロレタリア革命による社會の共産主義的改造の不可避性とに對する當時の先進労働者の見解が科學的・通俗的な形態で敘述された最初の著作の一つ——の如き、マルクスおよびエンゲルスの著作を翻譯し且つ出版した。このグループは雑誌『ソチアール・デモクラート』を發行した。レーニンは、自己の革命的活動を開始した時、このグループと連絡するために、一八九五年特に外國へ旅行した。レーニンはすでに當時ブレハーフに對して、だが特に阿克セリロッドに對して、未來の黨指導者の印象を與へた*。

* ホルシエヴィキ黨の成立（一九〇三年）に先立つた『労働解放』團およびその他の諸組織の大なる役割を指摘する場

合、著者はレーニンの次の指示によつて指導されてゐる。曰く、『西ヨーロッパにおける社會主義および民主主義の歴史、ロシアの革命運動の歴史、我々の労働者運動の経験——これが、我々が我黨の合目的な組織および戦術を仕上げるために獲得しなければならぬ材料だ。勿論、我々はすべてのこれらの材料をマルクス・レーニン主義の理論および戦術の見地から批判的に評價しなければならなかつた。——エミリヤン・ヤロスラフスキー。』

マルクス主義の普及。最初の社會民主主義者サークル

共産主義の創始者および教師たるマルクスおよびエンゲルスの學說のロシアにおけるヨリ廣汎な普及は、『労働解放』團の外國における成立の時代にあたる。

ロシアにおいて資本主義が顯著な地位を占めず、プロレタリアートがまだ獨立の階級的闘争勢力として進出しなかつた間は、カール・マルクスの學說はロシアにおいて急速な普及を見ることのできなかつた。しかし資本主義は、ロシアにおいて深い根を下すや否や、次々と經濟部門を征服し、市場を自己に従屬させ、農民の財産を處理し始めた。それは巨大な工場を建設し、労働力の外に賣るべき何物をも持たない者の労働を集め始めた。かくして工業都市には顯著なプロレタリアート階級が発生した。このプロレタリア階級は、彼等が工場において受けた恐るべき、非人間的な搾取と和解することができず、自己の完全な無権利と和解することができないで、闘争に

進出した。資本主義の發展に影響されて、労働者の階級闘争は一層廣汎に展開され始め、その現はれは一層明かになつた。この發展せる労働者運動を基礎にして、たゞ『労働解放』團と並行的にのみならず、それと全く獨立的に、ロシアでは社會民主主義者サークルおよびグループが設立され始めた。これは、労働者階級の政治的意識および活動の成長に影響されてロシアにおいて社會民主主義運動が擴大され且つ強化されたことの最もよき證明であつた。

勿論理論もまたこの場合巨大な意義を持つてゐた。即ちマルクス主義理論は先進的労働者にこの運動を新しい見地から理解させ、その進路を定め、そのために計畫を立てる可能性を與へた。

『労働解放』團は、我々がすでに指摘したやうに、當時ロシアの隅々において、主として大工業中心地において組織され始めた最初の社會民主主義者のサークルにとつて、非常に大なる意義を持つてゐた。一八八三—八四年の冬ペテルブルグにおいて、我々の黨史において『ブラゴエフ・サークル』または『ブラゴエフ・グループ』の名で知られてゐる最初のサークルが成立した。ブラゴエフはブルガリヤ人の學生であつた。當時彼はすでにカール・マルクスやラッサールの學說を知つてゐた。

ブラゴエフは、人民の意思派も土地改革派もその中で宣傳を行つたところの、ペテルブルグの先進的労働者および學生と知つた。彼は會合においてマルクス主義（マルクスの學說）を説教し始めた、そして一八八四年ブラゴエフのサークルによつて、多くの點において『労働解放』團の綱領に類似した綱領が作成された。多くの點において『ブラゴエフ・グループ』もまた誤つた道に立ち、多くの點においてそこにもまだナロードニキの見解が保存されてゐたが、ナロードニキ・グループと比較すれば、『ブラゴエフ・グループ』は一步前進した。それは非合法的印刷所を組織して、雑誌『ラボーチー』を發行し始めた。『ブラゴエフ・グループ』によつてペテルブルグの諸所において約十五箇の労働者サークルが作られた。一八八七年ブラゴエフは逮捕され、外國人として國外へ追放され、爾來ブルガリヤの労働者運動に最も活潑に参加し、その最後まで（一九二四年死）ブルガリヤ共產黨の中央委員會委員であつた。

ブラゴエフの後、黨史において『ブルスネフ・グループ』の名の下に知られてゐるグループが成立した。ブルスネフはその指導者の一人であつた。この最初の社會民主主義者サークルには、ボグダーノフ、ノリンスキ、シエルグノフ、プロシン、アフナシエフ、クリマノフ等々の如き、労働者運動において有名な労働者が参加した。彼等によつてもまた約二十箇の労働者サークルが組織された。このグループは同盟罷業に参加し、自己の新聞（勿論非合法的の）を發行しようとする

みた。また特記すべきことは、ブルスネフ・サークルがロシアにおいて初めて、一八九一年にメーデーを祝つたことであつて、この集會にはすでにかなり多数の労働者が参加し、而も労働者によつて——ボグダーノフ、プロシン、アフナシエフ、クリマノフによつて——最初の社會主義演説がなされた。實際には、これらのサークルもまだ嚴密にマルクス主義的なものではなかつた——その中にはナロードニキの見解を持つた人々もゐたが、しかしそれらはすでにヨリ正しい道に沿うて——組織的な労働者運動の道に沿うて——マルクス主義へ進んだ。これらのサークルはまだ政治的組織ではなかつた、それらはまだ目覺めた労働者運動の先頭に立たなかつた。これは宣傳者のサークルであつた。これらのサークルの指導者は、レーニンが『人民の友とは何ぞや』において述べたことを任務とした、即ち労働者階級の鞏固な組織を設立するより前に、その先進的代表者達が科學的社會主義の觀念を我がものにし、以てこれらの觀念が廣汎に普及されることが必要であつた。

これらのサークルの一つ——フェドセエフのサークル——に、まだカザン大學の學生であつたレーニンが参加してゐた。

合法的マルクス主義——『ブルジョア文獻』における

マルクス主義の反映』

かやうに我が工業の發展と共に、工場および鐵道建設の發展と共に、プロレタリアートが成長し、その成長と共にカール・マルクスの學說——マルクス主義の普及が行はれた。

ロシアの労働者大衆が組織的に闘争に進出した時、ナロードニキ主義はすでに粉碎され、『人民の意思』黨はツァールの專制政治に對する闘争において滅亡してゐた。個々の人民の意思派は破壊された勢力を集めようとなほ試みたが、人民の意思派自身の中にはすでに統一は存在しなかつた。労働者運動は革命の發展が何處へ行くかを示した。

『労働解放』團と全く獨立的に革命的マルクス主義者は、十九世紀の九〇年代の中頃に最初の『ロシア労働者階級解放闘争同盟』を作り出したところの、社會民主主義者サークルを組織し始めた。

けれどもナロードニキ主義に對する革命的社會主義の闘争においては、労働者階級にとつてただ一時的な且つ望まぬ同伴者たるにすぎなかつた人々もまた進出した。彼等は、ロシアに

は資本主義が發展しつつあること、ロシアはブルジョア國家に轉化しつつあることを見、そしてナロードニキ主義に對する闘争をば、ロシアにおいて特に進歩的役割を演ずるかの如きブルジョアの利益に専ら労働者運動を順應させるために利用しようを試みた。彼等もまたマルクス主義者と自稱した。しかし彼等はマルクスから資本主義社會の發展法則に關する彼の學説を取つて、この學説の革命的本質を抛棄した。彼等は暴力的プロレタリア革命の不可避性、資本主義の崩壊の不可避性およびプロレタリアートの獨裁の樹立を抹殺し且つ論争しようとするも努力した。レーニン等は彼等をプロレタリアートのブルジョア的影響の運搬者と名づけた。『資本主義の下へ見習う』やうにプロレタリアートに呼びかけた彼等は、實にかかる運搬者であつた。

政府は當時やはり革命的ナロードニキ主義の遺物や、人民の意思派の遺物に對して闘争してゐた。だから政府は、合法的に（公然と）發行されたマルクス主義諸雜誌においてナロードニキ主義の基礎が批判された限りにおいて、最初それらを見ぬ振りをしてゐた。勿論それは決してマルクス主義者に言論の自由が與へられたことを意味するものではない。況して我々は、如何なる『マルクス主義』がこれらの雜誌において大部分場所を占めたかを知つてゐるにおいてをや。然るにレーニンの最初のマルクス主義的著書および論文は、それがやつと出版されるや否や、憲兵がこ

れを焼いたから、非合法的に出版されなければならなかつた。同じく憲兵は、マルクスの學説のやうに見せかけてブルジョアジの利益を擁護してゐた合法的マルクス主義者の指導者の一人——ピョートル・ストルーヴェの偽造を暴露したレーニンの大論文もまたその中に含まれてゐた論文集を焼却した。一時謂ゆる合法的マルクス主義（即ち官許マルクス主義、公然説教したマルクス主義）はブルジョア・インテリゲンチヤの中でかなり多数の支持者を獲得した。これらのマルクス主義者は望しからぬ人々であること、彼等は間もなく我々を裏切ること、彼等はただ一時的同伴者であること、および事の本質において彼等はブルジョアジの利益を擁護することを、レーニンは指摘した。これは實際、その後ピョートル・ストルーヴェ、ベルデヤエフ、ツガン||バラノフスキ―その他の如き『マルクス主義者』が敵對的陣營に移り去つた時に、起つたのである。ピョートル・ストルーヴェは合法的マルクス主義からウランゲルの居候および明瞭な白衛兵||王黨にまで轉落した。その後僧侶になつたブルガコフの如き合法的マルクス主義者もゐた。

合法的マルクス主義者は革命家ではなかつた。これはマルクス主義を自己の階級的利益のために利用しようとしたブルジョア民主主義者であつた。合法的にマルクス主義者は第二インターナショナルの社會民主主義者の大多数がさうであつたやうな改良主義者に近かつた。マルクスか

ら階級闘争を取り上げつゝ、(この場合この學説のすべての稜線を拭ひ取りつゝ)、合法的マルクス主義者は、ドイツのベルンシュタイン派や第二インターナショナルの他の諸黨の改良主義者と同様に、プロレタリア獨裁のための闘争を拒否し、そして労働者階級の革命的暴動およびプロレタリアートによる権力の革命的奪取の觀念に對してまことに敵對的態度を取つた。合法的マルクス主義者に對するレーニンの闘争は、レーニンがロシアの合法的マルクス主義者と我國の労働者運動の内部におけるその後の日和見主義的流派と西歐における第二インターナショナルの修正主義者との間における聯關を常に力説したことによつて、大なる國際的意義を持つてゐた。

『人民の友』とは何ぞや、そして如何に彼等は社會民主主義者に對して闘争するか』

けれども當時レーニンは、合法的マルクス主義者を批判しつゝ、彼等と共に種々の雜誌に参加し、彼等を活動に吸引した。彼は當時の反對派のおよび革命的氣分を有したインテリゲンチヤをナロードニキの影響から引き離さなければならなかつた。自由主義的ナロードニキは『土地と自由』黨、『人民の意思』黨の事業の繼續者と偽稱した。青年の一部がなほ彼等に追隨した。一八九

四年『人民の友』とは何ぞや、そして如何に彼等は社會民主主義者に對して闘争するか』といふ表題の下に非合法的に出版されたレーニンの注意すべき著作は、マルクス主義とマルクス學說に對して激しく喰つてかかつたこれらの『人民の友』の批判に獻げられたものである。遺憾ながらそれは完全には我々に傳へられてゐない。何故ならその一部は憲兵によつて破棄されたからだ。就中この書においてレーニンはすでに、當時合法的マルクス主義がピョートル・ストルツェにおいて説教し始めた觀念と訣別してゐる。しかしこれは、ブレハーノフや、また全『労働解放』團がまだピョートル・ストルツェを『味方』と考へてゐた時期のことであつた。この書は、すでに一八九四年にレーニンが革命の來るべき發展行程を全く正しく理解してゐたことを示してゐる。すでに當時レーニンは労働者階級のうちに切迫しつつある革命の指導者を見、労働者階級が、『すべての民主主義的要素の先頭』に立つことを豫見した。

- レーニンの意見によれば、當時のマルクス主義者は何をなすべきであつたか？
- 一、労働者階級の先進的代表者を(サークルに)集めること。(組織的任務)。
 - 二、彼等が科學的社會主義を我がものにするのを助けること。(宣傳の任務)。
 - 三、ロシアの労働者の歴史的役割の觀念を理解することを助けること、即ち労働者階級のこれ

らの先進的代表者が、ロシアの労働者階級が切迫しつつある革命の指導者、^{ヘゲモニ}主導者であることを理解することを助けること。

四、これらの思想が廣く普及された時には、労働者の分散的な經濟的闘争を意識的な階級闘争に轉化すべき鞏固な黨組織を労働者の中に作ること（労働者政黨の設立）。

五、ただかかる条件の下においてのみ労働者階級は他の闘争的民主主義的要素の先頭に立つことができる。こゝにはすでに革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーの觀念が與へられてゐる。だがプロレタリアートのヘゲモニーは、同志スターリンが正しく指摘したやうに、プロレタリアートの獨裁の胚芽である。

六、労働者階級はツァールの専制政治に對する勝利に立ち停つてはならない、これは彼等にとつては更に進んだ革命の、社會主義革命の端緒であり、『萬國のプロレタリアートと並んで』、共產主義の實現手段たる『勝利的共產主義革命への公然の政治闘争の大道*』の端緒である。

*レーニン、第一卷、二〇〇頁。

かくして殆ど四十年前レーニンは労働者階級の闘争の道を全く明かに表象した。約四十年前レーニンはブルジョア民主主義革命の社會主義革命への轉生の觀念を與へた。この書においてレー

ニンは、『人民の友』の役割で進出したことによつて労働者運動にとつて更に有害であつたところの、自由主義的ナロードニキから根本的に訣別してゐる。レーニンは我國の歴史的發展に對する彼等の理解の全破産を證明した。レーニンの著書『「人民の友」とは何ぞや』は、我黨全體のその後の發展によつて巨大なる意義を持つてゐた。それは當時のマルクス主義者が革命的社會民主主義者として形成されるのを助けた。その中には、今のところまだ萌芽的な形においてではあるが、未來のボルシェヴィキ黨の觀念——コミンテルンの觀念を區別することができる。この觀念は經濟主義者や、次いで彼等の後繼者——メンシエヴィキに對する闘争において最終的に形成された。

まだその最も初期の諸著作『「人民の友」とは何ぞや、そして如何に彼等は社會主義者に對して闘争するか』（一八九四年出版）、『ナロードニキ主義の經濟的内容とストルツェ氏の著書にまけるその批判』（一八九五年）、『ロシア社會民主主義者の任務』（一八九七年）およびその他の多くの著作において、レーニンは革命的マルクス主義のあらゆる歪曲、偽造に對して決定的に進出し、プロレタリア闘争の理論および戰術の最も重要な諸問題を一層高い段階に引上げ且つマルクス主義者の前に極めて現實的な任務を提起した。レーニンのこれらの著作は革命家レーニン

派の新しい世代を教育した。レーニンはこれらの著作によつてただロシア革命のみの問題を正しく提起したのではない、——これらの著作は最初から巨大な國際的意義を持つてゐた。それらは全社會主義世界の前に革命のすべての根本問題を新規に、戰闘的に提起し且つ解決した。

『労働者階級解放闘争同盟』

八〇年代の初めロシアの隅々の最大工業中心地において分散的な労働者サークルが組織されたことを、我々はすでに知つてゐる。これらのサークルを統一しうるやうな如何なる黨もまだ存在しなかつた。しかしこの時代に我工業は嵐の如く成長した、正にこの時期にロシアにおいて眞の産業革命が行はれた。絶對的數字においてはロシアはまだヨーロッパから非常に遠く後れてゐたけれども、テンボにおいて、資本主義的發展の速度においては、ロシアはヨーロッパを追ひ越し、アメリカ合衆國をもまた追ひ越した。だが『アメリカ的』テンボは排他的に急速なテンボとして、周知の如く評判にさへなつてゐたのである。工業の一般的生産性は一八八七年の十三億ルーブルから一九〇〇年の三十二億ルーブルに増大した。労働者數もまた非常に激しく増加した。かくて金屬工の數は一八四三年の十九萬三千人から一九〇〇年の三十四萬六千人に増加した。炭礦労働

者は一八九〇年の四萬人から一八九八年の七萬人に増加した。外國資本の流入は、ロシアの資本主義的企業への投資が有利なために、工業の嵐の如き成長を助長した。未聞の搾取、農奴制、如何なる種類の労働立法も殆ど全く缺如してゐること、低い賃銀——すべてこれらのものが資本家の排他的な利潤を助長したのである。しかし資本主義の嵐の如き成長は、社會民主主義的指導を必要とした強力な労働者運動をもまた喚び起した。人々は社會民主主義のサークル的宣傳から大衆的活動に移行せねばならなかつた。この時代には、徐々にではあるが、すでに労働者階級の中から組織的大衆的革命的闘争の必要を意識した個々の労働者が輩出した。個々のマルクス主義者は諸工場の先進的労働者と連絡を結び、宣傳のためのサークルを組織した。九〇年代の後半から種々のサークルを統一する試みがなされ、革命的闘争の新方法への移行の試みがなされた。

一八九三年ペテルブルグにおけるレーニンの活動の開始は、煽動へのこの移行と一致してゐる。

ヴ・イー・ウリヤノフ（彼はすでに革命家になると間もなくレーニンと呼ばれ始め、彼もまたこの名前でその論文の大多數に署名した）は、一八七〇年四月二十二日（舊曆十日）シンピルスクに生れた。彼の父イーリヤ・ニコラエヴィチは、小市民的家族から出で、シンピルスク縣の小學

校の視學であり、母マリヤ・アレクサンドロヴナは、醫師の娘であつた。レーニンがギムナジウム中學校を卒業した時、彼の兄アレクサンドルが逮捕された。アレクサンドルは『人民の意思』黨に参加してをり、そして『人民の意思』黨がアレクサンドル二世に對してなしたことを、他の同志と共にツァール・アレクサンドル三世に對して繰返さうと欲したのである。ツァールの暗殺を命ぜられたその日に、ウリヤノフその他は逮捕され、そして數週間の後に絞殺された。レーニンは兄との談話によつてすでに革命運動を知ることができた。けれども彼は、『人民の意思』黨が進んだ道は適當ではない、といふ結論に到達した。彼の兄アレクサンドルもまた、テロリズムの承認にも拘らず、自ら純粹の人民の意思派とは考へてゐなかつた。マルクス主義を根本的に知つてゐたレーニンは、我々は他の道を進まう、といつた。これは大衆的革命的闘争のために労働者階級を組織する道、マルクスおよびエンゲルスの革命的學說によつて照明された道であつた。一八八九年レーニンはカザン大學に入学し、そして同年學生ストライキに参加のために大學から除名され、コクシキノ村へ追放された。大なる困難を嘗めてレーニンはカザンへ歸ることに成功し、そこにおいて彼は、ヴェ・イ・フェドセエフによつて組織されたマルクス主義者のサークルを知つた。こゝで彼はたゞマルクスの學說のみならず、『労働解放』團が出版したブレハーフの著書をも根本的

に學んだ。次いでレーニンはサマラへ移り、そして彼の周圍には忽ちマルクス主義者の最初のサークルが形成された。彼を親しく知つた人々の追憶によつて判断すれば、一八九一年末、レーニンは自由にフランス語やドイツ語を読み、英語を研究し、マルクスの『資本論』を學び、そして彼はやつと二十二歳であつたにも拘らず、全く完成された革命家であつた。すでに當時彼は農民層の研究に献げられたその最初の著作——『農民生活における新經濟運動』を書き始めてゐた。一八九三年末レーニンはペテルブルグへ移つたが、ここでは忽ち彼の周圍にマルクス主義者の陣營の最もハッキリした人物が集まつた。こゝでレーニンはエヌ・カー・クルプスカヤにあつたが、彼女は爾來彼の生涯の終りに至るまでいつも變らずレーニンと相携へて活動した。

ウラヂミール・イリイチはすでに當時その確信によつてのみならず、たゞその大膽さによつてのみならず、またその深い知識によつて、すべての人に非常に強い印象を與へた。彼は當時においてもまた二つの戦線において闘争を行はなければならなかつた、即ち一方では、運動を後方へ引張つたナロードニキと、他方では、マルクスの學說を歪曲し、それを資本主義的搾取のために利用した合法的マルクス主義者と。一八九五年ペテルブルグにおいて社會民主主義者のグループが組織され、それにはレーニン、クルジジヤノフスキー、エヌ・カー・クルプスカヤ、スタルコフ、

ツェデバウム（マルトフ）、ヴァネエフその他が加入した。これらの同志はペテルブルグの諸區の個々のサークルにおいて活動した。レーニンはネフスキー關門外において活動した。そこにおいて彼は、パブシキン、ボドロフ、シエルグノフその他の如き優れた労働者と知った。

レーニンはまだ若かつたけれども、知識や経験の故に人々は彼を「老人」と呼んだ。當時活動のためにレーニンの周圍に集まつた人々もまた「老人」と呼ばれたが、彼等と一致しなかつた社會民主主義者は、「青年」と呼ばれた。一八九五年十二月中頃「老人達」によつて形成されたサークルは、「労働者階級解放ペテルブルグ「闘争同盟」」といふ名稱を取つた。ペテルブルグ「闘争同盟」は他の諸地方における個々の労働者サークルのかゝる同盟への統一に強い刺戟を與へた。かくて我々は、一八九五年五月に「モスクワ労働者同盟」が組織されたのを見る。その後「労働者階級解放闘争同盟」は一聯の都市において——エカテリノスラフやキエフにおいて組織された。ニコラエフでは一八九七年に「南露労働者同盟」が組織された。

「闘争同盟」は大衆的煽動に非常に大なる意義を附與した。それはサークルにおける宣傳的活動によつて満足しなかつた、即ち労働者の小グループからよく訓練されたマルクス主義者、社會民主主義者を教育することだけでは満足しなかつた。「闘争同盟」は労働者の大衆的闘争を指導

することを任務とした。何故ならたゞ闘争においてのみ労働者階級は教育され、たゞ闘争においてのみ彼等は自己の力を認識し、自己の任務を明白に規定し且つ自己の敵の力を認識することを學ぶからである、——「闘争同盟」はその活動において宣傳から煽動へ移行した。何處かの工場で同盟罷業が発生した時には、同盟は直ちにピラを發行したが、その中には闘争の任務が解説され、説明されてゐた。「闘争同盟」は九〇年代の中頃の大同盟罷業を指導し、これらの同盟罷業を組織した。新聞「ラボーチエ・デイエロ」を發行することさへ決議された。この新聞の先頭にはレーニンが立たなければならなかつた。新聞がすでに發行準備されてゐた時、一八九五年十二月八日「老人」の中央グループの大部分——レーニン、スタルコフ、クルジジャンフスキー、ザボロジュツ、ヴァネエフが逮捕された。この逮捕はペテルブルグ「闘争同盟」のその後の運命にとつて非常に大なる意義を持つてゐた。最初レーニンの逮捕の後同盟の先頭には、メンシエヴィキの未來の指導者マルトフが立つた。當時マルトフはまだレーニンの最も親しい同志であつた。殆どすべての「老人」が暫くして逮捕された。同盟の先頭にはすでに「青年」、即ち如何に大衆的活動を導くべきか、如何なる方向、如何なる道に労働者階級の若い運動を導くべきか、といふ問題について、「老人」および先づ第一にレーニンと一致しなかつたところの、社會民主主義者のグループ

が立つた。

レーニンは監獄においてもまた労働者組織のために活動することを止めなかつた。監獄の中から彼は秘密に原稿を送つた。例へば一八九六年のメーデーのピラはレーニンによつて監獄の中で、未決監の中で作成された。

レーニンや他の『老人』は、当時、労働者階級の経済闘争を政治闘争と引離してはならないことを證明し、すべての階級闘争は政治闘争であること、労働者階級の意識のうちには彼等の経済的地位とかゝる経済的地位を従属させる政治的秩序とを絶えず結びつけなければならないこと、だから労働者階級と経営主との一切の衝突は、これらの事實と萬國において支配する政治的秩序とを最も後れた労働者の頭の中で結びつけるために利用されなければならないことに關するマルクスの思想を證明しなければならなかつた。

政治闘争が労働者階級を彼等の主要な、直接的經濟闘争の任務から引離すかの如く説教した『青年』は、これと一致しなかつた。しかし政治意識、即ちツールの専制政治のロシアのすべては一八九五年五月一日にはモスクワにおいてメーデーが組織され、二百五十人以上の労働者がそれに參加した。一八九六年夏ペテルブルグにおいて多く大同盟罷業が行はれ、『闘争同盟』はこれに非常に大なる參加をなし、個々の企業の労働者の闘争を結合し、組織した。一八九六年バリ・コンミュニオン二十五周年に際して、『モスクワ労働者同盟』はロシアの労働者からフランスの労働者への挨拶の發送を組織した。二十八工場において約六百の署名を集めることに成功した。ガス工場の労働者がニコライ・ロマノフの戴冠式の日にはガスを閉鎖して、クレムリンを暗黒化するこ

とが決議された場合さへもあつた。

一八九六年末ペテルブルグ『労働者階級解放闘争同盟』は、『老人』の逮捕の結果および『青年』が同盟を指導するやうになつた結果、革命的な道から離れたけれども、この同盟の組織の事實自體が巨大な意義を持つてゐた。レーニンとペテルブルグにおける彼の同志とが指導精神としてゐた思想は、當時種々の地方から出た多くの革命家の頭に浸潤してゐた。それは革命的社會民主黨設立の思想であつた。それは労働者階級の中における大衆的煽動、ただ経済的のみならず、また政治的煽動への移行の思想であつた。しかしさしあたりかかる黨を組織する前に、謂ゆる經濟主義者、即ちレーニンその他の『老人』の逮捕の後ペテルブルグ『闘争同盟』の先頭に立つた『青年』に對する戦ひに耐へなければならなかつた。

當時におけるペテルブルグ『闘争同盟』の意義は、それが事實上の指導的中心と認められてをり、『労働者運動に立脚し、資本主義および絶対主義に對するプロレタリアートの階級闘争を指導する革命黨の萌芽』（レーニン）の役割を演じたことにあつた。レーニンは、決定的戦闘のために労働者階級とその同盟者との周圍に結成しようとするところの、労働者の戦闘的黨の設立を全力を盡して宣傳した。彼は屢々『戦闘的』黨について語つた。レーニンの指導の下におけるペテルブルグ『労働者階級解放闘争同盟』こそ、實にかかる新しい型の黨——『戦闘的』黨——の萌芽であつた。

第一回黨大會（一八九八年）以前におけるロシアにおけるマルクス主義の普及の初期を總括して、レーニンは、次の三期を區別してゐる。第一期——約十年間（一八八四—一八九四年）——『労働解放』團の成立からペテルブルグ『労働者階級解放闘争同盟』の組織まで。『これは社會民主主義の理論および綱領の發生および強化の時期であつた。ロシアにおける新しき傾向の支持者の数は極めて少かつた。社會民主主義は労働者なしに存在し、政黨として胎兒的發展を経験する』。

『第二期は一八九四—一八九八年の三年間（ペテルブルグ『闘争同盟』の成立から第一回黨大會まで——ヤロスラフスキー）と包括する。社會民主主義は社會運動として、人民大衆の昂揚として、政黨としてこの世に現はれた。それは幼年期および少年期である。ナロードニキに對する闘争と労働者への接近とに對するインテリゲンチヤの一般的魅惑、同盟罷業に對する労働者の一般的魅惑は、疫病の速さで擴まる。運動は巨大な成功を遂げる。指導者の大多數は全く若い人々である……その若さのために彼等は實際的活動に準備されてゐないので、恐しく急速に舞臺から消える。しかし彼等における活動の規模は大部分非常に廣汎であつた。彼等の多くは人民の意思派として革命的思想を持ち始めたのである。殆どすべての人が青年時代にテロルの英雄に對して歡喜して傾倒したのである。この英雄的傳統の魅惑的印象の否認は一つの闘争に値し、飽くまで人民の意思派に忠實であるよう欲した人々、若い社會民主主義者が高く尊敬した人々との分離を伴つた。闘争は否でも應でも勉強させ、あらゆる傾向の非合法的著作を讀ませ、合法的ナロードニキ主義の諸問題を強制的に研究させた。この闘争において訓練された社會民主主義者は、彼等を明るい光で照らしたマルクス主義の理論についても、專制政治の顛覆の任務についても、「一瞬間も」忘れることなしに、労働者運動に入つて行つた。一八九八年の黨の成立はこの時期の社會民主主義者の最も浮彫的なまた同時に最後の事業であつた*』。

* レーニン、第四卷、四九九頁。

九四

『第三期は一八九七年に準備され、そして一八九八年に決定的に第二期に代る』。レーニンはこの時期を離散、崩壊および動搖の時期と呼んでゐる。『少年期には人の聲が變るものだ。この時期のロシア社會民主主義においてもまた、聲が變り始め、調子外れの響きが出始めた』。この調子外れの聲は、一方では合法的マルクス主義者のストルーヴェ、プロコポヴィチその他の聲であり、他方では、經濟主義者のマルチノフ、クリチエフスキその他の聲である。しかしレーニンは次のことを力説してゐる、『……ただ指導者だけが離散したり退却したのであつて、運動自體は成長し且つ巨大な前進をなし續けた。プロレタリア鬭争は新しい労働者層を把握し且つ全ロシアに普及すると同時に、學生層や他の人口層における民主主義的精神の活躍に間接に影響を及ぼした*』と。

* レーニン、『何を爲すべきか?』、全集、第四卷、四九九―五〇〇頁。

レーニンは第一回黨大會以前のロシアにおける社會民主主義の發展をかやうに特徴づけてゐる。

第一回黨大會。第一回大會宣言

九〇年代の終りに諸々の大工業中心地において個々の労働者サークルが社會民主主義組織に統一されると同時に、これらの組織が小さなサークルにおける宣傳から大衆的煽動に移行したことは、我々がすでに見たところである。それと同時に運動の成長に影響されて、多くの同志において、それらの分散的に活動してゐる組織の一つの社會民主黨*に組織しなければならない、といふ思想が成熟した。すでに一八九六年の初めかかる試みが『モスクワ同盟』によつてなされた。大會のプログラムさへも作成されたが、それを召集することには成功しなかつた。一八九七年の初めキエフ『労働者階級解放鬭争同盟』の決議によつて全ロシア的『ラボーチャヤ・ガゼータ』が發行され始めた。一八九七年三月大會を召集しようとするキエフ組織の試みがなされたが、この試みは不成功に終つた。全部で三人の代議員（ペテルブルグ、キエフおよびポーランドの社會民主主義者グループから）が集まり、彼等は自ら會議を宣言した。

* 第二インターナショナルに加入し、自らマルクスの學說の支持者と考へた黨は、社會民主黨と稱せられた。

そして漸く、一八九八年三月一日、ミンスクにおいて、第一回黨大會が開かれ、それには社會民主

義組織の九人の代表者、即ちベテルブルグ、モスクワ、キエフ、エカテリノスラフの『闘争同盟』から一人宛、ユダヤ人の労働者黨組織『ブンド』の代表者三人、キエフで発行された『ラボーチャ・ガゼータ』の代表者二人が出席した。この九人の中ただ一人の代議員だけが職業上労働者であつたが、それにも拘らずこの大會は労働者黨の設立事業において疑ひもなき意義を持つてゐる。『ラボーチャ・ガゼータ』は黨の中央機關紙と認められ、三人より成る中央委員會が選ばれた(エス・イー・ラドチェンコ、アー・クレメル、ペー・エイ德里マン)。組織規約が作成され、ロシア社會民主労働者黨宣言が採用された。そしてこの宣言の中には黨の最も重要な、當面の任務は政治的自由の獲得であることが述べられた。社會民主黨は『人民の意思』黨の闘争を繼續するが、特殊な道を進むことが指摘された。黨は組織された労働者大衆の階級的運動の道を進む。宣言の中には、すべての地方的組織、サークルを統一的なロシア社會民主労働者黨に統一することを任務とすることが述べられた。

かくして我々は、第一回黨大會が労働者黨の自己規定の意味で大なる意義を持つてゐたことを見るのである。實際のところ、大會で選ばれた中央委員會は、『ラボーチャ・ガゼータ』印刷所および大會の全員並び文獻と共に逮捕された。諸都市において約五百人の社會民主主義者が逮捕さ

れ、キエフだけでも百七十六人逮捕された。すでにこの數字だけでも社會民主主義運動が如何に進展したか、といふことについて若干の概念を與へるのである。この大會においては極めて少數の組織が代表されたけれども、個々の組織、個々の『闘争同盟』は黨に合流して、この日からロシア社會民主労働者黨の組織として存在し始めた。第一回大會宣言は政治闘争の任務に當然の地位を與へた。このことは特に必要であり且つ重要であつた。蓋しこの時代に黨の影響は非常に強化して、謂ゆる『青年』または呼ばれ始めた經濟主義者の黨内における危険な病氣の清算といふ極めて重大な任務が、ロシア社會民主労働者黨の革命的部分に課せられてゐたからである。

第一回大會の基本的な缺陷は、大會が黨の綱領を與へず、最も重要な戰術問題に關する決議を與へなかつたことにあつた。そしてこの大會の組織上の決議は戰闘的プロレタリア黨の形成のための條件を作り出さなかつた。だから、一八九七年に組織された組織『ブンド』(リトワニヤ、ポーランドおよびロシアにおける一般的ユダヤ人労働者同盟)は、日和見主義者に指導されて、正に第一回大會のこの組織上の決議をその後熱心に固執した。

第一回大會宣言は一般に極めて弱い、そして原則上決して維持されなかつた文獻である。その中には、プロレタリアートへの政權の移行の不可避性の如き極めて重要なモメントの指摘が缺け

てをり、その政治闘争におけるプロレタリアートの同盟者について何事も述べられてゐない。それにも拘らずこの宣言は大なる政治的、組織的意義を持つてゐた。それは、地方グループが、黨と結合することによつて、『意識的階級闘争の新時代へのロシア革命運動の移行を強化する*』時の一步を表はした。プロレタリアートの指導的役割とブルジョアに對するその態度との規定にとつての原則的關係において非常に重要なのは、『ヨーロッパの東方へ進めば進むほど、ブルジョアジーは益々弱く、臆病に且つ卑劣となり、益々大なる文化的政治的任務がプロレタリアートの分前に落ちかゝる**』といふ宣言の聲明である。宣言にはまた、政治的自由の獲得は『ただプロレタリアートの偉大な歴史的使命の實現への、人による人の搾取の餘地の存在しないやうな社會制度の創造への第一歩たるにすぎない』ことが述べられてゐた。

* レーニン全集、第二卷、六一七頁よつて引用。

** レーニン全集、第二卷、六一六頁によつて引用。

*** 同上

かくて我々は社會民主黨の成立の次の如き諸段階を見るのである——

一、資本主義の成長は、まだ決定的にはないけれども、革命的ナロードニキの幻影を清算する。ただ書籍のみではなくて、生活、實踐の影響を受けて、階級闘争の新しい要因、新しい階

級——プロレタリアートの成長の影響を受けて、外國においてまたロシアにおいて社會民主主義的サークルが作り出される。これらのサークルの基本的な活動は、宣傳であつて、まだ大衆には觸れない。

二、資本主義の嵐の如き發展とそれによつて喚び起された労働者運動との影響を受けて急轉が到來する。社會民主主義的サークルはサークル主義から大衆的煽動への移行を通じて、大衆との連絡および闘争の指導の最初の試みに移る。けれども問題を形式的にはなくて、採用された決議の本質によつて取扱ふならば、ミンスクにおける一八九八年の大會ではなくて、ポルシエヴィキ黨の存在の基礎を据えた第二回黨大會を我々は我黨の最初の大會と考へなければならぬ。

この時期は革命的マルクス主義者の最初の組織を大なる經驗によつて豊富ならしめた。『闘争同盟』はすでに豊富な組織的經驗を持つてをり、そしてこの經驗はサークル主義から職業的革命家の集中的黨組織に關する問題の提起へ移行する可能性を與へた。宣傳的活動は數十人の先進的労働者を大衆運動の指導に準備した。九〇年代のストライキの指導の經驗もまた存在した。ナロードニキ、經濟主義者および合法的マルクス主義者に對する闘争はレーニンの支持者を觀念的に鍛へた。これは觀念的離散と組織における原始性との清算に關する問題を提起する可能性を保證

したところの、準備期であつた。

第二章 参考文献

レーニン、『人民の友』とは何ぞや、そして如何に彼等は社會民主主義者に對して闘争するか？ 全集、第一卷、一七四—二〇〇頁。

レーニン、ナロードニキ主義の經濟的内容ミストルーヴェ氏の著書におけるその批判、全集、第一卷、第二章、二八三—三〇九頁。

レーニン、ロシア社會民主主義者の任務、全集、第二卷、一六七—一九〇頁。

第三章 黨のための闘争

(崩壊、離散、動搖の時期。『イスクラ』の闘争)

經濟主義者——ロシア社會民主労働者黨における

日和見主義的流派

個々のサークルにおける宣傳から大衆の中における煽動および革命的活動への移行は、非常に大なる意義を持つてゐた。それは何よりも先づこの大衆運動の目的および活動に關する問題を提起した。レーニンを先頭に戴くペテルブルグ『労働者階級解放闘争同盟』が労働者階級の政治的任務に關する問題を如何に提起したかは、我々がすでに見たところである。しかし忘れてならないことは、當時、労働者階級の中において革命的活動を行ふ準備のある、最後まで徹底的なマルクス主義者が自らマルクス主義者と稱したのみならず、ナロードニキ運動の途中で意見を變へたブルジョア・インテリゲンチヤの多くの代表者がマルクス主義者と稱したことである。我々は上に合法的マルクス主義者について書いた。彼等の多くは、そのマルクス主義的文句の下に最も眞實のブルジョア民主主義者が隠蔽された、といふやうなブルジョア・インテリゲンチヤであつた。

このインテリゲンチヤの眼前において、一八九六—一八九七年には大衆的な労働者罷業が行はれた。政府と資本家はその同盟罷業運動に恐愕し、そして一八九七年には労働日の短縮に關する政府の法律が發布された。これは組織的階級闘争によつて、大衆的同盟罷業によつて達成された、労働者階級の勝利であつた。この場合忘れてならないことは、この法律が産業においてまだ昂揚が支配してゐたやうな事情の下において達成されたことである。それ故一八九九年末まで経済的同盟罷業運動は弱まらなかつた。さればこそ若干の労働者運動参加者の中に、第一番にインテリゲンチヤや、そしてまた階級意識の乏しい労働者グループの中に、労働者階級は政治闘争に従事してはならない、政治闘争は労働者階級をその主要且つ眞實の任務から外らし、経済闘争の成功を妨げる、といふ思想が発生したのである。社會民主黨の内部に日和見主義的流派が——謂ゆる經濟主義が成立した。その見解は次の如くであつた、即ち自由主義ブルジョアジヤには政治闘争、労働者には経済闘争と。これは、労働者階級の中で自由主義ブルジョアジヤの仕事をした經濟主義者を賞讃したところの、自由主義ブルジョアジヤに相應しかつた。この場合經濟闘争に夢中になつた人々は、経済的同盟罷業の、一時的成功が産業の昂揚によつて喚び起されたものであることを忘れ、そして彼等は純經濟的同盟罷業をプロレタリアートの行動の不變の原則に、彼等の闘争

の殆ど唯一の手段に轉化した。けれども問題は、ただ、資本主義の一時的な經濟的昂揚が成功的な經濟闘争のため、若干の經濟的改善を獲得するための若干の前提を作り出したことのみであつたのではない。ロシアの經濟主義は、ヨーロッパにおいて第二インターナショナルの諸黨の中に廣く普及されたところの、そして資本主義に對する徹底的闘争のためではなくて、資本家の利益への社會民主黨の順應のために作り上げられた見解の一體系であつたところの、國際的日和見主義の現はれであつた。ロシアにおける革命的闘争の諸條件の下においては、ロシアの經濟主義は、我々が下に見る如く、革命的闘争の否認、ブルジョア民主主義革命におけるプロレタリアートの指導的役割の否認およびプロレタリアートの獨裁のための闘争の否認を意味してゐた。

經濟主義者は『老人』(レーニンおよびその他)の失敗の後ただペテルブルグ『労働者階級解放闘争同盟』の先頭に立つたのみならず、一八九八年には『ロシア社會民主主義者國外同盟』のうちにもまた多数急に現はれた。クリチエフスキ、マルチノフ、アキモノのグループによつて發行された雑誌『ラボーチエ・ディオ派』は、事實上經濟主義者の特殊な變種の國外出版物であつた。『ラボーチエ・ディオ派』はマルクス主義的美辭麗句を誇示したが、本質においては同じ經濟主義者であつた。彼等は労働者運動の『段階』説を發明したが、それは、労働者運動は最初はた

だ、経済的でなければならぬ、そして後に漸く政治的になりうる、といふにあつた。この理論は政治闘争の事実上の否認と殆ど異ならなかつた。彼等は組織の構造における原始性を擁護し、そしてこの點において経済主義者に非常によく似てゐた。彼等は運動の原始性の前に叩頭し、黨の役割を日和見主義的に引き下げた。彼等は、ブルジョアジーに有利に且つその利益のためにマルクス主義を偽造し、俗悪化する見解の全體系を成したところの、ベルンシュタインの日和見主義的觀念を『批判の自由』を口實にして引き摺り廻した。

ペテルブルグにおいて経済主義者は雑誌『ラボーチェ・ムスリ』を發行し（一八九七年から一九〇二年まで）、その一部分の號はペテルブルグ自體において、一部分は國外において印刷された。『ラボーチェ・ムスリ派』は國外における『ラボーチェ・ディエロ派』よりも公然と自己の日和見主義的見解を發言した。

経済主義者は労働者に、政治運動、政治的任務のための闘争は労働者黨の任務には入らないこと、この仕事には革命的民主主義者——インテリゲンチヤ、學生、ゼムストヴォ等々が従事しなければならぬことを説得した。経済主義者はブルジョアの政策を運搬した、或ひはレーニンが述べたやうに、『経済主義はプロレタリアトに對するブルジョアの影響の運搬者であつた。』

経済主義者は集中的に組織された黨を設立することに對して闘争した。我々の災厄であつたこと、——原始性、離散、動搖、當時ツァーリズムの治下においては、互ひに連絡されないで、たゞ個々のサークルのみが諸都市で存在しえたことを、経済主義者は善行に、原則に轉化した。黨は勿論この原始性に對し闘争しなければならなかつたし、黨はそれに對して闘争を行つた。革命的社會民主主義者は労働者に、革命運動の成功のためには、それが相互に一致し（綱領、戰術）且つ労働者の物質的狀態の改善のための彼等の經濟闘争と革命的活動のすべての爾餘の方面とを結びつけるところの黨によつて意識的に指導されることが必要だ、といふことを説明した。

経済主義者は『純労働者同盟』、即ちたゞ經濟闘争のみを行ふ同盟を主張した。萬國、特にイギリスやアメリカのブルジョアジーは、労働組合即ちトレード・ユニオンのかかる運動を支持しようとして努力した。これが政治（政策）の否認だ、と考へることは誤つてゐるであらう、——否、これはブルジョアジーに有利な、特殊な政策であり、たゞこの政策は自由主義的、ブルジョアの政策なのである。かくしてこの問題においてもまた経済主義者は労働者階級をブルジョアジーに有利な道へ押しやつたのである。

レーニンはずでに當時、労働者階級がたゞ社會主義的政策のみならず、またブルジョアの、トレ

ード・ユニオニズム的政策を行ひうる、といふ事實を鋭く且つ決定的に力説した。第二インターナショナルの政策は、正にかゝるトレード・ユニオニズム的、即ちブルジョア的政策の實例である。

經濟主義者は自然發生的な、即ち黨によつて指導されない労働者運動を主張し、そして労働者大衆が指導者を持つことを欲しないことを證明した。憲兵は自己流にこのことを證明した、即ち彼等は労働者運動の指導者を逮捕した。ブルジョアジーは、労働者階級の利益を勇敢に主張するプロレタリア指導者に對してあらゆる手段によつて喰つてかゝつた。我々の見る如く、この——指導者に關する——問題においてもまた經濟主義者はプロレタリア的な仕事ではなくて、ブルジョア的な仕事をしたのである。

最後に、經濟主義者は理論の問題に對して、特にマルクスの學說の科學的研究の問題に對して、非常に傲慢な態度を取つた。これによつて彼等は労働者階級を武装解除した。レーニンの後継者、ボルシエヴィキは、常に労働者階級における自己の活動を、労働者運動はそこにおいて三つの戦線、即ち經濟的、政治的および理論的戦線における闘争が結合される場合においてのみ、成功しうるのだ、といふマルクス＝エンゲルスの命題の上に据ゑてゐる。例へばエンゲルスは、ドイツ労働

者運動の力を就中、それがプロレタリア運動の諸問題の大なる理論的研究に立脚したことによつて説明した。エンゲルスの意見によれば、イギリスにおける労働者運動の弱い方面はかゝる研究の缺如にあつた。ボルシエヴィキは革命的理論のための闘争の旗を高く掲げた。ベルンシュタイン主義に對する闘争の仕事においてはレーニンに巨大な國際的功績がある。『何を爲すべきか?』の如き彼の著作は、なほ今日に至るまで國際プロレタリアートが労働者階級の隊伍における日和見主義的理論および戦術に對して闘争を行ふことを助けるのである。

經濟主義者は、労働者階級の戦術——あれやこれやの瞬間におけるその行動——が一定の計畫によつて構成されなければならない、といふことを認めようと欲しなかつた。レーニンと革命的マルクス主義者とは熟慮された闘争計畫を基礎とするかゝる戦術を正に主張した。然るに經濟主義者は、雑誌『ラボー・チエ・ディエロ』において、労働者階級は闘争計畫を持ちえない、彼等は『その場合々に應じて』行動しなければならない、と説教した。

一八八九年クスコフおよびプロコボヴィチを先頭とする數人のマルクス主義者が、經濟主義者の見解を叙述した回章を以て進出した。この書簡は『クレード』と稱せられた（それはラテン語で『信仰』または『信仰告白』を意味する）。經濟主義者が『クレード』において説教した主

要な思想は、獨立的政治闘争を行ふことは労働者階級の仕事ではない、これは自由主義的ブルジョアジーの仕事であつて、労働者階級はたゞ自由主義的ブルジョアジーを支持しなければならない、といふにあつた。

經濟主義者は自己の文書において、マルクス主義者は『獨立的労働者黨を組織すべきではなくて、すべての他の非労働者の社會層の急進主義的または自由主義的反対派活動に参加すべきである』と率直に聲明した。かくして労働者階級にはたゞ副次的役割、反対派の役割が當てがはれただけで——それ以上のものはあてがはれなかつた。

これに應じて經濟主義者は、ブレハーノフによつて『ヴァーデクム』（『道案内』）の中に公表された一書簡において自己の計畫を叙述した。『我々は労働者にたゞ經濟的搾取の制限についてののみ語らなければならぬ……現代の労働者は、彼等を統一しうる一般的要求を非常に少ししか持つてゐない……巨大な労働者大衆は政治に非常に少くしか興味を持たず、そしてたゞ職業的目的をのみ追求する……もしインテリゲンチヤがプロレタリアートにおいて成功的に活動しようとするならば、たゞ彼等の必要の上に自己の綱領を建設しなければならぬ。時間の不生産的浪費だ——労働者に資本主義や、專制政治や、政治について説明することは、従つて黨の設立に關する

空想は無意味である……この觀念はサークルにおいて發展させることはできるが、決してそれを煽動活動のプログラムに含ませるはならない。ベルギーの協同組合、共濟基金その他——これが我々の理想だ……*』

* ブレハーノフ全集、第十二卷附録、四九六—四九七頁。

經濟主義者の基本的文書——『クレード』——が流刑地のウラヂミール・イリーチに届いた時（彼は當時エニセイスカヤ縣ミヌシンスキー郡シユシンスコエ村の流刑地にあつた）、彼は當時附近にゐたすべての政治的流刑者のマルクス主義者の協議會を召集し、そして十七人の同志は、經濟主義に對する政治闘争のために鋭く發言したところの自己の抗議を作成した。レーニンによつて書かれたこの抗議は、我黨にとつて極めて大なる意義を持つてゐた。少し経つてゲー・ヴェ・ブレハーノフもまた經濟主義者とその雑誌『ラボーチエ・ディエロ』に對して闘争を行ひ、『道案内』（ラテン語で『ヴァーデクム』）といふ名稱の小冊子を發行した。

レーニンとすべての彼の追隨者とは經濟主義者に對して決定的な戦ひを行つた。レーニンの言葉によれば、『經濟主義』は『……原則的な點においてマルクス主義の俗悪化であり、日和見主義の最新の變種たる、現代的「批判」の前にさへ孤立無援である。政治的な點においては、それは

政治的煽動および政治的闘争を狭めまた些事に代へようとする努力であり、自己の手に全民主主義運動の指導を獲得することなくしては社會民主主義は専制政治を顛覆しえないことの無理解であり、戰術的な點においては完全な不安定であり……組織的な點においては、運動の大衆的性質が、準備的闘争やあらゆる意外の爆發や、最後に、最後の決定的襲撃を指導する能力を有するところの、強力且つ集中的な革命家の組織を設立する我々の義務をたゞ弱めないのみならず、反對に強めることの無理解である*。

* レーニン、第四卷、三四二—三四三頁。

問題は正に、經濟主義者が労働者階級の注意を専制政府の顛覆の如き問題から外らすことに意識的に努力したことにあつた。彼等は、ブルジョアジーの手先であるから、革命を恐れ、怖れた。彼等は一書簡の中にかう書いた、『労働者に専制政治の顛覆を宣傳することは……たゞ歴史においてのみ可能であるやうな最大の危険に彼等を曝すことを意味する。彼等が自己の利益の意識を持たない限り、實踐の上に作り上げられた堅牢さと組織性がない限り、専制政治の顛覆への召集は……大戦闘、血の海を結果として伴ふ……』と。

新しい情勢の下における經濟主義者の見解が未來のメンシエヴィズムを案内したことを見るの

は、困難ではない。

我々はすでに、ロシアの經濟主義者の見解が當時第二インターナショナルのすべての黨において支配した日和見主義の變種の一つであつたことを指摘した。ドイツ社會民主黨におけるその最も明瞭な表現者は、エドヴァード・ベルンシュタイン、ダヴィッド・ヘルツ、フォルマールであり、フランスにおいてはミルランであつた。ベルンシュタインは日和見主義者の全學派——ベルンシュタイン派（今日のカウツキー派に似た）を作り出した。幾多の著書においてベルンシュタイン派は一連の日和見主義的綱領を發展させたが、この綱領は、社會主義社會の創造のためには社會革命は必要でない、労働者階級は平和的に社會主義を獲得することができ、資本主義國家は改良と改善によつて徐々に社會主義國家に成長することができ、といふことを證明した。勿論この場合ベルンシュタインと萬國における彼の學徒とはマルクス主義的綱領の中から、プロレタリアートの獨裁の如き最も重要な點を削除した。この場合獨立的労働者黨の存在の必要は自ら脱落し、總同盟罷業や、況して暴動の如き革命的闘争手段は辯駁された。ロシアにおいては、一方では、合法的マルクス主義者と經濟主義者、他方では、ナロードニキが、この理論に追隨した。農業問題の領域におけるマルクスおよびエンゲルスの革命的學説を同じく批判した、農業問題に関する著

書が、ナロードニキによつて喜んで再版された。ツァール政府はこの種の反マルクス主義文獻の出版と普及とに對してかなり好意的態度を取つた。レーニンは次の如く指摘してゐる、『……この流行（ベルンシュタイン主義——ヤロスラフスキー）に對して檢閲も憲兵も闘はなかつたことは、有名な（ヘロストラトスのに有名な）ベルンシュタインの著書の三つの、ロシア版の出現の如き、またプロコポヴィチ氏、ベルンシュタインその他の著書のズバトフによる推薦の如き事實によつて見られる*』と。

*レーニン、第四卷、四七五頁。

經濟主義者は、まだ如何なる闘争についても考へたことのない新しい労働者大衆の農村からの流入のお蔭で、彼等に順應しつゝ、労働者階級の後れた層において一時成功を収めた。なほ指摘しなければならぬことは、彼等が他方において、特に大官營工場における最もよく保護された熟練労働者の上層と結びついてゐたことである。純經濟闘争の一時的成功は彼等の影響を支持したが、それは鞏固でなく且つ深刻でなかつた。

九〇年代の終りにはすでに恐慌、産業における故障が感じられ、資本家が労働者階級を一層大膽に壓迫し、労働者階級が防衛的同盟罷業に移らなければならぬ困難な時代が到來した。この

時代には革命的マルクス主義者と經濟主義者との闘争が強まる。勿論この闘争をレーニンとブレハーフとは異つた仕方でもまた異つた立場から行つた。レーニンは經濟主義者に對する闘争について、戰闘的、プロレタリア的黨のために國際的およびロシア的日和見主義に對して闘争した。後にレーニンがこれについて書いたやうに、正に經濟主義者に對するこの闘争のうちにはボルシェヴィキ黨は形成され始めたのである。レーニンとボルシェヴィキ黨とは、マルクス主義をブルジョアジエの利益に意識的または無意識的に順應させようとする試みだし且つ試みつつある人々に對する無慈悲な闘争のうちに鍛えられたのである。

ズバトフ主義

謂ゆるズバトフ主義——警察社會主義——もまた、ツァール政府が經濟主義者によつて作り出され且つ支持された氣分を利用したといふ意味において、經濟主義者に關する問題と密接に絡みあつてゐる。經濟主義者は、労働者が政治に關與してはならない、労働者の仕事はただ自己の地位の經濟的改善の問題のみを配慮しなければならぬ、と説教した。これこそは正に、労働者を革命的な道から外らさうと努力した憲兵や警察の挑發者にとつて好都合であつた。彼等は労働者に

おけるかゝる氣分を支持し、そしていつた、政府は經濟的、利益の擁護において労働者を援助しようとする用意してゐる、と。經濟主義者は、労働者が革命的インテリゲンチヤの指圖に従つてはならない、と主張した。これは憲兵にとつて好都合であつた。憲兵は革命的インテリゲンチヤ、革命的マルクス主義者を逮捕したが、労働者には、政府は『純労働者組織』を許してもいい、といつた。

労働者階級の益々強まつた革命運動はこの警察社會主義の途上において政府と衝突した。それは革命家の組織を警察組織に、革命的マルクス主義者の煽動を警察の煽動に對置しようとしたが、この警察の煽動は、勿論、直接警察を通じて行はれないで、多くの場合、かかる方法が労働者階級に利益を齎す、と信じた労働者自身の中から、巧みに選ばれた手先を通じて行はれた。

警察社會主義の扶殖において特に大なる役割を演じたのは、警視廳の一官吏ズバトフであつた、——こゝから警察社會主義はなほズバトフ主義と呼ばれてゐる。ズバトフは警察社會主義の組織者の全『學派』を作り出した。即ち憲兵大佐ノヴィツキー（南部における）とワシリエフ（西部地方にける）とは、最も有名な彼の補助者であつた。警察は革命家が従事することに従事しなければならぬ、ただ労働者階級の運動を正反對の方面に向けなければならぬ、といふ議

論からズバトフは出發した。この場合挑發がお好みの手段として選ばれる。憲兵の毘に陥つた或る經驗に乏しい労働者、労働婦人またはインテリゲンチヤを彼等は『説得し』始める、もし諸君がただ労働者にとつて有害な革命的な道を拒否しなへするならば、我々は諸君に活動をすべて公然と行ふ可能性を與へるであらう、と。個々の未經驗な同志はこの毘にかかり、時には革命的組織の参加者の名前を警察に報告することを自己の義務と考へさへもした。かくて憲兵大佐ワシリエフによつて西部地方においてマリヤ・ヴィリブシエヴィチその他のユダヤ人労働者運動の活動家の援助の下に『ユダヤ人獨立労働者黨』が設立された。モスクワでは『機械工業労働者共済組合』が『組織』された。

これらの團體の會合では、この活動に同意した多くの教授（オゼロフ、デン）や、僧侶（例へば僧侶ガボン）が講義を行つた。その後モスクワにおいて『機械工業労働者會議』が設立された。オデッサにおいては警察の手先シャエヴィチの援助によつて『金屬労働者同盟』が設立された。一九〇三年夏オデッサにおいて同盟罷業が勃發した。個々の同盟罷業は總同盟罷業に轉化した。オデッサにおける總同盟罷業は他の諸都市に移り、そして政府は、警察社會主義が時に、政府自身がすでにそれを處理しえないやうな運動に導きうることを見た。ズバトフ主義者によつて設立された

オデッサ同盟は、政治的性質を持つてゐた同盟罷業に参加しなければならなかつた。憲兵はシャエヴィチを追放しなければならなかつた。何故なら労働者大衆の影響を受けて彼は保安課が指示した道に全くよらないで進むことを餘儀なくされたからである。ズバトフさへも罷業者（例へばモスクワの『グジョン』工場における）と共謀しようとした故を以て免職された。けれども一九〇四—一九〇五年には運動を警察社會主義の水路へ向けようとする今一つの最も大なる試みがなされた。我々は、僧侶ゲオルギー・ガポンの指導の下に同じ保安課によつて設立された組織『サンクト・ペテルブルグ・ロシア工場労働者會議』を眼中においてゐるのである。

マハイスキー主義

經濟主義者の他の愛兒はマハイスキー主義であつた。『マハイスキー主義』とは、この運動の指導者イヴァン・ヴァツラフ・コンスタンチノヴィチ・マハイスキー（一九二六年死す、後には全ソ聯労働組合中央會議で働いた）の名前から生れた言葉である。マハイスキーは『左翼的』と考へられてゐた。彼の見解は無政府主義の臭味を帯びてをり、そして無政府主義は往々マルクス主義的隊伍における日和見主義の再生として現はれる、といふ命題の正しさを彼の實例において見る

ことができる。シベリアへ流刑中、マハイスキーは經濟主義者によつて支持されたと同じ氣分に影響されて、彼の學説を作り出した。マハイスキーは、労働者の主要な敵は資本主義的搾取ではなくて、マルクス主義者によつて説教される未來の社會主義であることを證明した。マハイスキーによれば、労働者階級の主要な敵はブルジョア階級でなくて、社會主義的インテリゲンチヤである。だから労働者階級は、マルクスおよびその他のインテリゲンチヤによつて『彼等自身の利益のために』『案出された』社會主義のために闘争する必要はない。社會主義は労働者にとつて新しい奴隸制以外の何物でもない、とマハイスキーは教へた。社會主義的インテリゲンチヤは、マハイスキーの意見によれば、ただ自ら支配せんがためにのみ政治的自由のために專制政治と闘争するのである。我々は、經濟主義者もまた、労働者階級が社會主義的インテリゲンチヤの後見から解放されなければならぬと説教したことを知つてゐる。彼等は、政治闘争は労働者階級にとつて有害だと説教した。この問題においてマハイスキーは經濟主義者と同じ道に陥つたのである。マハイスキーは労働者に、彼等の利益は自己の收入、自己の賃銀をインテリゲンチヤおよび『所有階級』の賃銀の水準まで高めることにある、と説得した。労働者がただ自己の賃銀をインテリゲンチヤの賃銀と同等にしうのみならず、この賃銀をも凌駕させうること（我がソヴェ

ト聯邦においては熟練労働者は往々たゞ教師、農業者、測量家のみならず、また醫師や教授よりも多く受取つてゐる。——この點においては問題はない。しかし労働者が自己の収入を『所有階級』の収入と同等にしうる、といふことについては、——このことはすでに労働者の欺瞞である。フオードその他のアメリカの資本家は、世界經濟恐慌の到來前、この畏に労働者の上層をかけようと努力した。資本主義社會においては労働者階級は決して『所有階級』(即ち資本家や地主)と同等にはなりえない。

マハイスキー主義は廣い普及を見なかつた。それは或るところでは革命の衰微の時代に多少の成功を収めた。労働者大衆を活潑な活動に引き入れることに常に注意が向けられたボルシェヴィキ諸組織においては、マハイスキー主義は殆ど決して何處でも成功を収めなかつた。

晩年にはマハイスキー主義の創始者自身もまた自己の見解の不合理を納得し、そしてその最後に至るまでソヴェト聯邦の労働組合の指導的機關の活動に参加した。

プロレタリア黨のための闘争における『イスクラ』

主としてレーニンの努力によつて組織された新聞『イスクラ』は、離散、原始性および動搖の

時期の上の述すすべての現はれに對して、決定的な闘争を行つた。

經濟主義者が産業的昂揚の時代——労働者の同盟罷業が往々労働者の勝利を以て終り、そしてただ經濟闘争のみの道によつて労働者階級が大なる成功を達成しうる、といふ信念を起させた一九〇〇年以前には、若干の成功を収めたことを、我々は知つてゐる。これらの時代においてもまた革命的社會民主主義者、革命的闘争の支持者は労働者階級との連絡を失はず、彼等の中で革命的活動を繼續した。組織的な黨はまだ存在しなかつたから、このことは、例へばペテルブルグではロシア社會民主労働者黨ペテルブルグ委員會(同じく『ペテルブルグ闘争同盟』)と並んで、『ラボールチャヤ・ムスリ』グループや、經濟主義者のグループや、また經濟主義者の反對者——『ラボールチェ・エ・ズナーミヤ』グループや、『二十人』グループや、『社會主義者』グループその他の如き、他のグループもまた存在した、といふ結果に導いた。他の諸都市にもまた、經濟主義者に同意しないで彼等に對して闘争を行つた個々のサークルやグループが存在した。

一九〇〇年末には産業恐慌が始まる。それは忽ち同盟罷業運動の状態に反映される。即ち同盟罷業は減少する。それと同時に労働者階級の一部には一層革命的な氣分が成熟する。労働者は、經濟主義者があらゆる手段を盡して彼等をそれから引き止めてゐる戦闘行爲に往々行きたくて堪

らぬ。當時最大の労働者地区を巻きこんだ失業が、益々強く感じられた。

この時シベリヤの流刑地から——一九〇〇年の初め——レーニンその他の流刑者、『労働者階級解放闘争同盟』員が歸國した。エヌ・カー・クルブスカヤが物語つてゐるやうに、すでに流刑中に、ウラヂミール・イリーチの胸中には全露的政治新聞の發刊に關する思想が起つてゐた。レーニンは幾多の同志と文通し、彼等と協議し、そして歸國の後には一八九八年第一回大會において作られた黨中央部を復興しようと思つた。しかし生活は爾來非常に前進したので、一八九八年に選出されたその中央委員會を復興することは、すでに意味がなかつた。即ち經濟主義者やブンド派がこの中央部を今や擱まうと試みつゝあつた。かゝる政治的中央部、かゝる中央委員會はロシアにおいては確實に失敗し、最短期間に逮捕されるであらう、といふことに鑑みて、ウラヂミール・イリーチは他の同志達と共に、政治的中央部を外國において作り、何よりも先づ黨の統一を開始すべき全露的政治新聞を作るといふ思想に到達した。秋ウラヂミール・イリーチは、『労働解放』團の同志達と協議するために、外國へ旅行した。一九〇〇年一月『イスクラ』第一號が發行された。表題には『火花より、火焰は燃上る』といふ言葉が書きつけられてゐた。この言葉は流刑中のデカブリストへ挨拶を送つた詩人ブーシキンへのデカブリストの答から取られたのである。

そして實際、レーニンによつて點火された火花は、その後、舊い貴族的の地主的ブルジョア的およびツァーリの君主制を全焼し、今や他の國々においてもまた燃え始めてゐるところの大なる革命的火災となつて燃え上つたのである。レーニンの外に、ブレハーノフ、アクセリロッド、ザスリッチ、マルトフ、ポトレソフが新聞の編輯者であつた。レーニンを除いて他のすべての者は後にメンシエヴィキとなつた。ロシア社會民主労働者黨第二回大會後間もなくレーニンは『イスクラ』の編輯部から退いた。そこにはたゞメンシエヴィキだけが残つて經營することゝなつた。だから黨史においては舊『イスクラ』(第一號から第五十二號まで)と新『イスクラ』とが區別される。舊『イスクラ』はレーニンの『イスクラ』と稱せられてゐる。何故ならレーニンがこの『イスクラ』の中心人物であり、彼がそれを元氣づけ、彼がその中で主要な活動をなしたからである。新聞が提起した主要任務は、舊『イスクラ』がそれを規定した如く、『労働者階級の政治的發展と政治的組織を助長する』ことにあつた。社會民主主義組織は分散してゐた。それらは共通の活動計畫を持つてゐなかつた。この當面の計畫と當面の任務とを規定しなければならなかつた。レーニンは論文『何から始むべきか?』を書いて、その中でこの任務を解明した。

黨のための闘争を行はなければならなかつた、何故なら黨は存在しなかつたからである。サー

クル主義、原始性、離散はあつた。たゞ一つの一般的計畫によつて結ばれた、たゞ一つの中央部から管理される、たゞ一つの黨を設立しなければならなかつた。レーニンがその後方向において全く『ボルシニヴィキ的』と稱した*『イスクラ』がこの任務を引き受けたのである。

* 例へば第二十七卷、二九二頁参照

これがためには、何よりも先づ種々のグループやサークルが結合すること、何を基礎にして我が結合するかを明瞭且つ正確に述べること、或ひはレーニンがいつたやうに、何よりも先づ結合することが必要であり、境界を定めることが必要であつた。『イスクラ』は『經濟主義者』に對して特に激烈に闘争した。レーニンは『經濟主義の擁護者との對話』およびその後著書『何を爲すべきか?』を書いたが、その中では經濟主義が完膚なきまでに批判されてゐる。

この當時、一方では、農民運動の活躍の影響を受けて、また他方では、最も革命的な青年を追ひ出した經濟主義者の誤謬から、若干のナロードニキ的グループが強化され、社會革命黨が設立され始めたが、この黨は大衆運動にとつて有害なテロルの宣傳をなし且つ革命における労働者階級の意義について誤つた見解を弘め、革命における先進的階級はプロレタリアートではなくて、農民層である、と考へた。レーニンは『イスクラ』に論文『革命的冒險主義』、『俗惡社會主義と

社會革命黨員によつて復活されるナロードニキ主義』その他多くのものを書いたが、その中では社會革命黨員の小ブルジョアの本質が暴露されてゐる。

殆ど同時に、自由主義者—ゼムストヴ議員によつて雑誌『オスヴォボジニエ』が創刊された。自由主義者は學生運動を自己の指導の下に取り入れ、他の社會階級—労働者階級と農民層—の運動を自己に従屬させ、この運動を自己の自由主義的水路に向けようこさへした。レーニンは『イスクラ』において自由主義者を暴露し、そして彼等に對して如何なる態度を取るべきかを指示し、『ゼムストヴ議員に與ふる手紙』その他の論文を書き、それらの中において自由主義的ブルジョアジの運動に對する労働者階級の態度を極めて明白に規定した。

『イスクラ』の外に當時外國において雑誌『ザリヤー』が發行された(『イスクラ』と同じ編集部)。その外に社會民主主義者のグループ—『ロシア社會民主主義者同盟』が存在した。『ロシア社會民主主義者同盟』においては、我々がすでに知つてゐるやうに、大多數が經濟主義者であつた。これらのすべての組織の大會が構成され、この大會において初めの三つのグループは、『黨の集團的組織者』となつたところの『イスクラ』の觀念的指導の下に、一つに合同した。かくして國外においては鞏固な中心が作られたが、ロシアにおいては『イスクラ』が個々の組織の合同

と、それらによる統一戦線の作成を助長した。

統一黨綱領の作成は『イスクラ』の主要な功績の一つであつた。

この綱領の各々の個々の條項に關聯して、すでに第二回大會よりずっと以前に、『イスクラ』編輯部内において長期にわたる熱心な論争が行はれた。レーニンはすでに當時多くの問題について——プロレタリアートの獨裁とヘゲモニーの問題や、農業（土地）問題や自由主義者に對する態度の問題について、後にボルシエヴィキ黨の政綱の基礎に置かれた見解を固執した。一言にすればすでに一九〇〇—一九〇一年、および我々が見たやうに、もつと早く、即ちボルシエヴィキとメンシエヴィキとの分裂が行はれた第二回黨大會以前に、異つた見解の萌芽、ボルシエヴィキとメンシエヴィキとの萌芽が『イスクラ』編輯部内に存在したのである。しかし兎も角『イスクラ』は多年の間ロシアの社會主義者の多數派の闘争を統一したところの綱領を作成したのである。

最後に、『イスクラ』の功績は、正に『イスクラ』が我黨の第二回大會の召集を準備したことにある。一九〇二年ベロストックに會議が召集され、この會議で第二回大會の召集に關する組織委員會を選挙する筈であつた。しかしこの時には失敗、逮捕が行はれ、かくして一九〇二年十一月ブスコフに第二回會議が召集され、この會議において第二回大會の召集に關する組織委員會がや

り選挙された。この委員會に入つたのは、『イスクラ』、ペテルブルグ委員會、『南露労働者同盟』の代表者で、その外にユダヤ人の社會民主主義組織『ブンド』の代表者や更に數人の同志がそれに含まれた。組織委員會は一九〇三年夏第二回大會の召集を準備した。

かくして、『イスクラ』はそれが創刊された主要任務を遂行した。即ち『イスクラ』は黨の集團的組織者であり、『イスクラ』はマルクス主義のブルジョアの歪曲、不具化に對して闘争した。『イスクラ』は原始性、動搖および離散の時期を短縮することを助けた。

レーニンの著書『何を爲すべきか？』の意義

著書『何を爲すべきか？』においてレーニンは、ただそれが書かれた時代のみならず、數十年間先だつて、革命的闘争および黨組織のすべての最重要問題を解明した。この著書によつて今日もなほ他の國々の労働者が階級闘争の發展および勝利の達成のために如何にまた何を爲すべきかについて、多くのことを學ぶことができる。

何よりも先づレーニンはこの著書において如何に黨が構成されなければならないか、といふ問題を提起してゐる。彼は、黨が中央集權的に構成されなければならないこと、即ちそれはただ一

つの指導的中央部によつて支配されなければならないことを證明してゐる。我々の許には離散、分散、原始性が存在したので、このことは當時特に重要であつた。

その後のすべての我々の経験が示したやうに、戦闘的黨にとつてはかかる中央集権的構成が無條件に必要であつた。反對に、經濟主義者は選舉主義や、民主主義を強調した。民主主義、選舉主義は自己目的ではなくて、ただ手段にすぎない、と我々は常に考へたし（また考へてゐる）。これがための條件が適してゐる時には、今日我黨に行はれてゐるやうに、我々は上から下まで選舉制を許すであらう。だが當時地下活動と何よりも先づ黨の指導組織に對する警察の追求との條件の下においては、中央委員會がそれを信用するために、實にあらゆる場合において、中央委員會が地方委員會の成員を任命することが必要であつた。

我々は、戦闘行爲の能力を有し、プロレタリア革命を指導する能力を有し、プロレタリアートの周圍に數百萬の農民層を集結させる能力を有する、新しい型の黨を設立する問題に當面してゐた。我々は當時においても黨員の數を求めなかつた。黨は階級の意識的先進的層であり、その前衛であること、『この前衛の力はその黨員數よりも十倍、百倍およびそれ以上大である』ことを、レーニンは一再ならず力説した。レーニンは、『プロレタリアートは權力のための闘争において

組織以外の武器を持たない』（『一步前進、二歩退却』）と一再ならず語つた。プロレタリアートは、組織されることによつて、『統一的な意思を取得し、そして先進的な千人、十萬人、百萬人のこの統一的意思は階級の意思となる』とレーニンは説明した。だから支配的中央部を有する中央集権的黨の設立は、プロレタリア闘争のその後の全進行にとつて、プロレタリアートの意思の統一および行動の統一にとつてかかる巨大な意義を持つてゐた。しかし最も重要なことは、この意思の統一と行動の統一とが革命的マルクス主義の正しい理論の上に基礎づけられてゐたことである。正に新しい型のこの種の黨をこそレーニンは建設したし、かかる組織のために彼は闘争したのである。

『何を爲すべきか？』は職業的、革命家の組織の問題を提起してゐる。第二回黨大會においてこの問題は、トロツキーをも含むメンシエヴィキの側から特に激烈な抵抗を喚び起したが、彼等は、組織に加入することは全く欲しないで、あれやこれやの功績をそれに示すであらうところの、任意の教授もまた、黨員たりうる、と考へた。

『何を爲すべきか？』は、第二インターナショナルの諸黨に存在し、そしてそれは各々の組織および各々の黨員が任意の見解を説教することができる、といふことに歸着するところの、『批判

の自由』に反対した。レーニンはこれに關聯して次の如く述べた、『……勿論諸君は好きなことをする自由を持つてゐる、諸君は沼澤に行くことさへ自由であるが、我々もまた沼澤に行くことを欲しないやうな黨に組織されることが自由である』と。レーニンは、我々、即ち同じ思想を有する者の黨が峻岨な斷崖を進みつつあること、我々は、批判の自由について叫びながら、實際には我々をこの斷崖から深淵や、沼澤に押しやるどころの人々を警戒しなければならないことを、指摘した。

この當時すでに、黨は如何なるものでなければならぬか、即ちただ同じ思想を有する者のみの黨かまたはそれには任意の分派、流派およびグループが加入しうるか、といふ問題が提起された。レーニンは『何を爲すべきか?』において問題を次の如く提起した、先づ經濟主義者その他の類似のグループから決定的に分界しなければならぬ、自己の革命的マルクス主義的見地をすべての爾餘のものに對置し、それらすべてに對して闘争し、どの點で我々が諸君と意見を異にするかを示し、然る後かういふはなければならぬ、もし諸君が我々の綱領を基礎にして、我々の見解を基礎にして結合しようとするならば、——どうぞ、もしさうでないならば、——諸君と闘争を行はなければならぬ、と。

著書『何を爲すべきか?』は『イスクラ』と共に原始性に最も慘酷な打撃を與へ、主要なことを地方的活動を提起すること、だが中央部は一般政治的任務を提起すること——を第二次的なものとして考へた組織および同志の注意を一般政治的任務へ引きつけた。

著書『何を爲すべきか?』はすべての組織員から革命家の高遠な使命の維持、革命的品質の教育を要求してゐる。レーニンは我々の委員會への労働者の吸引に特殊な役割を割當てた。著書『何を爲すべきか?』は黨のあらゆる組織者にとつて最良の案内書であつたし、また基本的な部分において現にさうである、と誇張なしにいふことができる。レーニンはこの著書において、職業的革命家が基本的な組織的勢力を成すところの黨の問題を提起してゐる。

職業的革命家とは何ぞや

この問題に對する答は、レーニンによつてイヴァン・ワシリエヴィチ・バブシュキンとヤコヴ・ミハイロヴィチ・スヴェルドロフとに與へられた下記の評價である。彼にとつて革命的事業が生涯萬事であつた職業的革命家の最良の實例は、ウラヂミール・イリイチ・レーニン自身である。

一九一〇年十二月レーニンは、『イスクラ』の最初の労働者通信員イー・ヴェ・バブシュキンの死

に關聯した論文の中に、かう書いた。

一三〇

『バブシキンはツァール親衛兵の野蠻な懲罰の犠牲となつて仆れたが、しかし死にあたつて彼は、彼が自己の全生涯を献げた事業は死滅しないであらう、他の數十人、數十萬人、數百萬人がこの事業をなすであらう、この事業のために他の同志も労働者が死するであらう、彼等は勝利が得られるまで闘争するであらう、といふことを知つてゐた……だがかかる人々は國民的英雄だ。これはバブシキンの如き人々のことだ。これは革命前一年や二年ではなく、數十年間労働者階級の解放のための闘争に全く自己を献げた人々だ……これは、危機が到來した時、革命が勃發した時、數百萬の人々が運動に入つた時、ツァール專制政治に對する武装的大衆闘争の先頭に立つた人々である。ツァール專制政治から略取されたすべては、バブシキンの如き人々によつて指導される大衆の闘争によつて専ら略取されたのである*』と。

* レーニン、第十四卷、三九七—三九八頁。

ヤー・エム・スヴェルドロフの記念に献げられた一九一九年三月十八日第六回全露中央執行委員會議の演説において、レーニンはかう述べた——

『我々がプロレタリア革命のこの指導者の生涯へ一瞥を投ずるならば、彼の注目すべき組織的

才能が長い闘争の間に作り上げられたこと、プロレタリア革命のこの指導者が大革命家の自己の注目すべき性質の各々を、革命家の活動の極めて困難な諸條件の下における種々の時代を経過し且つ經驗しつつ、自ら鍛えたことを直ちに見るであらう。漸く政治的意識に貫かれたところのまだ全くの青年として、その活動の第一期において、彼は一度に且つ全く革命に身を献げた。この時代、二十世紀の初頭に、我々の前には、職業的革命家、——家族や、舊ブルジョア社會のすべての便宜および習慣から全く訣別した人、全く且つ献身的に、而も多年の間、數十年間さへも、革命に献身し、監獄から流刑地へまた流刑地から監獄へと移りつつ、多年の間革命家達を鍛錬した性質を自己のうちに鍛えたところの人の最も目立つた型としての、同志スヴェルドロフが立つてゐた。

『……もし若干の人々が、これは非合法的活動に全く没頭することであり、職業的革命家のこの特質は彼を大衆から引離す、と考へたとすれば——我々の反對者、また動搖的な人々は極めて屢々さう考へたのであるが、——正にヤー・エム・スヴェルドロフの革命的活動の實例こそは、この見解が如何に深く誤つてゐるか、反對に、多くの監獄や極めて遠隔のシベリアの流刑地を歴訪した人々の生活が印づけてゐるところの革命的事業への犠牲的な献身こそ正に、それこそが正に、

かゝる指導者、我々のプロレタリアートの精英を作り出したのだ、といふことを我々に示してゐる。しかしもしそれが人を評價し、組織的活動を調整する性質や能力と結合されてゐたとすれば、たゞそれのみが偉大な組織者を鍛え上げたのである。非合法的サークルや、革命的地下活動や、ヤー・エム・スヴェルドロフほど完全には何人も體現せず且つ表現しなかつた非合法的黨を通じて、——たゞこの實踐の學校を通じてのみ、たゞかゝる道によつてのみ、彼は最初の社會主義ソヴェト共和國における第一人者の地位に、廣汎なプロレタリア大衆の組織者の第一人者の地位に到達することができたのである*。

* レーニン、ヤー・エム・スヴェルドロフ記念の演説、全集、第二十四卷、八〇—八一頁。

これが、レーニンが『何を爲すべきか?』においてそれについて書き、黨が多年の闘争においてこれを鍛え且つこれに立脚して勝利したところの、職業的革命家の型である。

第一革命の前夜國際的舞臺における日和見主義に對するレーニンの闘争

レーニンの政治的活動の最初からたゞロシアの日和見主義のみならず、あらゆる色彩の國際日

和見主義に對する彼の闘争が如何に展開されたかは、我々の見たところである。ロシアにおいて經濟主義が労働者運動を把握しようとする試みた九〇年代の終りに、レーニンは、この流派が偶然的または『民族的』でないことを指摘した、即ち西ヨーロッパの労働者運動においてもまた日和見主義が擡頭したのである。ドイツ社會民主黨——第二インターナショナルの指導的な黨——においてエドゥアード・ベルンシュタインを初めとして幾多の著名な社會民主主義者が如何にマルクスの學說の基本的命題と革命的政策との批判と修正（見直し）とに着手したかは、我々の見たところである。この謂ゆる修正主義は一八九九年エドゥアード・ベルンシュタインの著書『社會主義の諸前提』において公式化されたのである。ドイツ社會民主黨の黨指導部は、ベルンシュタインに公然反對する前に、久しく動搖した。後ればせにベルンシュタイン主義の批判に着手したカウツキーは、典型的な中央派的批判を與へ、多くの極めて重要な問題（革命の理論、プロレタリアートの獨裁その他）において革命的マルクス主義の立場を放棄した。左翼ドイツ社會民主主義者（ローザ・ルクセンブルグ、バルヴスその他）は日和見主義者の放逐のための闘争において必要な決定さを表さず、日和見主義者から黨を肅清するために闘争しなかつた。これに反して、レーニンは直ちに修正主義に對して全く無容赦に喰つてかゝつた。彼は社會民主黨指導者の中で、修正

主義の社會的および政治的本質を暴露し、労働者運動におけるブルジョアジーの代理業務としてのそのすべての危険性を十分に評價した唯一人者であつた、修正主義に對するレーニンの闘争のうちには、闘争の國際的性質の理解、日和見主義（經濟主義）と外國の修正主義との間の密接な内部的な觀念的および政治的聯關の確認が終始一貫してゐる。經濟主義者はロシアのベルンシュタイン派以外の何物でもない——レーニンはかやうに問題を提起した。

ベルンシュタイン主義が實際において何であるかは、一八九九年ブルジョア内閣に参加し、労働者同盟罷業の残酷な懲罰によつて特に有名になつた當時のフランスの社會主義者ミルランが明瞭に示した。冒險を試みた背教者に對する峻嚴な批判の代りに、第二インターナショナルの若干の指導者（ヴァンダーヴェルデ、アウエルその他）はミルランに對する同意を表明し、そしてカウツキー型の他の中央派は動搖して、妥協的立場を取らうとした（カウツキーによつて提出され、一九〇〇年第二インターナショナルのバリ大會によつて採用された有名な『彈性決議』）。レーニンは、自己の方向を徹底的に繼續しつゝ、ミルランに對して非妥協的立場を取つた。

この時代にレーニンは労働者運動に對する自己の態度の基本的なもの——即ち日和見主義に對する闘争の國際的性質に關する思想を敘述してゐる。『……現代國際社會民主主義のうちには、

——とレーニンは一九〇二年『何を爲すべきか？』の中に書いた、——二つの方向（革命的方向と日和見主義的方向——ヤロスラフスキー）が形成された。そしてこれらの間の闘争は或ひは炎炎たる焔となつて燃え上り、或ひは印象深い「休戦決議」の灰の下に静まり且つ燻つてゐる*』と。社會主義の内部における種々の方向の不和は國民的なものから國際的なものに轉化した……

* レーニン、第四卷、三六六—三六七頁。

イギリスのフェビアン主義者、フランスの入閣主義者、ドイツのベルンシュタイン派、ロシアの批判者、——すべてこれらはただ一つの家族であり、すべて彼等は互ひに賞讃し、互ひに學び、そして共同して『正統マルクス主義』（日和見主義者は革命的マルクス主義をかう稱した——ヤロスラフスキー）に對して武装した。同じくこゝにもまたレーニンは、國際革命運動の基本的な見透しを記してゐる。『恐らく、社會主義的日和見主義とのこの最初の實際に國際的な格闘の中に革命的社會民主主義は十分に強化して、すでにすつと以前からヨーロッパにおいて支配してゐる政治的反動を片附けるであらう』と。

日和見主義の粉碎を経て階級敵に對する勝利へ——これがロシアにおいても國際的舞臺においてもレーニンの一般的な方針であつた。同じ著書『何を爲すべきか？』の中にレーニンは、ただ

日和見主義のみならず、それに對する妥協主義に對する無慈悲な鬭争の必要に關する展開された方針を示し、そして『我々が特殊なグループに分離し、そして鬭争の道を選んで、妥協の道を選ばなかつたが故に、最初から我々を非難した*』人々に喰つてかゝつてゐる。

* レーニン、第四卷、三六九頁。

ロシア社會民主労働者黨第二回大會に至るまでの 黨史の三つの時期

第二回大會に至るまでの黨の全史を如何にレーニンが三つの時期に區分してゐるかは、上に我が見たところである。第一期は一八八四年から一八九四年まで、第二期は一八九四年から一八九八年まで、レーニンが離散、崩壊、動搖の時期と稱した第三期は、一八九七年に始まつて、一八九八年の第一回大會の後決定的に第二期に代つて現はれた。これは經濟主義者や、生れたばかりの社會革命黨員や、労働者運動を自己に従屬させようとする自由主義者^{||}オスヴォボジエニエ派に對する鬭争の時期であつた。鬭争のあらゆる原則問題の解明に關する巨大な活動がこの間にレーニンと彼の追隨者とによつて遂行された。すでにこの時期にすべての最も主要な問題につい

て論争が行はれ、そして經濟主義者とのこの論争においてすでにブレハーノフ、アクセリロッド、マルトフその他のメンシエヴィキ指導者の見解の來るべきメンシエヴィキ的體系の輪廓が印づけられた。即ちレーニン派は離散、崩壊および動搖のこの時期を清算するために最も多くのことをなし、レーニンの見解を基礎にしてロシアにおける社會民主主義的組織の大多數を統一した。

レーニンは『何を爲すべきか?』を次の確信を以て結んでゐる、『……第四期は戰鬭的マルクス主義の鞏固化に導くであらう、ロシア社會民主黨は強くなり元氣になつて危機から出て來るであらう、日和見主義者の後衛と「交替して」最も革命的な階級の眞實の前衛部隊が出現するであらう。

『かゝる「交替」への召集の意味で、またすべて前述したところを要約して、我々は、「何を爲すべきか?」といふ問題に對して次の簡單な答を答へることができる——

『第三期を清算せよ、と』

第二回大會は即ちこの任務——『第三期の清算』——を遂行しなければならなかつた。大會は著しい程度にこの任務を解決した。一方では革命的マルクス主義者と、他方では合法的マルクス主義者、經濟主義者との間に行はれた、二つの基本的方針の鬭争は、第二回大會においては形

成されつゝある二つの黨——ボルシエヴィキとメンシエヴィキとの間の闘争の性質を帯びた。

第三章 参考文献

レーニン、何を爲すべきか？ 全集、第四卷、三五九—五〇八頁。

第四章 第二回黨大會の分裂時代

第二回黨大會の構成と意義

一九〇三年——七月——ロンドンにおいて第二回黨大會が開催された。全部でこの大會には二十六組織からの四十四人の代議員が集まつた。これらの四十四人の代議員のうち全部で四人の労働者がゐたことを特記しなければならぬ。これは、労働者がまだ當時社會民主主義的活動の指導者の十分な數を輩出しなかつたことを證明してゐる（しかしこれは、日和見主義者がこれについて中傷したやうに、我黨がインテリゲンチヤ的黨であつたことを決して證明するものではない）。

大會にはその外に『イスクラ』、『革命的社會民主主義同盟』、『ロシア社會民主主義者同盟』、『經濟主義者』の代表者やブンドの代表者が出席した。ロシアから來た委員會のすべての代議員が『イスクラ』の支持者ではなかつた。眞正の經濟主義者があり（例へばヴォロネジ委員會から）、動搖者、謂ゆる『沼澤』があり（『南部労働者同盟』から）、最後に、『イスクラ』自體の内部には、この大會においてメンシエヴィズムの基礎を据えた、謂ゆる『穩和派』があつた（エル・マルトフ、

エル・トロツキー)。

そして大會は黨の歴史にとつて排他的に重要な意義を持つてゐた。第二回大會は、根本的な點においてブレハーノフによつて起草された綱領を採用した。しかしこの綱領にはレーニンによつて著しい修正が加へられ、そしてこの修正はこの綱領をボルシェヴィキ的綱領たらしめた。

大會は黨規約を採用し、それは中央諸機關、即ち中央委員會、中央機關紙、黨評議會を作り出した。それは多くの極めて重要な問題に對する我々の態度、即ち自由主義者に對する態度、社會革命黨員に對する態度、民族問題に對する態度を決定した。第二回大會はボルシェヴィキとメンシェヴィキとの社會民主黨の分裂が行はれた時機と看做されてゐる。第二回大會においてボルシェヴィキ黨が発生した。黨史の全期間を通じて我々がトロツキー主義の名で呼んでゐるメンシェヴィキ的流派は、第二回大會において初めて印づけられた。だから第二回大會は特に注意深く敘述されなければならぬ。

『イスクラ』編輯部内における綱領問題に關する意見の相違

ただ第二回黨大會の議事録だけを通讀した者は、大會前に黨綱領に關聯するレーニンとブレハーノフとの間の闘争がどうであつたかを表象することができぬ。

黨綱領は『イスクラ』編輯部において作成された。レーニンは一八九五年以來黨綱領を獨立的に研究してゐた。ブレハーノフが一九〇一年に綱領草案を送つた時、レーニンはそれに同意しないで、自分の方から自分自身の綱領草案を提出した。レーニンの草案が採用されるならば、ブレハーノフは分裂する、といつて直接脅かした*。しかしレーニンの批判の影響を受けて彼は自己の草案を書き直した。長い審議の後、レーニンによつて提議された多くの改變と修正とが採用された。

* 『レニンスキー・スポールニク』、第三卷、二八五頁参照。

綱領問題に關する『イスクラ』編輯部の論争はどの點にあつたか？ 何よりも先づレーニンは、綱領が黨の戰闘的綱領たるべきことを要求したが、ブレハーノフが書いたものは、——『それは寧ろ學生のための綱領であり(特に資本主義の特徴づけにあてられた最も本質的な部分において)而も初級學生のための綱領であつて、そこでは資本主義一般について述べられて、またロシア資本主義については述べられてゐない*』。レーニンは、明白な結論によつて規定されたロシア資本

主義に關する具體的、な問題提起を要求した、『……我々は、——とレーニンは述べた、——批判者に對する論文を書くのではなくて、戰闘的黨の綱領を書き』、以てこの綱領からただ數百萬のプロレタリアのためのみならず、數百萬の手工業者および地主と資本主義とによつて零落せしめられた農民のために、『諸君にとつての唯一の救済はプロレタリアートの黨に味方することだ、といふ結論を不可避的に得ようとするのである**』と。

* レーニン、第五卷、一八頁。

** 同上、二三頁。

レーニンは綱領の中に小ブルジョア、に對するプロレタリアートの態度について、一層明白な指示を挿入しようと提議した。ブレハーノフによつて提出された綱領草案の中には、プロレタリアートの不満および革命性の原因と小生産者、手工業者、農民の不满の原因との間に鋭い區別がなされてゐなかつた。かゝる區別をレーニンは、何よりも先づ指導者、主導者としてのプロレタリアートの役割と同盟者としての小生産者の役割とを正しく區分するために必要だと考へたのである。

更に大なる意義を持つてゐたのは、プロレタリアートの獨裁に關する最も重要な綱領問題につ

いてのレーニンの修正であつた。レーニンはブレハーノフに對抗してプロレタリアートの獨裁に關する條項の導入を固執した。彼はその駁論においてかう書いた、『……プロレタリアートの獨裁を承認することは、ただプロレタリアートのみが眞に革命的な階級だ、といふ共產黨宣言の命題と最も密接且つ不可分の、結びついてゐる*』と。

* レーニン、第五卷、二九頁。

レーニンは、革命運動の成長の條件の下においては土地國有化の綱領を提出することが必要であらう、と考へた。しかし所與の段階においてはレーニンは、『切取地』を農民に返せ、といふ要求を提出することを必要と考へた。

『切取地』といふのは、農民『解放』の際に地主が農民地から切取つた土地のことであつた。これは土地の優良な部分——牧場、草原または森林、河に近い場所等々であつて、それなくしては農民は經營を行ふことができず、そしてあれやこれやで、自己の以前の地主からそれを借地することを餘儀なくされた。『切取地』は農村における農奴制の決定的遺物であつて、地主はこの遺物に依據して以前の如く農民の咽喉を掴んでゐたのである。

農民への『切取地』の返還の綱領を提出しつゝ、レーニンはこの要求の中にたゞ革命の擴大へ

の道、廣汎な農民大衆を革命へ吸引する道を見ただけで、我々が見たやうに、原則上土地國有化を否認しなかつた。然るにブレハーノフは、ブルジョア革命時代における土地國有化を原則的に否認し、土地國有化はたゞ社會主義革命においてのみ許される、と考へた。

農業問題の提起はレーニンと他の『イスクラ』編輯部員との間の深刻な意見の相違を暴露した。

この意見の相違は根本的な點において、労働者階級の農民層に對する態度の問題に關するボルシェヴィキとメンシェヴィキとの間の來るべき意見の相違を豫想するものであつた。

たゞレーニンの修正と『イスクラ』編輯部内における彼の闘争のおかけで、黨綱領はボルシェヴィキにとつて取り入れられたのである。この綱領を採用しつゝ、ボルシェヴィキはそれがために闘争し、その革命的要求を固執した。然るにメンシェヴィキは一再ならず綱領に對して『紙切れ』に對するが如き態度を取り、それから全面的に退却し、自己のブルジョア的および小ブルジョア的同盟者のためにそれを蹂躪した。

第二回大會におけるロシア社會民主労働者 黨綱領の採用

大會においては『イスクラ』の全編輯部はこの統一的綱領草案を擁護したが、而も意見の相違は多くの原則上の問題について、大會においても、また特に大會直後においても、暴露された。即ちこれらの意見の相違は革命の理論および實踐の最も重要な問題に對するボルシェヴィキおよびメンシェヴィキの異つた態度を示した。採用された綱領の主要な特質は、この綱領の中に我々が社會革命の任務を自ら提起することおよび『社會革命にとつて必要な條件はプロレタリアートの獨裁、即ちプロレタリアートをして搾取者のあらゆる抵抗を壓迫せしめるやうな政治的權力をプロレタリアートが奪取することである』ことが、明瞭且つ明白に述べられてゐたことにある。

この綱領の中にはかなりの場所が謂ゆる『最低限綱領』に、即ち我々がまだブルジョア的對する最終的勝利以前に提出した要求に割かれてゐた。そこに諸君は憲法議會をも、一般平等直接選舉權をも、祕密投票をも、民主共和國をも見出した。けれども我々は當時においてもまた、民主主義を全く目的とは見ないで、手段と見たのである。當時レーニンを支持したブレハーノフもまた、大會においてこの思想を發展させた。

『革命の成功は最高の法則だ。そしてもし革命の成功のために一時あれやこれやの民主主義的原則の作用を制限することを要するとすれば、かゝる制限の前で躊躇することは罪惡であらう。

自己の個人的意見として私はいふのであるが、普通選挙権の問題をさへ私が述べた民主主義の基本的原則の見地から見なければならぬ。我々社会民主主義者が普通選挙権に公然反対すべき場合を我々は假説的に考へる。イタリア共和国のブルジョアジーは、貴族に屬する人々の選挙権を嘗て制限した。革命的プロレタリアートは最高諸階級が嘗て彼等の政治的権利を制限したと同様に、最高諸階級の政治的権利を制限することができらう。』

更に彼はかう述べた——

『もし民衆が革命的熱心の衝動のうちに非常に立派な議會* を選挙したなら、我々はそれを長期議會、たらしめることに努力すべきであらう、だがもし選挙が不成功であつたならば、我々をそれを二年の後にではなくて、できうべくんば、二週間後に解散することに努力しなければならぬであらう**』云。

* 議會は、ブルジョア國家において住民の代表者の中から選挙される立法機關である。

** 『ロシア社会民主労働者黨第二回大會議事録』、一八二頁。黨出版所、一九三二年刊。

ブレハーノフはこの演説のために大會においてたゞ拍手喝采されたのみならず、またシッシッといはれた。そしてこのことは、すでに當時においても我黨内に、ブルジョア民主主義を自己の最

高の目的と考へてそれ以上進まなかつた人々がゐたことを示してゐる。彼等は當時すでにメンシエヴィキの中には少くなかつた。しかしブレハーノフ自身もまた彼が第二回大會において擁護したことを忽ち改變したことを、我々は知つてゐるではないか。ボルシエヴィキが一九一八年の初め憲法議會を解散した時、ボルシエヴィキがブレハーノフが嘗て言葉の上で説教したことを實際に適用した時、彼が如何に立腹したかを我々は知つてゐる。第二回大會の右翼は、綱領が法外に革命的である、といふ點を最も多く攻撃したことを述べなければならぬ。

大會の右翼（經濟主義者、『沼澤』）の攻撃を喚び起した第二の問題は、黨の農業綱領における『切取地』に關する問題であつた。すでに我々が上に指示したやうに、綱領には切取地、即ち農民解放の際に地主の所有に残され且つ農民地、公有地の中に楔狀に挿まれた土地で、それによつて特に強く農民層がカバーラ化されたところのものを農民に返せ、といふ要求が提出された。第二回大會においては、この要求を法外に革命的なものとして考へた同志がゐた。それと同時に黨はすでに當時買取賦金および小作料の廢止の要求と並んで、農民の土地處分において（ブルジョアの制度の下において）彼を壓迫するすべての法律の廢止、『……修道院および教會の財産、また分割地、政府所有地および皇族所有地の沒收、同じく地主——買取資金を利用した貴族の土地へ

の特別税の賦課……」を提起した。これらの財産は農村社會の必要にとつての特殊な國民的基金を構成しなければならなかつた。

我々は後に、この綱領が一兩年の後にすでに不十分なものとなることを見るであらう。革命的な波は非常に昂揚し、農民の革命への参加は非常に顯著になつて、第三回黨大會はすでに遙かに決定的且つ革命的な綱領を提出したのであつた。けれども第二回大會においてもまたボルシエヴィキは農業問題および農民問題を明瞭に提起した。すでに當時ボルシエヴィキにおいては農民大衆に對する影響のため、彼等を革命的に民主主義的闘争に引入れるための闘争の正しい方針、プロレタリアートによるこの運動の支持が決定されてゐた。すでに當時ボルシエヴィキは革命的農民層において、まだ資本主義を廢絶しないが、社會主義革命の勝利にとつての一段階となりうるころの民主主義革命の唯一の決定的な支持者を見たのである。

同じく當時民族問題に關する論争が発生した。綱領の中には民族自決權の要求が提出されてゐた。代表者として出席した同志ガネツキとワルスキーとは、この要求に公然反對した。ガネツキとワルスキーとは民族問題に對するルクセンブルグの見解を固執した。民族自決權の要求はブルジョア的要求だ、それは萬國のプロレタリアートの團結に抗して進むものだ、と彼等はいつ

た。第二回大會の綱領委員會においてこの問題が審議された時、彼等は我黨の大會がポーランドの自決に反對を發言すべきことを要求した。委員會はこれに同意しなかつたので、彼等は大會を見棄て、そして當時さう稱せられた『ポーランド王國およびリトワニア黨』は大會においてロシア社會民主労働者黨に加入しなかつた。この問題においてはレーニンが正しく、ボルシエヴィキが正しかつた。そしてボルシエヴィキはその後闘争を持續し、我々に革命の成功とすべての勤勞民族の支持とを確保したところの、民族問題に對するこの見解を固執しなければならなかつた。かくしてすでに當時一九〇三年に、レーニンとボルシエヴィキはエル・ルクセンブルグの誤謬に公然反對したのである。

第二回黨大會の綱領は革命的マルクス主義の綱領であつた。それはプロレタリアートの獨裁や、革命における主導者としてのプロレタリアートの役割の問題を全く決定的に提起し、農民層に對する正しい態度を定立し、民族問題における正しい方針を與へた。これは大なる前進であつた。

黨規約。黨員資格の問題に關する意見の相違

他の一つの前進は黨規約の採用であつた。論争は、何人が黨員と看做されるか、といふ問題について最も大であつた。元來組織問題は第二回大會の基本的な環であつて、組織上の意見の相違

は黨分裂の動機となつた。レーニンは、黨規約の第一條が次の如き編輯より成るべきことを提議した——

『黨綱領を承認し、物質的手段並びに黨組織の一つへの個人的参加によつて黨を支持する一切の人々は、黨員と看做される*』と。

*レーニン、第六卷、一二頁。カ點は筆者のもの——ヤロスラフスキー。

この條項によれば、實際に組織に加入してゐる者、萬事それに服従する者、黨の規律が自己にとつて完全に拘束的なことを承認する者だけが、黨員と看做されるであらう。地下的活動の條件の下においてはこれは黨に一層良質の成員を保證した——數においてはヨリ少いが、その代りに質においてはヨリ良く、ヨリ鞏固に。その時我々は、完全に我々と一致し、萬事において我々と一致し、自己の行動を黨の要求に従屬させる準備のある人々が我々に向つて來ることを知つてゐる。革命に参加したがつてはゐるが、而も黨組織に入ることを恐れるところの、卑怯者、動搖者は我々の許においては少いであらう。

代議員の他のグループ——未來のメンシエヴィキ——は、マルトフによつて定式化された次の規約の條項を提議した——

『黨綱領を理解し、黨を物質的手段によつて支持し、その組織の一つの指導の下に、それに正則的個人的協力を與へる一切の人々は、ロシア社會民主勞働者黨員と看做される』と。

諸君の見る如く、メンシエヴィキは、黨員たるがためには、組織に入ることは全く必要でない、と考へたのである。彼等はいつた、或る教授または教諭が黨員と看做されるために、組織に義務的に入らなければならぬであらうか？ 組織自體に入ることをなくして、黨に個人的協力を示すことは、これにとつて不充分であらうか？ と。この問題については熱心な論争が行はれ、そしてこの論争は更に第二回大會後にも繼續し、そしてそれは、黨や、黨が如何なるものでなければならぬか、黨員とは何であるかといふことに關する概念自體が、我々の中では種々であることを示した。ボルシエヴィキは、自己の定式を固執しつつ、組織がプロレタリア的規律によつて貫かれること、黨の中央集權的組織のために闘争した。何故ならそれなくしては黨は脆い捏粉であり、ブルジョアの個人主義者、『貴族的無政府主義者』（レーニンはトロツキをさう稱した）はそれを以て好きなものを塑像したからである。だからレーニンはかう書いた、『同志マルトフの定式は或ひは死せる文字、空虚な文句たるに止まり、或ひはそれは主として、且つ殆ど専ら「徹頭徹尾ブルジョアの個人主義に浸された」そして組織に入ることを欲しない「インテリゲンチヤ」

に利益を齎すであらう。言葉の上では、マルトフの定式はプロレタリアートの廣汎な層の利益を固執してゐるが、實際においては、この定式は、プロレタリア的規律および組織を好まないブルジョア・インテリゲンチヤの利益に役立つてゐる*』と。この問題に關する大會の多数派（二、三票の差で）はメンシエヴィキ側にあつた。このことは、大會においてこの問題について我々が多数派となつた、と考へてゐる人々によつて眼中におかれなければならぬ。さうではなくて、レーニンに賛成する多数派は、中央委員會および黨中央機關紙部の選舉の際に大會において形成されたのであつて、その時最右翼の經濟主義者とブンド派とは大會から去つてをり、そして『沼澤』は全くメンシエヴィキを支持したのである。

*レーニン、第六卷、二二二頁。

當時大會では労働者が少かつたけれども、何人を黨員と看做すか、といふ問題に關する論争の本質を熟考するならば、我々は、レーニンとボルシエヴィキとがすでに當時我黨の労働者の核心の強化について配慮したことを見るのである。レーニンは、我々の組織の基礎が正に工場の労働者でなければならぬことを指摘したが、他方メンシエヴィキは、小ブルジョア的およびブルジョア的さへものインテリゲンチヤ的環境から我々の方へ來たところの望ましからぬ同伴者を黨が押し

けないやうにと最も多く配慮した。だから第三回黨大會、即ち我々がメンシエヴィキなしに集まつた我々のボルシエヴィキ大會において、我々は第二回大會で採用された規約第一條を廢止して、ただ我々の組織に個人的協力を示すことに同意する者ではなくて、實際に我々の組織の一つに加入する者を黨員と看做す、と定めたのである。

多民族國家において労働者階級の黨を如何に建設すべきか？ 民族別に黨を建設することができらうか？ 第二回黨大會においてユダヤ人労働者の組織ブンドの代表者は、ユダヤ人プロレタリアートの唯一の代表權がブンドに與へられることを要求した。もし我々がこの提議を採用したとすれば、これは何を意味したであらうか？ これは、ユダヤ人が何處にゐようとも、彼等は個々の組織を作り且つ個々の代表を持たなければならぬ、といふことを意味したであらう。その時には、例へば、少くとも三十乃至四十種の民族が存在するモスクワでは、我々は三十乃至四十の民族的共產主義組織とこの組織を指導する三十乃至四十の民族委員會を持ち、そしてモスクワ全市委員會においては、またこれらの民族的組織の代表者、一種の聯合委員會が存在しなければならぬであらう。しかし與へられた地方の労働者が如何なる民族に屬するかといふことから獨立して階級の利益を表現しなければならぬ組織にとつて、これが果して適するであらうか

？我々はブンド派にいつた、ユダヤ人が密集的な大衆をなして居住するところ、彼等が壓倒的大衆を成すところでは、ブンド委員會を組織する意味がある。ユダヤ人組織ブンドの任務は、ユダヤ人労働者および手工業者大衆の生活の特殊性の研究と知識とに基いて宣傳および煽動の特殊な方法を作り出し、文書を出版したりなどすることであらう。我々は、ブンド派が要求したやうに、ユダヤ人の中に聯合主義を基礎にして黨を建設すること、即ち各民族のプロレタリアートが自分自身の黨を持ち、そしてこれらの組織が互ひに協議する、といふが如くに黨を建設することはできないし、建設すべきではない、と。だから我々はブンドの要求を拒否し、そしてブンドの代表者は抗議として大會から退席し、ブンドの黨からの脱退を聲明した。

レーニンがブンド派の退席に關聯して、彼等の排外主義的立場に關聯して、かう書いた——
『……ブンドの非論理的、非歴史的、非民族主義的論據は何等の批判にも耐へない。離散期は、ロシア社會民主主義者の中の動搖と個々の組織の特殊化とを強化しつつ、ブンド派に對しても同じ方向に、更にヨリ強くさへも現はれたのだ。自己のスローガンに歴史的に形成された（そして離散によつて強化された）特殊化に對する鬭争を課する代りに、彼等はそれを原則に引き上げ、そしてそれに對して自治の内的矛盾に關する詭辯や、ユダヤ民族のシオニスト的觀念に頼つたのである*』と。

*レーニン、第六卷、八六頁。カ點は筆者のもの——ヤロスラフスキ。

しかし我々ボルシエヴィキは、最初からこの問題——革命の運命にとつて巨大な意義を有する民族問題においてもまた、二つの戦線において鬭争を行はなければならなかつた、即ちブンドの右翼日和見主義的立場に對して、又ポーランド社會民主主義者の『左翼』日和見主義に對して、『我黨が綱領を採用した一九〇三年以來、我々は毎度ポーランド人の側から絶望的な立場に遭遇した……ポーランドの社會民主主義者は、民族自決權を諸民族のために認めることは彼等にとつては受諾し難い、といつて、この（第二回——ヤロスラフスキ）大會から退席した……これらの人は我黨の立場を排外主義者の立場に導かうと欲するのである*』。

*レーニン、第二十卷、二七五頁。

戰術問題。第二回大會と自由主義者に對する態度

第二回大會は戰術——近い將來に對する我黨の態度をもまた定めた。

大會は一體如何なる問題を決定したか？ 自由主義者に對する態度の問題については、すべて

マルクスおよびエンゲルスの『共産黨宣言』の中にすでに表現された一つの思想に恰も接近したのである。そこにはかう述べられてゐる、『共産主義者は到るところにおいて現存する社會的および政治的狀態に反對する一切の革命運動を支持する』と。

第二回大會當時、雑誌『オスヴォボジエニエ』の周圍に群つた自由主義者の組織が存在した。

この組織には、著述家、辯護士、ゼムストヴォの活動家が加入し、往々その中には地主も、自由主義的産業ブルジョアジの代表者もゐた。彼等は何を得ようと努力してゐたか？ 自由主義的憲法、即ち彼等がそれまで許されてゐたよりも多く彼等に權力に向はせ、多少でもツァールの權力を『制限』するやうな法律を。換言すれば、彼等は全くブルジョアジの（即ち自分自身の）權力に反對でなく、ツァーリズムに反對でもなかつた。彼等はツァールの協定、有産者階級の間の妥協、權力の分配を欲したのである。彼等はこれを自己の力によつて達成することができなかつた。彼等はただ或る革命的勢力——第一に労働者階級と農民層の援助によつてのみこれを達成することができたのである。

メンシエヴィキは自由主義者に何を要求したか？ 彼は次の条件の下に自由主義者を支持することに同意した、即ち『……第一に、この流派（即ち自由主義者——ヤロスラフスキー）が専制政

府に對する自己の闘争において決定的にロシア社會民主黨の側に立つことを明瞭且つ斷乎として聲明すること、第二に、彼等が自己の綱領の中に労働者階級および民主主義一般の利益に反對しまたは彼等の意識を暗くする要求を掲げざること、第三に、彼等が普通、平等、秘密および直接選舉權を自己の闘争スローガンとなすこと』。

この問題についてボルシエヴィキは第二回大會において何を要求したか？ 彼等は、この問題において當時メンシエヴィキと一致しなかつた（黨規約の問題におけるが如く）ブレハーノフの提議を支持した。我々ボルシエヴィキは第二回大會において、次の如く述べられた決議を支持した、即ち我黨は『……ブルジョアジの解放運動の制限と不十分とを、この制限と不十分とが何處で現はれようとも、到るところで、プロレタリアートの前に暴露する義務を負うてゐる』と。

我々はメンシエヴィキに向つて、ブルジョアジが何でも好きなことを約束しうることを、彼等は労働者階級の最も公平な要求を言葉の上で支持することを極めて『決定的に』聲明しうるが、これが彼等に有利になると、彼等が労働者階級をすべての革命において裏切つたやうに、裏切るであらうといふことを語つた。

かくして、自由主義者が階級闘争において何物にも値しない眞面目臭つた約束を與へるなら、

メンシエヴィキは彼等を支持する約束によつて自己を拘束した時、ボルシエヴィキは彼等に對して革命的な方針を選んだ。自由主義者の徹底的な反對派的民主主義運動の支持を拒否することなしに、ボルシエヴィキは、自由主義ブルジョアジーに對して救助的な不信を表明しつつ、彼等に對して常に用心深くあるべきことを労働者階級に提議した。だから第三回黨大會においてボルシエヴィキは、その中に前記の自由主義者支持の三條件を含んだ（舊教徒の）決議の部分の廢止を達成したのである。

第二回大會と社會革命黨員（エス・エル）

第二回大會は社會革命黨員に對する態度に關する決議を採用した。社會革命黨員、即ちエス・エルは、一九〇〇年代の初め學生および農民層の中における革命運動の躍進と共に出現した。彼等はナロードニキの最悪の誤謬、即ち歴史的発展行程に關する彼等の誤つた理解、農民層の意義に關する彼等の正しからざる評價、歴史における個人の役割に關する彼等の全く維持され難い學說を復活させた。この學說に従へば英雄と群衆とが存在する。英雄または『批判的に思惟する人物』は歴史を作り、群衆はただ従順な道具である。だから彼等は政府の手先に對するテロル（威嚇）

手段による個人的な闘争に對する過大な期待をもまた復活させたのである。我黨は『社會革命黨員』に對して闘争を行つた、それは『人民の意思』黨の不成功的な企圖の反覆の危険を見たのである。然るに自由主義者は自己流に彼等を支持しようと用意してゐた。自由主義者はすでに當時社會革命黨員において自己の親しい兄弟を感じてゐた。或る政治家の定義に従へば、テロリスト・社會革命黨員と自由主義者との間の差異は、社會革命黨員が『我々に憲法を與へよ、然らざれば我々は射つであらう』といひ、自由主義者が『我々に憲法を與へよ、然らざれば我等（エス・エル）が射つであらう』といつた點にあつた。社會革命黨員の傾向と目的は、一九一七年の革命が示したやうに、ブルジョア民主主義的方策以上に出でなかつたが、ただ彼等は自由主義者よりも決定的、革命的な手段を使用しようと用意してゐただけである。

社會革命黨員は當時農民層のうちに若干の影響を持ち、そして勤勞人民に關する曖昧な説教を支持し、この『勤勞人民』の内部における階級および階級闘争の存在を隱蔽した。労働者階級においては社會革命黨員は著しい影響を持たなかつた。けれども多少の影響を彼等は持ち、そして特に農村と結びついてゐた若干の労働者は、心から社會革命黨員を信じてゐた。テロル、即ち專制政治に對する英雄・テロリストの個人的闘争は、農民および労働者、そして特に青年學生の一

部に、これらの英雄が人民を擁護し且つ人民をツァールの恣意から救済するのだ、といふ欺瞞的な期待を植ゑつけた。

我々は、社會革命黨が革命運動に害毒を齎すものである、と認めた。そこで第二回大會においては社會革命黨員に關する決議が採用され、その中で社會革命黨員はブルジョア民主主義フラクション以上のものでないこと、それに對する社會民主主義者の側からの原則的な態度はブルジョアジーの代表者一般に對するものと異つたものたりえないことが認められた。だが社會革命黨員が社會主義の旗を以て欺瞞的に進出したことは、大會をして『彼等の活動がただプロレタリアートの政治的發展にとつてのみならず、絶對主義に對する一般民主主義的闘争にとつてもまた危険』なことを認めさせた。革命的でなかつた自由主義的ブルジョアジーと異つて、ブルジョア・フラクションの一つたる社會革命黨員は、小ブルジョアジーの民主主義的利益を反映した。

後年のすべての事件は、我々がこの評價において如何に正しかつたかを示した。社會革命黨は十月革命の後、白衛軍の兵士やコルチャクの兵士や、ウランゲルおよびデニキンと共に、労働者・農民國家に反對して、労働者階級の敵の陣營に見出された。このことは勿論、社會革命黨員の中に勤勞者の利益に献身した人々がなかつたこと、小ブルジョアの革命家たる彼等が決して革命的

闘争を行はなかつたことを意味しない。彼等が農民大衆および部分的には労働者大衆と結びついてゐた限りにおいて、彼等はこの闘争を行はずにはゐられなかつた。しかし大體において革命における社會革命黨の意義は、革命をブルジョア民主主義國家の埒内に維持しようとしたブレーキの意義であつた。だがメンシェヴィキ黨もまたかくの如きものであつたのである。

中央機關の選舉。組織的分裂

現在では大會が黨中央委員會を選舉する。黨中央委員會は或る大會から他の大會までの最高の指導的黨機關である。その外に大會は中央統制委員會(ツェカー・カー*)を選舉する。これは全黨員および個々の黨機關に對する最高統制機關である。黨中央委員會は更に自ら中央機關紙(『ブラウダ』)の編輯部を選舉(任命)する。

* 審査委員會をもまた。

當時黨中央機關は別の仕方で構成された。第二回大會はただ中央委員會のみならず、中央機關紙(『イストラ』)編輯部をもまた選舉した。『イストラ』は第二回大會前においては同時に今日の黨の中央委員會であり且つ中央機關たるものであつたことを忘れてはならぬ。『イストラ』はただ

黨の印刷された機關紙、主要な中央黨新聞たるのみならず、『イストラ』編輯部は第二回大會前には黨中央委員會の役割をも遂行した。第二回黨大會が開會されて、我々が見たやうに、幾多の問題について（黨綱領の問題についても、自由主義者に對する態度の問題についても、規約の問題についても）右翼への動搖を暴露した時、ブンド派や經濟主義者の退席の後に形成された大會の多數派の前には、レーニンとボルシエヴィキとが表現した流派の影響を如何にして強化するか、といふ問題が生じた。ブレハーノフは第二回大會において多くの問題についてまだボルシエヴィキの方針（自由主義者に關する問題についても黨規約の問題についても）を支持したが故に、レーニンは、最初だけでも、『イストラ』即ち中央機關紙に對する指導を確保することについて配慮した。レーニンの提議によつて『イストラ』へは編輯者としてレーニン、ブレハーノフおよびマルトフが選舉されたが、中央委員會へはただ三人のボルシエヴィキ、即ちレングニク、クルジジャンフスキーおよびノスコフが選舉された。『穏和な』イストラ派は中央機關紙の成員にもこの六人が全部、即ちブレハーノフ、レーニン、アクセリロッド、マルトフ、ポトレソフ、ザスリッチが選舉されるべきことを提議した。大會が多數を以てこの提議を否決して、レーニンによつて提議された三人が選舉された時、マルトフは中央機關紙の成員に入らないことを聲明した。この問題について大會は分裂し、そして『多數派』（ボルシエヴィキ）と『少數派』（メンシエヴィキ）とが形成された。

中央委員會と中央機關紙との間の可能的な論争問題の解決のために、中央委員會から二人、中央機關紙から二人、そして五人目の委員は大會によつて選舉されたところの、黨評議會が作られた。黨の中央機關紙がかやうな嵩ばつた構成によつて特徴づけられたのは、主として、舊ツァール制度の條件の故に、ロシアで活動した實際機關としての中央委員會は、容易に失敗するかも知れず、そしてその時には中央機關紙が事實上黨を指導し續けたからである。今やメンシエヴィキの指導者——マルトフ、アクセリロッド、ポトレソフその他の間の大往復書簡集が出版されてゐる。メンシエヴィキが二つの部分への黨の分裂の不可避なことを眼中において大會に臨んだことが、この往復書簡集から見られる。だから彼等は手段を選ばなかつたのである。しかしこのことは彼等が分裂行爲を以てボルシエヴィキを非難することを妨げなかつた。特にこの點で特徴づけられたのはエル・トロツキーであつて、彼はレーニンを『分派的行爲の親分』および『我黨の反動派の首領』と非難した。

その後中央委員會の成員は變化した。即ちそれにはレーニン、エル・ベー・クラシン、ガリペリ

ン、ゼムリヤチカ、エム・ローゼンベルグ、グサロフ、ドゥプロヴィンスキー・イン（インノケンティ）、ヴェ・カルポフ、アー・リュビモフ（マルク）が互選された（即ち選挙なしに入れられた）。

第二回大會の總結果

第二回大會は、労働者階級がブルジョア民主主義革命の益々活動的な力となつたところの、益々成長する革命運動の情勢の下に開催された。第二回大會は、革命的農民層がすでに政治闘争の舞臺に進出した時代に、都市および農村の少ブルジョア階級の諸層のうちに革命的昂揚が始まつた時代に、一方では革命的マルクス主義者、他方ではブルジョア民主主義者のプロレタリアートに對する影響獲得のための闘争がすでに十分明瞭となつた時代に、あれやこれやの間においてメンシエヴィキが中間的妥協的な立場を占めようと試みた時代に開催された。

第二回黨大會は獨立の黨としてのボルシエヴィキの存在の基礎を据えた。「最初、——とレーニンは書いた、——我黨は形式的に組織された全體ではなくて、ただ個人的グループの總和であり、従つてこれらのグループの間には、觀念的影響以外の關係はありえなかつた。今や我々は組織された黨となつた、*」と。爾來ボルシエヴィキは自己の名で進出した。黨の生活においてはその後、

黨がメンシエヴィキとの統一戦線の樹立を試み且つそれとの一時的、形式的統一にさへも進んだ瞬間があつた。しかし第二回大會以來マルクス主義の革命派は特殊な黨——ボルシエヴィキの意義を獲得した。ボルシエヴィキは一定の自己の組織的方針を擁護した。ボルシエヴィキは自己の戦術を仕上げ、それを先づ第二回黨大會において定式化し、次いで第三回黨大會においてそれを一層正確に規定した。第二回大會は黨に綱領、規約および革命的戦術の最も重要な諸問題に關する決議を與へた。ロシアにおける革命が労働者階級の革命運動として勝利しうる、といふ思想は、ボルシエヴィキによつて實現された。一九〇三年の第二回大會においては黨のすべての觀念的荷物物の最初の大檢閲が行はれた。労働者階級の組織における諸流派の基本的配列が行はれた——一方ではボルシエヴィズム、他方ではメンシエヴィズムとメンシエヴィズムの特殊な流派としてのトロツキー主義。大會前および大會自體において現はれたこの意見の相違は、多くの人にはこの時非本質的なものゝ如く見えた。展開されつゝある革命的事件に當面して多くの人には、この意見の相違を容易になくすることができる、それは深刻なものではないかの如く見えた。けれどもその後の革命史、その後の黨史は、すでにイストラ編輯部において始まつた意見の相違が黨内におけるその後の闘争のうちに繼續され且つ第二回大會において二つの黨の形成に導いたことを示した。

その後共産インターナショナルが設立された時、黨の構成のボルシェヴィキ的な組織的基礎が謂ゆる二十一ヶ條の共産インターナショナル加入條件にそつくり入つたことを指摘することは、極めて重要である。共産インターナショナルの規約第三條には黨員の資格を次の如く規定してゐる、『當該共産黨および共産インターナショナルの綱領および規約を承認し、下級黨組織の成員となり且つその中において積極的に活動し、黨および共産インターナショナルのすべての決定に服従し且つ黨費を規則正しく支拂ふ者は、すべて共産黨および共産インターナショナルの成員となることができる』と。

プロレタリアートの獨裁や、プロレタリアートと農民層との民主主義的獨裁への道や、農民層と革命におけるその役割や、自由主義的ブルジョアジーに對する態度の如き、基本的な綱領的および戰術的諸問題を廻つて第二回黨大會に行はれた闘争は、その後黨において行はれたことのうちの多くを説明する。第二回黨大會は、レーニンが著書『何を爲すべきか？』の中に書いた社會民主主義運動の發展の最初の三つの時期を總決算した。だから第二回黨大會の詳細な研究は、ボルシェヴィキ黨史を根本的に知らうと欲するすべての人にとつて、特に必要である。

『イスクラ』は、我々が見たやうに、第二回大會前に極めて重要な歴史的任務を遂行した。それ

は黨の集團的組織者であつた。それは『離散と動搖』の時期を清算することを助け、黨を設立することを助けた。それは綱領を作成した。それは労働者黨の組織および戰術の最も重要な諸問題を研究した。それは黨の革命派と日和見主義派、改良主義派との間の意見の相違を定式化した。第二回黨大會の主要任務は、『イスクラ』によつて提起され且つ研究された原則的および組織的基礎の上に眞實の黨を設立したことに*あつた。

*レーニン、一步前進二歩退却。

一九〇一年チューリッヒに國外社會民主主義グループ、即ち『イスクラ』と『ザリヤー』、革命的組織『ソチアール・デモクラート』、『労働解放』團、『闘争』團、『ロシア社會民主主義者同盟』およびブンド國外委員會の大會が召集された。

すでに國外グループのこの聯合大會において『ロシア革命的社會民主主義國外同盟』とラボーチエ・ディエロ派的改良主義的組織との鋭い分界が行はれた。レーニンはこの分界において大なる役割を演じた。

ロシアの國內においては『イスクラ』が、經濟主義者に對して闘争を行ひつゝ、大多數の黨委員會およびグループを統一した。この統一前例へばペテルブルグには五つの獨立的社會民主主義

組織が存在したことを想起すれば十分だ。『イスクラ』の観念的役割は、『イスクラ』に加入した組織の組織的統一によつて強化された。

『イスクラ』を廻るロシアにおける地方組織の統一事業において大なる意義を持つてゐたのは、『イスクラ』のエジントの活動であつた（エル・エス・ゼムリヤチカ、エフ・ヴェ・レングニク、ペー・アー・クラシコフ、ゲー・エムおよびゼイ・イー・クルジジャンフスキー、イェ・デー・スタソワ、クニボヴィチ、アー・イーおよびデー・イー・ウリヤノフ、ヴェ・ペー・アルツイブシエフおよびデー・イー・オクロフ、イー・イー・ラドチenko、エム・アー・シリヴィン、ヴェ・ペー・ノギンその他）。多くの地方大會が第二回大會前に開かれ、そして第二回大會を準備し、それに對してボルシェヴィキ派の影響を確保した。

第二回黨大會で行はれた分界、日和見主義者との分裂は、黨の設立事業への決定的な歩みであつた。俗物的、日和見主義的の凡俗的氣分を有する運動参加者はこの分裂に關聯して不平をこぼした。『多数派と少数派との分離は、——とレーニンは分裂に關聯して書いた、——革命派と日和見主義派、山嶽黨とジロンド黨*との社會民主主義の分離の直接且つ不可避的な繼續であつて、それはやつと昨日現はれたものでもなければ、たゞロシアの労働者黨のみに現はれたもので

もなく、また確かに明日消滅するものでもない**』。『何といふ立派なものだらう、我々の大會は！……公然の、自由な鬭争。意見は發言された。陰影は描き出された。グループは印づけられた。手は上げられた。決議は採用された。段階は劃された。前進！***』

* 山嶽黨とジロンド黨——フランス大革命における左翼と右翼。

** レーニン、第六卷、二七二頁。

*** 同上、二七四頁。

俗物的、凡俗的氣分を有する運動参加者はレーニンを『偏執』の故に攻撃した。レーニンはブレハーノフ、ザスリッチ、マルトフ、アクセリロッド、ポトレソフの如き當時の最大の名前と訣別したではないかと。正に同じ日和見主義者が、その後、レーニンの死後、中央委員會を、特に同志スターリンを日和見主義者に對する同じレーニンの『偏執』の故に、トロツキー、ジノヴィエフ、カメネフその他に對する同じレーニンの無慈悲の故に攻撃した。だが日和見主義者とのこの鋭い分界、分裂、分離なくしてはレーニンの黨は存在しなかつたであらう。この分離の重要性を同志スターリンは第十五回黨大會の結語において次の如く回想した——

『一九〇三年、我黨の第二回大會の時期を取つて見よう。これは自由主義者との妥協から自由主義的ブルジョアジーに對する生死の鬭争へ、ツァーリズムに對する鬭争の準備からツァーリズム

および封建制度の完全な粉碎のためのツァーリズムに對する公然の闘争への轉換期であつた。黨の先頭には當時六人、即ちブレハーノフ、ザスリッチ、マルトフ、レーニン、アクセリロッド、ポトレンフが立つてゐた。轉換はこの六人中の五人にとつては運命的であつた。彼等は手押車から滑り落ちた。レーニンはただ一人になつた……五人に對するレーニンの決定的闘争なくしては、五人の驅逐なくしては、我黨がプロレタリアを革命に導きうるどころのボルシェヴィキ黨として結成されえなかつたであらう、といふことは、今やあらゆるボルシェヴィキにとつて明瞭だ*』と。

* 全ソ聯邦共産黨第十五回大會。速記報告、三七八頁。

第二回大會から一九〇五年の革命の初めまでの時代における黨内生活の概観

そこで第二回大會（一九〇三年）から革命の初めおよび第三回大會（一九〇五年四月）までの期間における社會民主黨の生活の中から最も重要な事實を敘述する必要がある。この期間はボルシェヴィズムの歴史において最も重要な意義を持つてゐる。この期間における黨と國外におけるその中央部との生活は、個人的争闘によつて紛糾された、最も緊張された分派争闘の極めて困難な

條件の下に過ぎ去つた。かゝる條件の下において、レーニンの行動方針、彼の戦術および自己の思想や、黨の統一や、黨大衆のための闘争方法は、ボルシェヴィズムの基本的特徴を明瞭に表はした。

大會後直ちにメンシェヴィキは大會の決議に對して闘争を開始し、秘密の分派的中央部——アクセリロッド、マルトフ、ダン、ポトレンフおよびトロツキーより成る『少数派局』を組織し、ジュネーヴにおいて第二回大會の十七人の少数派の支持者の三日間の協議會（一九〇三年九月）を召集した。この行動の意味はただ一つであつた——レーニンを否認すること、大會で設立された黨中央部の黨活動の破壊をも顧慮しないことであつた。メンシェヴィキの鐵面皮は次の點にまで達してゐた、即ちブレハーノフがダンの協議において大會の決議に同意した時、ダンは、自分達はただ素朴な人々に對してのみ義務を負うてゐるのだ、——事情に通じてゐる者はそれに微笑（『山師の微笑』）を以て對させるを得ない、と。その後『革命的社會民主主義者同盟』大會は情勢を變化させた。同盟はその大多數を以て中央委員會および第二回大會の決議に反對派的にメンシェヴィキ的立場を取つた。レーニンに對しては組織問題に關する彼の立場の故に非難が表明され、第二回大會の活動のメンシェヴィキ的評價を伴ふ決議が提出された。ブレハーノフはどこまでも和

解と少数派に對する讓歩とを要求し始めた。次いで彼は中央委員會に一つの要求を——補缺選舉即ち『イストラ』編輯部に舊編輯者を包含させること、中央委員會へ四人のメンシエヴィキ、評議會へ二人を補缺選舉すること——提議した。レーニンは、黨中央委員會を強化し、この地位から日和見主義者を撃破するために、中央機關紙の成員から脱退した。レーニンが『イストラ』編輯部から去つた後、ブレハーノフは自己の形式的な権利に基いて獨斷的に四人のメンシエヴィキを中央機關紙へ補缺選舉した、それらのメンシエヴィキは大會によつて選舉されなかつたけれども。ブレハーノフは短期間ボルシエヴィキの許に滞在した(第二回大會)後メンシエヴィキへ復歸した。メンシエヴィズムの一般的立場からブレハーノフは今やレーニンおよび第二回大會の決議を攻撃した。この後レーニンには第三回大會召集計畫が決定的に熟し、彼は中央委員會内においてその召集のための闘争に着手し、黨評議會議長ブレハーノフをこれに賛成させようとしたが、不成功に終つた。一九〇四年一月黨評議會議が開催された。分派的な意見の相違を絶滅する必要や、中央諸機關のボイコットの許すべからざることや、大會の決議に服従する義務や、黨の規律に關するレーニンの決議は、メンシエヴィキ——ブレハーノフ、マルトフおよびアクセリロッドによつて否決された。彼等は中央委員會にメンシエヴィキを代表させる必要に關する決議を過過させた。レーニ

ンとレングニク(クルツ)はその時評議會のこの種の反黨的政策の有害なことおよび第三回大會の召集の必要に關する聲明書を提出した。けれどもこの時中央委員會委員は日和見主義者メンシエヴィキに對して和解的立場を取り、そして自己の成員に三人のメンシエヴィキを補缺選舉した。レーニンは中央委員會内部の和解派に對して闘争を行ひ、黨の隊伍におけるメンシエヴィズムの手先としての彼等の立場を暴露した。

この時期のメンシエヴィキ的イデオロギーを知るためには、アクセリロッド、トロツキーおよびブレハーノフの見地が最大の興味を呈してゐる。すべてにとつて一般的特徴的な特性は、組織問題の重要性の否認である。組織問題におけるかゝる日和見主義が、どんなものであるかを知らない、ごアクセリロッドはいつた。レーニンはかう答へた、第一の特徴的な特性は、組織問題に對する日和見主義的態度であつて、その時人々は労働者階級の戰闘的組織の設立を考へない。第二の特徴的な特性は、戰闘力としての黨に對するボルシエヴィキ的見解の否定である。第三の特性は、舊『イストラ』の政策と中央集權との拒否である。ご。アクセリロッドは、プロレタリアートの黨はまだ存在しない、現存する組織はたゞ革命的インテリゲンチヤの中のプロレタリアートの原則上の支持者にすぎない、ご考へた。ブルジョア革命が必要である、都市ブルジョアジーがプロレタリア

ートの援助の下にそれをなすであらう、然る後眞實の、即ち廣汎且つ合法的のプロレタリア闘争が展開される、そしてすべての階級がその中に吸引されなければならない、と。こゝにメンシェヴィキは新しい諸條件の下に、レーニンの『イスクラ』によつて暴露された經濟主義者の立場を反覆したのである。

トロツキーは、第二回大會におけると同様に、大會の後もメンシェヴィキのアクセリロッドと全然同じ歩調を取つた。彼もまた綜合、即ち革命的社會民主主義的および社會主義的目的の組織的統一が、如何なる『謎』であるかを『理解しなかつた』。彼は組織問題に何等の意義をも與へず、そしてその重要性の否認を意としなかつた。彼は中央集權に關するレーニンの觀念を『驚くべき貧弱な觀念』であると考へた。黨の隊伍に一切の労働者階級が包含されることがプロレタリアートの獨裁の獲得の可能な必要前提條件でなければならぬ、とトロツキーは日和見主義的に考へた。彼はプロレタリアートのヘゲモニーの下におけるブルジョア革命の意義を理解せず、そして具體的な行動綱領においてはゼムストヴォ運動のメンシェヴィキ的計畫を豫想した。

ブレハーノフのメンシェヴィキへの轉向は勿論偶然ではなかつた。『イスクラ』編輯部における綱領のための論争においてブレハーノフが、メンシェヴィズムの觀念的内容に全く入るところの多

くの觀念を發展させ且つ擁護したことは、我々がすでに見たところである。ブレハーノフは土地の國有化に反對し、農民層の役割を理解しなかつた。だが重要なことは、たゞレーニンの強化された壓迫の下においてのみ彼がプロレタリアートの獨裁に關する條項を綱領に入れたことである。すべてこの問題についてメンシェヴィキはブレハーノフの方針を繼續した。しかしメンシェヴィキへの移行——復歸といふのが一層正しいであらう——において若干の役割を演じたのは、なほ一つの事情、即ちロシアの革命的闘争の諸條件から彼が離れてゐたことである。ブレハーノフは、大會において現はれた意見の相違は重大なものではなく、『小兒的なもの』だ、と彼は考へる、と聲明した。彼は組織問題に意義を與へず、ボルシェヴィキに同情すること少く、そして黨の統一のために『何はともあれ』全くメンシェヴィキ的活動の水路に振り向き且つ流れこんだ。ブレハーノフは、自己の名前の權威をメンシェヴィキに與へることによつて、それを實際に援助した。しかしメンシェヴィキのバルヴスの表現に従へば、『日和見主義の定型は決してその表現形態の多様性を制限するものではなくて、助長しさへする』。意見の個人的陰影のあらゆる多様性にも拘らず、新『イスクラ*』とメンシェヴィズムとの役割は、全く黨の革命的役割の破壊に、武装暴動およびその準備の意義の縮小に歸着した。メンシェヴィキの理論的活動と並んでその實踐的解黨者の活動が進行し

た。メンシエヴィキは、一九〇三年の中頃以來、すべての縣委員會に對して決定的な攻撃を行つた。黨評議會は、全權を有する中央機關紙制度を作り出したところの決定を通過させた。中央機關紙は多量の文献や貨幣を受取り、そして『イストラ』の權威を利用して、中央委員會とは別箇に、秘密の連絡によつて、委員會の占領のためにあらゆる可能なことをなした。モスクワにおいては秘密のメンシエヴィキ中央部が作られ、ペテルブルグにおいては示威運動が決裂せしめられ、オデッサおよびエカテリノスラフにおいては委員會が簡單に占領された。

かくして事實上第二大會後は、その指導的中央部と地方黨委員會、自己の中央機關紙を有する二つの黨が存在したのである。

* 『イストラ』は、レーニンが編輯部からおよびアレハノフによる四人のメンシエヴィキの補缺選舉から退去した後、第五十三號以後メンシエヴィキのものになつた。

トロツキー主義の端初。第二回大會およびその後におけるトロツキー主義

九〇年代の終りにトロツキーは、その後『南露労働者』の組織に合併されたニコラエフ市のサ

ークルの組織に参加した。トロツキーはシベリアのイルクーツク縣へ追放された。そこから彼は外國へ亡命し、『イストラ』に参加した。レーニンは明るく且つ軽く書く能力の故に彼に『ペロー』（ペン）といふ呼名をつけた。暫くトロツキーはレーニンに接近した。一時反イストラ派は彼を『レーニンの混棒』とさへ稱した。けれども間もなく、トロツキーの見解、彼の信念はメンシエヴィキの見解や信念に非常に近いことが分つた。このことは、すでに我々が見たやうに、第二回黨大會において暴露された。第二回大會における黨員をボルシエヴィキとメンシエヴィキに分けるならば、トロツキーはすでに當時メンシエヴィキであつた。トロツキーは第二回大會以後メンシエヴィズムの戰闘的立場に立つた。しかしメンシエヴィキではあつたが、トロツキーは、一九〇五年の革命の後他のメンシエヴィキとは少し相違し始め、當時言葉の上では或るものをボルシエヴィズムから取り入れ、ヨリ多くメンシエヴィキの側に傾きながら、妥協的な立場を占めようと試みた。トロツキーのこの方針——トロツキー主義——は、歴史の種々の時機において若干異つた方向を取つた。我々はそれを、トロツキーがすでにバルヴスやローザ・ルクセンブルグによつて提起された謂ゆる『永久革命』論（これについては後に一層詳しく述べよう）を發展させた一九〇五年においても、革命の衰微期、謂ゆる清算主義（これについてもまた後に一層詳しく説明されるであらう）

の時期においても、帝國主義戰爭時代においても、一九一七年二月と十月との間の或る時期においても見るのである。その後、トロツキーがボルシェヴィキ黨に加入した一九一七年後半においては、トロツキー主義は異つた色彩を取り、一九一八年ブレスト講和談判の時期においても、一九二〇—二一年の労働組合討論においても、一九二三年の黨内民主主義に關する討論においても、一九二四年の『十月の教訓』に關聯した第二の討論においても、自己の小ブルジョアの本質を表はし、その後、反革命的立場に移行して、一九二七年末には黨から除名され且つソヴィエト聯邦から追放された。然らばトロツキー主義は第二回大會においては如何なる點に現はれたか？

一、メンシエヴィク・トロツキーはメンシエヴィキ的な規約第一條の擁護のために進出した。トロツキーは、レーニンの提議、ボルシェヴィキの提議が、『黨綱領の基礎の上に立ち、そして黨組織の指導の下に個々人として黨に功献しうる』インテリゲンチヤの個々人を壓迫するかも知れない、といふことに特に注意を向けた。然るにレーニンは、遙かに重大な役割を黨においてプロレタリアートに確保しなければならぬことを證明した。

二、黨とプロレタリアートの獨裁とに對するボルシェヴィキの見解をトロツキーは當時プロレタリアートに對する獨裁と稱した。彼は當時、プロレタリアートの獨裁は、たゞ社會民主黨と労働

者階級とが同一物に最も近づく時においてのみ、可能であらう、といふやうに問題を理解した。しかし黨はたゞ共產主義の下においてのみ労働者階級と完全に融合するのであつて、プロレタリアートの獨裁のための闘争は、階級闘争の情勢の下に社會主義社會が建設される過渡期である——すべてこのことはトロツキーの定義によつて排除されたのである。然るにボルシェヴィキは黨の組織を全く別様に——プロレタリアートの獨裁のため、共產主義のための闘争におけるプロレタリアートの最も意識的な、革命的な先進的な部隊として、理解した。

三、トロツキーは中央集權的に建設された黨に反對した。かゝる黨の建設に關するレーニンおよびボルシェヴィキの思想をトロツキーは當時『驚くべき貧弱な思想』と稱した。

トロツキーは、黨内における規律に公然反對しつゝ、『貴族的無政府主義』を説教した。かゝるメンシエヴィキの見解をトロツキーは、彼が自己の『愛する先生ベー・アクセリロッド』に献じたところの小冊子『我々の政治的任務』において發展させた。これはトロツキーが第一革命の前夜に發表した眞實のメンシエヴィキ的宣言であつた。

第四章 参考文献

レーニン、一步前進二步退却。全集、第六卷、一五五—三三六頁。

レーニン、ロシア社会民主労働者黨第二回大會（レーニンの演説および決議草案）。全集、第六卷、一一三六頁。
 レーニン、ロシア社会民主労働者黨第二回大會の決議。全集、第六卷、三九八—四〇五頁。
 レーニン、ロシア社会民主労働者黨における分裂の概観。全集、第七卷、九一—九五頁。

第五章 一九〇五—一九〇七年の革命の性質お

よび推進力に對するボルシェヴィキの評

價（メンシエウキおよびトロツキー派に對する闘争）

第一革命の前夜における情勢。大衆的革命運動

如何にして労働者大衆が一九〇五年の武装暴動に到達したかを理解するためには、第一革命の前夜における最も重要な政治的出来事を叙述しなければならぬ。

一九〇〇年代の初めの産業恐慌はそれなくてさへ困難な労働者階級の地位を尖鋭化した。同盟罷業は益々明瞭な政治的色彩を帯びた。往々同情罷業が全地方を席卷した。労働者は資本の攻勢と自己の生活条件の悪化とに對して闘争しなければならなかつた。労働者階級は政治闘争の必要の意識に益々貫かれた。

學生運動は労働者階級に支柱を求めた。學生層は、労働者階級における成長しつつある革命的